

333.3-P94ㄗ



1200500737980

333

94

(ㄗ)

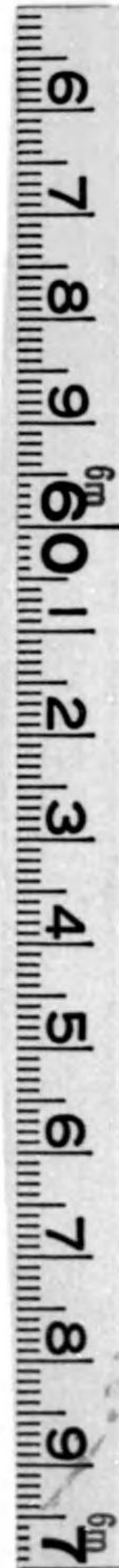
一五六號

昭和十八年六月

エス・エヌ・プロコボーグイッチ著

戦争と国民経済

外務省調査局



始





333,3  
P94

はしがき

發行所寄贈本

本書はエス・エヌ・ブロボコヴィツチ著「戦争と國民經濟」一九一七年モスクワ刊 (С. Н. Икономия, «Война и народное хозяйство», Москва-1917) の全譯である。

著者セルゲイ・ニコラエヴィツチ・ブロボコヴィツチ (一八七一年) は 大戦前の帝政ロシアにあつても著名な經濟學者の一人に算へられ、特に一九一七年の革命直後ケレンスキーの臨時政府には食糧相として閣員に列した。後ソヴェト政權の樹立とともに亡命し爾來「ブラーグ」において自らソ連研究所を設け Quarterly Bulletin of Soviet Russian Economics を發行してゐたが、その故國に對する豊富な經驗、知識に立脚したソ連經濟に關する調査乃至研究はソ連關係識者間に相當高く評價されてゐる。

本書は著者が未だロシアにあつて、第一次大戦によるロシア經濟の所謂崩壊過程を親しく觀察し、戦争の經濟に對する影響を具さに分析し、もつて當時の政府當局の施策に對して若干の警告と批判とを寄せんとしたものであり、資料的見地からも貴重な文獻と謂ふことが出來よう。

一般的には第一次大戦と今次大戦との間に、また特殊的には當時の帝政ロシアと現在のソヴェト・





二  
ロシアとの間には、もちろん戦争及び経済の諸条件において大なる相違と懸隔が存するのであるが、當時の状態と現在の情勢とを比較考量することは、種々なる意味において多くの關心に應へ、また幾多の示唆を與ふるものと思はれる。

昭和十八年六月

外務省調査局第二課

目次

第一章	戦前の戦争經濟觀……………	一
第二章	戦費とその財源……………	三七
第三章	戦時の外國貿易と留相場の低落……………	一三
第四章	生産と勤勞者の經濟状態に對する戦争の影響……………	一七
第五章	運輸・信用及び商業に對する戦争の影響……………	三五
第六章	戦後の經濟的展望……………	二八五

975  
156

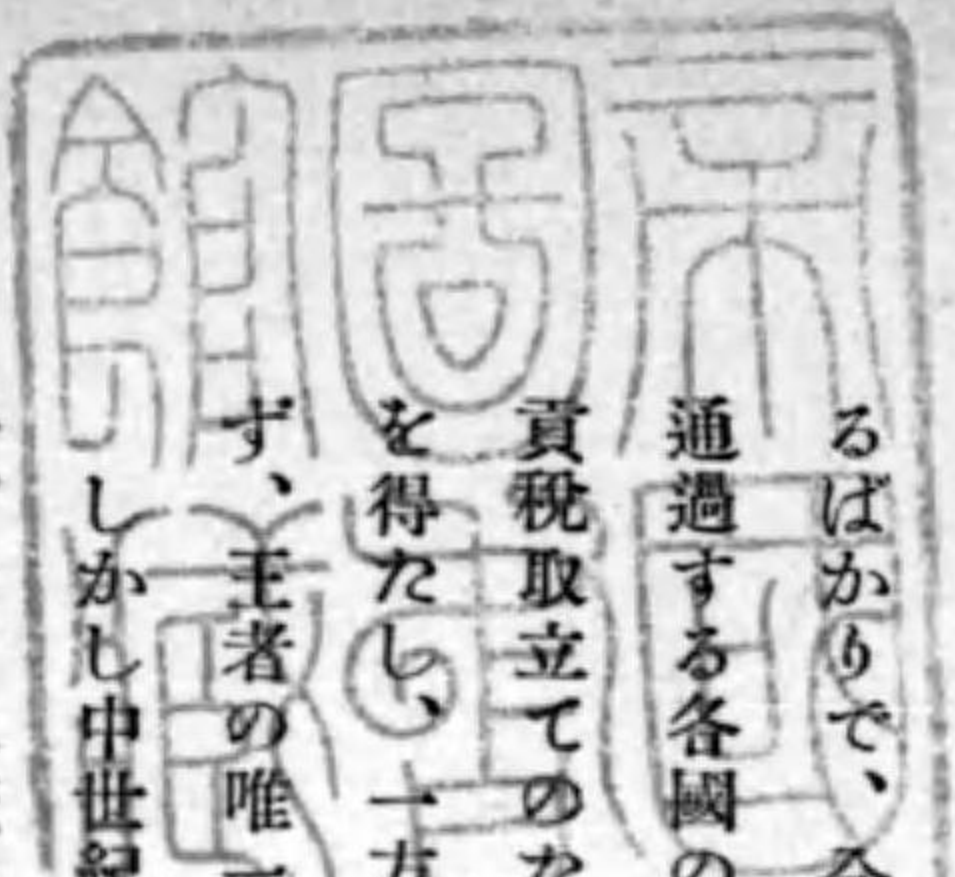


# 戦争と國民經濟

## 第一章 戦前の戦争經濟觀

各國の軍隊が僅少で、その數も數萬人を超えなかつた頃には、戦争は軍事行動の舞臺を荒廢せしめるばかりで、全國の國民經濟に對しては輕微な影響を及ぼすにすぎなかつた。その當時、軍隊はその通過する各國の資材によつて生活することを得た。戦利品の獲得、裕福な都市の掠奪、被征服民族の貢税取立てのために、遠征を企てることも屢々であつた。實際、その當時には戦争が戦争を賄ふことを得たし、一方國家は殆んど軍事費の負擔を感じなかつた。國家の財政的戦争準備は全く問題にならず、王者の唯一の關心事は多數の裝備優秀な軍隊を備へるといふことであつた。

しかし中世紀末になると、もう適法の劫掠のこの黄金時代は、純粹の經濟的諸原因によつて終りを告げた。火銃の使用と絶えず軍に彈藥を補給する必要は、絶えず母國との連絡を保つことを必要ならしめた。次に軍隊の兵數が増加したことは、食糧品の輸送をも不可避ならしめた。グスタフ・アドルフは三十年戦争中に、まことに容易に軍隊の食糧補給のいはゆる倉庫制（マガジン・システム）を施





行した。戦争は國家の歳入項目から歳出項目に移つた。貨幣は戦争の神經となつた。軍事技術の諸問題は、經濟的及び財政的諸配慮のため煩雜を加へた。そして軍隊が大きくなればなるほど、財政的戰闘準備の問題はいよいよ重要性を帯びるに到つた。ことに鐵道網の發達以來、經濟的契機の重要性が大きくなつた。この鐵道網による時は、自國産のあらゆる資材の補給を受くる軍隊の數を巨萬の多きに達せしめることが出来る。實にこの鐵道のおかげで軍隊は武裝國民となつたのである。最近百年間に軍事上どれ位の變化が起つたかは、現代の各國軍とナポレオン一世の「大」軍との兵數を簡單に比べてよく分かる。一八一二年ナポレオンは四十萬の軍隊を率ひてロシアに侵入し、これに對して十八萬のロシア軍が抵抗した。モスクワ附近でナポレオン軍は十三萬人になるまで潰滅した。これに比し現下の戦争では、交戦双方を通じて、約二千萬人が參戰してゐるのだ。

現在、財政的戦争準備の重要性が如何に大きいかは、ロシア財政史上の次の一事件が明瞭に示してゐる。一八八八年、大藏大臣グイシネグラドスキーは、陸軍大臣の新規要求を反駁する一八八八年四月の上奏文に次のやうに書いた。「假令、兵制において多少の欠陥ありとも、國民の健全なる財政状態なるものは、武裝衝突に際しては、國民の經濟状態崩壊に類したる如き場合の下における軍の完全なる戦争準備に比べて、より以上に、大きな利益を齎らすものにして、經濟状態崩壊に類したる場合には國民は如何にその生命と財産とを捧げんと欲すとも、祖國の祭壇に捧げ得るは生命のみにして」、國

家の必要とする資金を調達することを得ず——即ち茲に皇帝陛下に對し「この臣が確乎、明白かつ深き信念をば披瀝する義務ありと愚考する次第なり。」(註一)この經費節減の必要と國民財産に對する細心の態度に對する要請は全く徒勞に終つた。といふのは政府は一八八八年以後になつても、從來と同じく、財政的戦争準備の必要を全く無視して、技術的戦争準備の増大に全力を注いだからである。

(註一)「一八〇二—一九〇二年の大藏省」第二編、三〇八頁

かやうに戦争のためには、よく武裝した軍隊が必要ばかりでなく、金も必要である。最近三世紀來、各國の爲政者は、戦争に必要なのは金だ、金だ、金だと好んで繰返して來たのである。

しかし金だけでは充分とは云へない。國庫には黄金が一杯つまつてゐても、國內には軍隊の用を勤むべき鐵道もなく、よく發達した農工業もなければ、その軍隊は宿命的に敗北を喫し、戦争は負けとなるであらう。國家が支出するはむろん貨幣ばかりである。しかし國家の背後には國民と國民經濟が控へてゐて、その支出は遙かに複雑である。

參戰者の數が數萬乃至數十萬にすぎなかつた頃は、國庫支出が支配的であつたと云ふことも出来よう。しかし今回の戦争では、交戦双方から數千萬の軍隊が參加し、既に二ヶ年以上の永きに及んでゐて、諸國家の戦争といふより、諸國民の戦争になつてゐるので、主たる重要性を持つものは國民經濟の支出である。この戦争は國民經濟戦争準備の重要性を残すところなく明示したのである。



戦争の経済的要因の問題及び國民經濟に對する戦争の影響の問題は既にわが國の言論機關で討議された。一八九八年にはイー・エス・ブリオフの「技術的・経済的及び政治的方面より見たる未來戦」と云ふ數卷に及ぶ大著が出版された。その第四卷の全部と、第二卷の數篇は、著者がその到來を期待し且つ恐れてゐた全ヨーロッパ戰の經濟面の分析に充ててある。

イー・エス・ブリオフの意見に従ふと、「現代の國民經濟機構の複雑な作用と、極限に達した分業の下において、戦争そのものが如何なる經濟的激動を齎すかは、想像もつきかねる。いふまでもなく、その國の文化が高ければ高いほど、その經濟機構が複雑となれば複雑なほど、その多くの機能における中絶はますます大きな激動を招き、國民經濟が蒙むる損失はいよいよ大となるのである。この損失は、住民の大多數が工場及び職場並に商業に従事してゐる國々において一段と大きく、農業人口を主とする國々において輕微なことは疑ふべくもない。軍隊に徴集される農民の家では、家族の用にあつべき農産物が僅かなりとも残つて居り、家業は主人の留守中に悪くはなるが、しかし軍隊に徴集された工場労働者の家族の生計の資たる賃銀が中絶するやうに全然中止されることはない。附加へて置くが、農業そのものも低位にあればあるほど、主人の留守のために生ずる損失が少いのである」。(註一)

(註一)「未來戦」第四卷、六頁

たとへばドイツにおけるが如き集約農法では、田圃が全然休息しないやうな輪作の仕組みで、つぎ

つぎに播種または植付を行ふので、仕事が遅れると直ちに、原始的農業制度の知らないやうな混亂を來たすといふのである。従つてブリオフは、ドイツでは次年度の收穫が著減するであらうと期待してゐた。この點ではロシアはドイツの正反對である。「この見地から見れば、ロシア農業の占める低位な發達水準ですが、ロシアの國防力を増大してゐるのである。初めから充分な耕作は加へてゐないので、放棄した田圃も荒廢することはなく、また人工的な土地改良設備など初めから無いだけに、これも損傷することはない。農民が戰場から歸つても、萬事舊態のまゝであらう。農民數の減少は土地の生産高には影響しない。祭日の數を制限するだけでも、戦争の齎す損失を償へるであらう」。しかるに、それにもかゝらず戦争はロシアの農民状態にも深刻な影響を及ぼしてゐる。彼等の必要とする金銭は、「一部は穀物の賣却によつて、一部は副業によつて農民の手に入るが、この副業のうちのあつるもの(たとへば工場の臨時稼)は戦時には中止される。この事情は農經營、大にしては農村住民の生活に重壓を加へてゐる。輸出の杜絶に伴ひ、穀物の需要が減少し、その價格が低落し、同時に地主も農民も収入が減少する。のみならず、穀物價格の尺度は常に穀物の海外輸出が決定してゐたのに、その輸出が杜絶するために、一層價格の變動を來すであらう。軍隊用穀物の買付は盛になるが、それでも輸出杜絶を償ふことは出来ない。その上、鐵道の運轉資材が軍隊及び軍用資材の輸送に忙殺されてゐるため、軍隊への穀物納入は極めて困難となるであらう。穀物以外のロシアの輸出品目は種子、



六  
亞麻、大麻、木材、豚毛、羊毛など主として未製品又は半製品であつて、これら輸出品と穀物を合すれば、總輸出高の八〇%に達してゐる。これら商品の海外輸出杜絶は、その國內取引に對し、穀物取引と同様の混亂を來すのである」。(註一)

(註一) 前掲書、四卷、三二一、三九四、一八一頁

工業に對する戦争の影響はこれと異つてゐる。「しかし戦争は實に商工業の大發展を見た諸國において特に重大な經濟的困難を呼起すに違ひない。交通の杜絶、賣行低下、信用梗塞の結果、工業界には沈滞を來たし、場合によつては完全な作業中止を來たすこともあり、それが直ちに多數國民を極端な状態に陥れるのである」。「普段の交通路が閉鎖し、需要が減退し、各種の不安が発生するにつれて、軍隊の必要とする生産部門以外の重軽各工場や、鑛山や、多くの職場は、その活動を中止せざるを得なくなるであらう。従つて住民の生活手段も直ちに減少し、日に日に低落を加へるであらう。この事情を考量すれば、戦争は幾百萬の人間から最も必要なパンの一片を奪ふものだと結論せねばならぬ。一方、多くの國家においては、輸送が停止される結果、あらゆる生活必需品の價格は信ずべからざるまでに昂騰するのである」。「これに比すればロシア工業に對する戦争の影響は比較的薄弱であらう。「ロシアにおいては、農業に比較すれば、例へば採取及び精製工業から生ずるが如き、他の國民所得はまだ僅かである。しかし大戦争となれば、これらの國民所得は大減少を來すであらう。軍需品生産

に關係のある諸部門においては、むろん操業は中止されないだらうが、外國の棉花その他の材料の海上輸送が杜絶し、石炭の輸送が困難を加へれば、多くの生産高は減少するに違ひない。なるほどロシアの工業は國內販路を目標に置いてゐるので、英獨佛の工業のやうに、交通杜絶のため市場を失ふことはあるまい。しかし市場の需要は、農業の無收益、一般に農業界の混亂が増大するだけ、低下することは必定である。ロシアの工業は主として、農民社會の需要を目標に置いてゐる。従つて、大きな凶作があるたびに、工業界には不振を起すのである。戦争の結果、農民の購買力が減少すれば、それが工業界で生産の大縮小となつて反映するのは當然である。その結果、安定のない貧窮した生活を行つてゐる労働者たちも、西歐に劣らぬ困難な條件下に置かれるであらう」。(註二)

(註二) 前掲書、第四卷、七、三六六、二六〇—二六一頁

かくの如く、ブリオフは國民經濟に對する戦争の影響の問題においては、國際的取引の杜絶に決定的意義を附してゐる。従つて、戦争による各國の損害は、彼の意見では資本主義經濟の發達が高いほど大きく、自然經濟制の國ほど戦争に對する抵抗力が大きいといふことになる。換言すれば、生産力の未發達が、戦争の悪影響から國民經濟を守る最良の手段だといふことになる。しかしながら陸上國境の閉鎖や港灣の封鎖による外國貿易の杜絶または極度の減少は、軍事行動の必然にして不可避なる結果ではないのだ。例へば現戦争において、ロシアとドイツは殆んど世界市場から切り離されてゐる



八  
が、イギリスとフランスは最も盛大にその外國貿易を續けてゐるのである。この種の戦争の影響は、交戦各國の地理的位置と軍事行動の進展に大いに依存するものであるが、別にこれと並んで、戦争の事實そのものと有機的に關連した國民經濟の力および手段の影響が在る。軍隊および軍事行動の國民經濟に對する要求が大きければ大きいほど、この種の戦争影響はいよいよ深刻かつ強烈となる。ことに幾千萬の軍隊が參戰してゐる現戦争において、その影響は特に強いのである。

これらの要求のうち主たるものは軍の兵員構成、兵器彈藥、食糧資材および運輸である。ブリオフは諸民族の戦闘において最大の重要性を持つものは食糧資材だとしてゐる。

氏の意見に従ふと、當面の戦争においては、「各作戦の進行及び結果の軍事技術的一面のみを取上げるばかりでは不充分である。従來の諸战役において行はれたことと違つて、今度の戦争は交戦國の一方が敵軍に對し多くの勝利を得たがために戦が停止されるのではなく、軍事機構の崩壊を原因として停止されるのである……戦争のもたらず經濟的及び社會的激動は、ほとんど凡ての成年男子を軍隊に徵集するため、また海上交通は杜絶し、商工業は不振に陥り、あらゆる生活必需品は價格が騰貴し、信用は破壊され、恐慌が起るために、極めて大きいに違ひない。それは、まさにあらゆる國家が軍事専門家の指摘する期間に互つて果して軍隊を維持し、豫算の要求を充たし、同時に稼業を失つた非戦闘員を養つて行くだけの資力を得ることが出来るであらうかといふ疑問の起るのも、蓋し當然な

ほどである。自國內の資材不足または交通杜絶や行政機關の缺陷のためその調達の時機を失ただけでも、軍隊の内部に饑餓と缺乏を來たすであらうが、これらは軍事行動以上に急速且つ危険なしに敵の目的を達せしむることゝならう。——「多くの軍事評論家は未來戦においては、戦闘といふたゞ一つの目的、唯一の考慮が何物にも先行するといふこと、『血のエネルギー』が唯一の配慮であらうといふことを、好んで繰返してゐる。しかしそれよりもさらに重要にして、これに先行し、且つこれを隨伴するところの或物、即ち食ふといふ卑俗な要求がある。軍隊給養の問題は、往々にして他のあらゆる問題の上に立つことがある。蓋し軍隊は數ヶ月に互つて戦闘を交へないこともあるが、四晝夜も物を食べないことはないからである」。ブリオフの結論は次のやうである。當面のヨーロッパ大戰においては、「充分の食糧資材を持ち、従つて國內紛糾の怖れなくより長期に互つて戦争に持ち堪へて行くことの出来る國家の方が優勢である」(註二)。従つてイギリスが最も危く、次はドイツで、ロシアの立場は豪勢なものだと云はねばならぬ。

軍に兵器彈藥を補給する問題や、運輸の問題は、ブリオフを不安に陥れてゐない。氏はこれらの問題の重要性を認めてはゐるが、これらの問題は極めて圓滑に解決出来ること云ふ確信を持つてゐる。氏の意見によると、「極めて重要な問題は、あらゆる國が休みなしにその兵器彈藥を更新する可能性を持つかどうかと云ふ問題である。この點では殆んどあらゆる國家が充分に保證されてゐる。イタリア、



トルコ及びルーマニヤを除けば、どの國にも兵器彈藥を生産する大工場が存在してゐるので、何れにせよ戦争は武器の缺乏のために停止される筈はない。ロシアにおいては「武器補充手段に關しては、他の工業部門が不振のため、労働者の不足は來さないと云ふことを念頭に置かねばならない。銑鐵及び鋼鐵の生産力は、充分急速に増大するので、この點においても困難を豫想してはならない」。プリオフ氏は我が國の小銃、銃彈及び大砲工場の設備の問題は全然計算に入れてゐない。氏の言葉によれば、ロシア軍は小銃も大砲も持たずに戦争出來ると云はん計りに、これらの問題を無視してゐるのである。少くとも氏は西歐のあらゆる國に對するロシアの戰略的優越性を列擧して、次の様に述べてゐる。「のみならず、ロシアに侵入した敵軍の兵數が如何に大きくても、ロシアは他のあらゆるヨーロッパ諸國の如く、一撃のもとにこれを撃破することは不可能である。ロシアの兩都を占領し、その常備軍の全部を撃破しても、ロシアからそれ以上さらに一層の抗戦力を奪ふことは出來ないであらう。他のあらゆる西歐諸國はこれだけの條件があれば、徹底的に撃破されるであらう。けれどもロシアでは敗殘部隊は遠隔な新中心地に集りこれを中心として數的に優れた新らしい軍隊が地中から成長し、全ロシアに新に戦闘力が燃え立つであらうが、その間無益な努力を拂つたために疲勞衰弱した敵軍は退却の餘儀なきに至るであらう」。(註一)

(註一) 前掲書、第四卷、二九七、二五九、一五四頁

しかし残念ながら、砲も銃も地中からは生えて來ないのである。これに就いては、我々は一九一五年の作戦に當つて、明白に悟ることが出來た。

プリオフ氏は我國の運輸狀況に就いてもこれと同様に圓滑に行くものと評價してゐる。氏は鐵道が軍隊及び軍需品の輸送に忙殺される結果、「もしも水運が非常に發達し、輸出杜絶後國內の需要を殆んど充し得る状態でなかつたならば、大困難を生ずるであらう」(註一)と云ふことは認めてゐる。一九一四年——一九一六年の經驗は、このプリオフ氏の斷定がいかに現實と喰違つたかを、重ねて示すものであつた。

(註一) 前掲書、第四卷、一八四頁

プリオフ氏は紙幣の流通に對する昔からの我國の習慣をさへ、西歐の高度に發達した商工業を有する文明諸國に對する防衛戦においてロシアの明白な長所の一つに數へてゐる。(註一)

(註一) 前掲書、第四卷、一五四、二六三頁

今や現戦争の苦しい經驗を経てみると、プリオフ氏のこれらの意見は餘りにも無邪氣で、如何にも現實にそぐはないのに驚く次第である。同氏の評價によると、戦争を行ふ上で主たる重要性を持つものは食糧問題である。食糧物資に保證された點では、イギリスの立場は、ドイツの立場よりも遙かに悪いのである。ところがドイツを食糧攻にしやうとする計畫を持つてゐるのは實にイギリスである。



即ちそれは小麥の生産高の貧弱なイギリスであつて、その生産高の豊富なロシアではないのである。ブリオフ氏は軍隊に對する兵器彈藥補給の問題を重要視してゐない。ところが陸軍大臣ポリワールは一九一五年七月十九日國會の議場において、この問題こそ第一義的重要性を持つものと言明したのである。陸軍大臣は次の様に述べたのである。

「戦争繼續上最も困難にして最も焦眉の問題は、軍隊に對する技術資材の補給であり、その第一は砲兵資材の補給である。この意味で、砲兵資材の補給が豊富な意味で、ドイツは我軍、及び我國同盟國の軍隊に比し、遙かに優れてゐる。ドイツは二つの方法によつてこの優越性を獲得した。すなはち戦前に巨大なストックを持つてゐたこと、宣戦布告直後大發展を遂げ得る様に豫め自國の工業を準備してゐたことがそれである。ドイツの工業は戦前に全世界に生産品を供給してゐたが、開戦以來輸出杜絶のため手の空いたあらゆる機械が軍のために働くこととなつたのである。ドイツ軍の優越點は何よりもその重砲に、砲彈、機關銃及び小銃の數に現はれてゐる。彼等は多量の爆藥を持つ砲彈によつてあらゆる深い塹壕を破壊し、比較的小數の歩兵が機關銃を持つて自軍の塹壕を防禦するのである。この通り勝敗は戰場に送るべき金屬の數量によつて決定するものならば、我國においても國防物資を製作する工業部門、そして何よりも砲兵資材を製造する工業部門を發達せしめねばならず、且つこれを強調せねばならないのである」。

要するに、國力は國家の生産力、その工業及び農業の全面的發達の中にあるのであつて、戦争が起つても荒廢するものは何一つ無いと云ふ様な經濟状態の下においては國家は存在しないのである。

ブリオフ氏の基本的な誤謬は、歐洲戦争の場合ロシアの經濟的及び文化的後進性にロシアの救ひがあると思つてゐる點にある。氏は、國民が貧乏であればある程、その工業の發達が少ければ少い程、勝利の機會が多く、戦争の慘禍に堪え易いと思つてゐたのである。氏の意見によると、「ロシアにおいてはあらゆる經濟的缺陷や、社會的教育の低水準や、文化、工業、商業發達の低さが、戦争の場合にその損害を少くするのに役立つのである」。(註一)

(註一) 前掲書、第四卷、三九五頁

もしさうだとすれば、國家としてのロシアの利益は國內における工業及び精神文化のあらゆる發達を抑止すべき精神的抵抗を要求するであらう。なるほどブリオフ氏は二、三の但書は附してゐる。氏は彼の意見からして、「國家が貧しければ貧しい程戦争に堪え易いと結論すべきではない……生活状態(しかも單に物質的のみならず精神的な意味での)には、それが國民または個々の地方をして容易に戦争の試練に堪えしめ且つ急速にその結果を回復せしめるところの、特定の最少限度が存在すると考へてゐる。かゝる修正が問題の本質を變化しないことは明白である。さらにより重要な意義を持つものは次の但書きである。「蓄積された富が少く且つ全經濟生活が單純なところでは、戦争から生ずる當座



の損害は弱く感ぜられるに違ひない。その代りに、農業を主とする國家、農民も地主も平時から既に辛うじて收支の辻褃を合はせ、然も負債と負債労働、すなはち寄生分子のための無用な労働が益々増加してゆくやうな國、尙又財政制度はやつと整理の緒についた許りであるのに紙幣の大増發によつて再び激動を蒙らんとしてゐる様な國においては、戦争の結果は特に痛烈であり、回復に多大の日子を要するが如き經濟恐慌と生産力自體の低下となつて現はれるであらう。従つてロシアは、大戰後に西歐で起りかねないやうな政治的變革の心配はないが、戦争の結果は極めて重大となるであらう。歐洲大戰は經濟方面においては一段とロシアを後退させるであらうし、それが長期に互るかも知れない。

(註一)

(註一) 前掲書、第四卷、一九五—六、二六一—二頁

無論あらゆる戦争はその參戰各國經濟に重大な損害を與へる。そして戦争が大きければ大きい程その損害は著大である。ロシアに就いては右の點からして、次の様な結論を下すことが出来るのみである。すなはちロシアは貧乏國であるから、例へ戦争に勝つとしても、出来るだけこれを避けねばならぬ、すなはち攻撃國となつてはならぬのである。

かやうに、この二つの但書は共にイー・エス・ブリオフの戦争經濟觀の基本的な國家主義的的反動的な性質を毀損するものではない。これらの但書は、氏がその結論においてニコライ一世やアレクサンド

ル三世の反動時代の見解に徹底的に、且つ完全に合致する決心がつかなくつたことを示すに過ぎない。これらの反動時代には、支配階級は、我國は何もかも順調に出来てゐて、ヨーロッパに學ぶべきものは何一つなく、ロシアの力は無盡藏で、敵軍が如何に侵入して來ても「鎧袖一觸の下にこれを撃退する」(註一)のだと頑強に斷言してゐたものである。

(註一) 前掲書、第四卷、一六一頁

ブリオフの「未來戰」に關するこの研究が出版されたと同じ、一八九八年に、「軍事論集録」にアー・アー・グレイヴィツチ將軍の「戦争と國民經濟」と云ふ論文が掲載された。グレイヴィツチ將軍の見解は鐵道經營者兼銀行家たるイー・エス・ブリオフの意見に極めて近い。當面の全歐洲戦争の經濟に關するこの二人の判斷の反動的國家主義的な素性は明白である。然しながら交戰各國の國民經濟に對する戦争の要求に就いては、鐵道經營者にして銀行家たるブリオフよりも、この將軍の評價の方が正しいことが分る。従つてグレイヴィツチ氏は、未來戰において文化的及び經濟的方面において立後れたロシアの長所に關する自分の基礎的結論を著しく覆すやうな、本質的な但書を附してゐる。

戦時における正しき商品交換の杜絶は、グレイヴィツチの意見によると、「その外國貿易及び工場工業活動が最も發達した諸國、すなはちイギリス、ドイツ及びフランスの工業制度に最も強く影響するに違ひない。これらの國々においては、對外貿易が杜絶する場合には、精製工業方面の混亂は宣戦布



告後間もなく一般的な極めて重大な經濟恐慌の性質を帯びることがある」。然しながら、前にも指摘したやうに、外國貿易の杜絶は歐洲戰爭の必然にして不可避なる結果ではない。グーレヴィッチ將軍の列擧した諸國のうち現戰爭において世界市場から切り離されてゐるのは、僅かにドイツ一國に過ぎない。従つて外國貿易の杜絶は軍事行動の條件ではなくて結果である。然るにグーレヴィッチは國民經濟に對する戰爭の影響を規定するに當つて、實に軍事行動の進行の結果たる國民經濟の結果の評價から出發してゐるのである。かくて氏はブリオフと同様に、不成功又は失敗した軍事行動の結果を、戰爭そのものに背負はせてゐるのは明白である。現にドイツが全然世界市場から切り離されてゐるのは、現在戰爭が進行中であるからではなくて、イギリス海軍がドイツ海軍よりも強くて、ドイツの港灣を封鎖してゐるがためである。もしこの勢力關係が違なれば、世界市場から切り離されるのはドイツではなくて、イギリスであらう。これと同様に現在ロシヤも世界市場から切り離されてゐるが、それは偏に聯合軍がダーダネル海峡を強行突破してコンスタンチノープルを占領出来なかつたために他ならない。

然るにグーレヴィッチはその後の考察においては、實にこの全く必然に非ざる軍事行動の結果から出發してゐるのである。食糧品の輸送難は、將軍の意見によると、大いに「これら諸國の、戦時下の軍及び全國民の食糧問題を困難ならしめる。その結果起ることあるべき災害は、戦時下におけるこれ

ら諸國の全經濟及び社會制度の一般状態を規定する最も本質的にして重大な與件をなすものである。けだし戦時下において軍及び國民の生活力と活動力に致命的影響を與へるものは、食糧不足に如くはないからである。戦時の一般状態の影響を受けて、穀物その他の食糧品の輸入を必要とする諸國の國民經濟機構の下には、その總和が戦時下における住民の食糧補給の條件を規定するが如き一聯の現象が起るに違ひない。すなはち勞働力の一部を取り上げるとは農作を悪化し地方の生産高を減少する。老大な軍隊の食糧需要を充す必要は、異例の大規模な買付を必要とするが、その結果國內市場の手持食糧ストックの量は突如として著減するであらう。生活必需品の不足を充すには普通的手段では駄目であらうといふ確信は、戰爭が長引く様な場合には、一般の輿論の中に饑饉の危懼を生ぜしめ、その結果生産者や卸業者からの穀類、肉その他の食糧品の供給が直ちに減少し、それと同時に住民のうちの裕福な分子はあらゆる食糧ストックを出来るだけ長期間に亙つて貯へて置かうとする欲望が生れる。これらの現象は、商業方面の一般的經濟恐慌と結び付き、又食糧品の必然的投機と結び付き、輸送難を來した場合には、食糧品取引の完全な混亂を呼び起し、宣戰布告後間もなくして生活必需品の價格は未曾有の昂騰を來し、人民の極貧部分は充分なる糊口のすべを失ふに至るのである。これは國內手持の食糧品の總貯藏額が當座の要求を充分充し得る程であつても、起り得ることである。要するに現實の饑餓は、少くとも住民の大多數に取つては、國內の食糧貯藏の現在高が完全に盡きるより



も、ずつと早く到來するものと確信を以つて斷言出来るのである」。

ロシア國民の生業が主として農業的性格を帯びてゐることは、戰時下における食糧事情の問題において、ロシアを特に有利な條件に置くものである。「ロシアは現在と同様に將來如何に長期に亙る戦争が起つても、その軍隊の食糧需要が如何に大きくなつても、更に戰時下における農業經營條件が如何に不利となつても、國産の穀類を以つて充分にやつて行けるのである。況んや平時に世界市場へ輸出されてゐる穀物の全額が、戰時には海外輸出に伴ひ、ロシア國內に残り、國內市場における一定の餘剩穀類を作るにおいてをやである。國民食糧供給上の難點は、戰時下において穀類の有り餘る地方からその缺乏した地方への輸送難の結果生ずるに過ぎないのである」。(註一)

(註一) 軍事集録、一八九八年、第五冊五六一五七頁、第六冊二八三—五、二七八頁

工業の發達した諸國に對するロシアのこの優越が如何に偉いものであるかは、これ又現戦争の經驗が示す通りである。もしロシアが食糧に就いてドイツよりも勝つてゐるとしても、それは偏にイギリス海軍のお蔭である。すなはちグーレヴィツチ將軍の立場から見れば、食糧問題で最も恵れてゐない國たるイギリスのお蔭である……

然るにグーレヴィツチ將軍は、實にこの偉いロシアの優越性に立脚して、長期の大戦争に際してロシアの國民經濟機構が非常な持久力を持つてゐると結論してゐる。將軍はこの點でロシア國民經濟の

積極的な特徴として、自然經濟的形態の保存されてゐること、國內資本の限られたこと、住民大衆の消費が狭く局限せられてゐることを擧げてゐる。(註一)

(註一) 前掲書、第二冊、二八三頁、第三冊、九二—九三頁、第四冊、三〇〇—一頁

ところが一度グーレヴィツチ將軍が、ロシアの國民經濟に對する戦争の要求を充すことが、この國民經濟に如何なる影響を及ぼすかと云ふ評價に移ると、將軍の結論は全然別個の性質を帯びて來るのである。將軍の全論文にはこの相反する二つの見解の相尅が一貫してをり、そのうち反動的國家主義の見解が優位を占めてゐる。將軍の論文においては、進歩的經濟的性質の論據は、或種の修正の役割を演じてゐるに過ぎない。「頑強にして長期の戦争を行ふに適する意味で西歐諸國に比しロシアの自然的優越性が如何に大きくとも、——とグーレヴィツチ將軍はその論文の結末に述べてゐる。——ロシアの經濟機構には、西歐諸國よりもこの點において恵まれないやうな面も存在してゐるのである。正直に云つて現在ロシアは貨幣保有高、工場製の武器及び交通設備において、西歐の主要諸國に比すれば一段と貧乏な國であると認めねばならぬ。財政資力の比較的な弱さも、工業技術の發達が不十分なことも、鐵道網が比較的貧弱なことも、これら諸國との武装衝突の勝敗を決定する上で決定的意義を持ち得ないことは明瞭ではあるが、しかも尙ロシア經濟のこれらの弱點に對しては殊に注意を拂はざるを得ない次第である」。(註一)



戦争經濟問題の並ぶ者なき權威者と認められてゐたこの將軍に取つては、食糧問題はロシアと西歐の資本主義諸國との武装衝突において決定的意義を持ち得るが、財政上の貧窮工業及び鐵道の未發達はそれだけの決定的意義を持ち得ないことが明瞭であつたのだ！

經濟的に素朴で、民族的幻惑に陥つてゐては、これ以上進みやうはないのである。

最も驚くべき點は、グーレヴィツチ將軍がその觸れて行く個々の問題に就いては非常に筋の通つた正しい意見を述べるが、一度ロシアと西歐との武装衝突の蓋然的歸結に關する根本問題に觸れると、將軍の所論が素朴な、非科學的な極めて反動的な性格を帯びることである。將軍の個々の考察が如何に現實的であるかは次の例を見ても判斷出来る。すなはち將軍はロシアの財政状態に就いて次のやうに論じてゐる。「ロシアの國政は戦時には必ず資金の大不足を嘗めた。財政制度の不安定と、國內資本不足による國家信用の利用上の困難とは、ロシアの財政の特徴をなしてゐる。他の如何なる國家におけるよりも軍事費の支出に當つて國家資金の現在高を考慮する必要があること、又その結果現れるところの戦時下においても兵力の最も緊迫した利害をも犠牲にして出来るだけ軍事費縮減のため非常手段を取る必要があることは、軍事的觀點よりすれば極めて不利な要素であらねばならぬ」。工業の方面においてもロシアの立場はこれと同様に不利である。「國內資本が比較的貧しく、生産手段が不充分

で技術の發達が微少で、企業慾が弱く、國內流通系統における貨幣の運動が緩慢で、他人の失つた外國市場に喰込まうとする旺盛な慾求が工業界にないこと、——これは何れも、戦時下の状態において一時的とは云へ、急激に起る軍隊の需要、並びに民間需要の一部が、急速かつ充分に満足されると期待出来ないやうな條件を作るものである。この見地よりすれば國家が工業的に出來てゐればある程、有利な立場にあると認めねばならぬ。蓋しかゝる國の經濟制度は、その工業界の廣汎な發達に基いて、工場生産品に對する軍隊の雜多な要求を充すに必要なすべての物を生産するといふ方面では、個人企業慾にとつて廣大な天地と資材を呈してゐるからである。「ロシアに取つて更に大きな危険となるものは國內鐵道の發達が不充分で、その運轉資材の設備が薄弱なことである。戦時には「鐵道網の豊富な國は、鐵道の貧弱な國よりも、その經濟活動において有利な條件を持つことは明白である」。

(註一)

(註一) 前掲書、第三冊、九一頁、第五冊、五六—七頁、第二冊、三〇二頁

ロシアの軍事的成功に取つてその經濟的後進性の持つ否定的意義に關する上述の議論からして、自然と一般的結論が生れる筈であるが、グーレヴィツチ將軍はこれを次のやうに下してゐる。「戦争とは二ヶ國乃至は數ヶ國の國力の戦である。この戦を行ふ國力は、國家の戦力によつて決定される。但しこの戦力の外的表現は、戦闘の用具たる武力(陸海軍)である。然しながら、決戦の最後の決は、武



器の完備及びその使用の術のみによるものではない。すなはち武力の活動のみによるのではなくて、戦闘組織の威力と勢力とを決定する一般的諸原因、すなはち國家機構一般の生命活動力、長期の戦闘に堪へる國家の能力、その戰爭中充分強力にして威力ある武力を維持する能力によるものである……從來存在してゐた二ヶ國の戦力を特質づけるあらゆる複雑な諸要素の總和によつて、兩國間の決戦の決を規定することの意義は、現在、ヨーロッパ主要國間の戰爭の場合に、最も完全に表現されるに違ひない……現在軍隊はその組織と生活において、國家機構の他の諸部分に對しては、一定の必然的な特殊物をなしてゐるが、しかしそれは獨立の、別個の存在ではなくて、全住民の精神的及び物質的活動の、直接的な結果である。未來戦においては軍事作戦と、國內の宗教的、社會的及び經濟的生活の諸現象との相互關係は、特に明白に現はれるであらう。けだし諸國民のあらゆる道義的、知的及び肉體的な力が、現代文明の文化の成果が、戦闘の要素となるに違ひないからである。そしてこれら文化の成果の總和は、ヨーロッパ一流國間の、規模において絶大であり、結果において決定的な、未來戦の最後の決をつけるべきものである」。(註二)

(註二) 前掲書、第一冊、六〇一―六二頁

立派な説である。しかし忘れてはならないことは、さきに引用して置いたグーレヴィツチ將軍の言によると、財政資力の問題、工業及び鐵道網の發達の問題、一般に各國の國民經濟力の問題は、「諸國

間の武装衝突の決を規定する上で、決定的意義を持ち得ないことは明瞭である」……といふことである。

グーレヴィツチ將軍は未來戦における經濟力の役割について以上のやうな考へを持つてゐたので、これから出發して次の實際的結論を下してゐる。即ち戦時基金の設定に意を用ひ、戦時に陸軍省のために有益な活動をなすことあるべき工場工業部門を出来るだけ急速かつ廣汎に發展せしめることに留意し、戦時には鐵道の管理統一を施行すること(註一)——といふのであるが、これはまるで戦時基金によつて國內財政力の薄弱を埋合はせることが出来、特殊の工業部門が發達すれば工業力の一般的發達の埋合はせとなり、鐵道管理の統一は鐵道網の未發達を償ふといふやうなものである。この結論の氣輕さを見ると、グーレヴィツチ將軍は世界戦の成功的遂行に必要な、國家の經濟力の現實的重要性を理解してゐないことが判る。

(註一) 前掲書、第四卷、三〇六―三〇九頁

ペー・ペー・ストルーヴェは、論集「大ロシア」(一九一二年)第二冊に掲載した論文「大ロシアの經濟問題」で、本問題にこれと違つた解決を下してゐる。この論文には「戦争と國民經濟に關する一經濟學者の手記」といふ副題がつけてある。ストルーヴェはその先輩たるブリオフとグーレヴィツチの結論に對し否定的な態度をとつてゐる。(註二)氏は兩者が自然經濟制度に與へてゐる肯定的評價と、



戦時における食糧問題に兩者の與へてゐるあの重要性について、次のやうに述べてゐる。「現在ではその戦争中に強大國の食糧補給問題に對し、少しでも痛烈な打撃、戦争遂行の勝機オキジキそのものに影響を及ぼすが如き打撃を現實に與へ得るやうな戦争は考へられぬ。この點で最も不利なのは、東西兩戦線における戦争の際のドイツの立場であるが、これは要するに前ドイツ帝國宰相ビュロー公が至極正しく指摘した通り、ドイツは他のヨーロッパ諸國の中央に位して、戦略的には最も不利な立場を占めてゐるからにほかならない。しかしそのドイツでさへも、國內の食糧補給上外國の原産地から全然切り離されたとしても、一ケ年間は國産の穀類で持ちこたへることが出来るのである。もしさうだとすれば、食料資材生産の觀點から見た國家の性格は、現代の條件下における戦争の遂行上、決定的意義を持たないのみか、大體が何等の意義も持ち得ないのである。況んや穀類餘剰を持つ國々は、戦争のため生ずる恐慌の結果、消費者として利を得るが、またそれだけ販賣市場の狹隘化を來す生産者として損をするのである。このテーマに關するあらゆる論議、例へば交戦強國としてのロシアの立場が有利だといふ議論は、直ちに混亂を招くものである」。(註二)

(註一) 大ロシア、第二卷、一四六—七、一五二頁

(註二) 前掲書、一四五—六頁

現戦争の經驗は、ドイツが國産の穀類によつて一年はあらか、二年も持ち堪へることが出来ること

を示した。一方ロシアの穀類生産者は、ストルツエの意見に反して、外國市場への農産物輸出杜絶のため、何等の損害も蒙らなかつた。「要するに、——とストルツエは續けてゐる、——國民經濟に對する戦争の影響は、その規模と性格と形態において個々の具體的な場合には、極めて豫想のつき難い影響であるが、最近では小さくなると云ふより、寧ろ大きくなつてゐる。しかし國民經濟に對する戦争の影響は、戦争に對する、いや正しく云へば、國家が戦争に移る際に持つてゐる所の(軍事的及び財政的)資源に對する、また従つて戦争の勝機オキジキに對する、國民經濟の影響に較ぶれば、遙に小さいのである」。(註一)

(註一) 前掲書、一四六頁

私から見れば、この相異なる測定不可能な二つの經濟過程——國民經濟に對する戦争の影響と、戦争に對する國民經濟の影響——を、そのあらゆる具體的多様性と複雑性において取上げずに、どうして數量的に比較できるか不可解である。これに反して外國貿易の混亂に依存し、主として豫測を許さない軍事行動の結果によつて生ずる戦争の影響を除外して、この影響のうちでも國民經濟に對する戦争の要求の充足から生ずる部分に注意を集中すれば、本來は同一の過程を取扱ひ、たゞこれを二つの異なる觀點——戦争が國民經濟に發する要求の充足といふ觀點と、これら要求の充足のため國民經濟の蒙る損失の觀點——から検討するだけである。またかやうに問題を限定すると、數量的比較は全く不適



當となる。しかしこの問題の立て方は、近代戦が國民經濟に發する要求の額を規定する方法によつて、國民經濟に對する戦争の影響を豫測する可能性を與へるものである。

ストルルーヴェの結論は次の通りである。「戦勝は多數の非經濟的性質の要因と關連してゐる。經濟學者こそこの點を強調せざるを得ないのである。しかし他の非經濟的條件または『經濟』と間接の關係にある條件（軍の技術的裝備、すなはち廣い意味の武器の質、『兵』の質、指揮官の素養、軍隊の『精神』、全國民の民族的・道義的の純一性）が同等であれば、實際的に云つて、戦争のために重要な經濟的契機となるものは、國富、即ち國內における物および貨幣の形の資本の蓄積の度である。國に資本が豊かであればある程、その他の條件が同等であれば、その國は戦争準備に多くの資金を費すことが出來、また（そのため）その準備の度も高くなるのである……國の經濟的發展が高ければ高いほど、——その他の條件が同等ならば、——その戦争準備は高く、その國が軍事的衝突において展開し得る力は著大である。我々は經濟的發展の指標として『國民の生活狀態』はとらない。これは曖昧な概念で、主觀的な尺度によるところが極めて多い。（それは消費の充足手段といふ客觀的契機と、消費といふ主觀的契機をもつて成立するものである。ある立場から見れば、消費が低ければ低いほど、『生活狀態』は高いといふことになる）。だから我々は、『國富』、すなはち國民資本と國民所得の價值、實際的には計算困難であるが、原則的には金額をもつて容易に測量出來る數値をとるのである」。ストルルーヴェ

エはこの基準から出發して、ロシアの國力はわが當時の假想敵國で、現在の現實の敵國との戦争に堪へる力が足りないと認めてゐる。「わが現實の假想敵國たるドイツおよびオーストリアと比較した場合のロシアの弱さは、ロシアの經濟力の不充足さに、その經濟的未發達に、そしてこれより生ずる他國への財政的依存性にある。現代の武裝衝突の條件下においては、ロシアの自然乃至自然經濟の一切の架空の長所は、わが軍國的な脆弱さの根源となるのである。ロシアは軍事的強國としては、人口の絶對數において、またこれに相當する絶對的に老大な財政資源において、強大である。しかしこの國民および國家機構の絶對額に對應して、他の經濟制度、例へば工業は發達し資本は蓄積されてゐる合衆國の制度とか、フランスの制度があつたならば、ロシアの戦力は數倍も大きくなつたであらう。戦争準備の立場から見れば、ロシアにとつては、その經濟狀態の強化、すなはち換言すれば、國內の資本蓄積を目指す政策よりも、差迫つた一般的任務はない。けだし敵國と比べてロシアの弱點はその經濟的な弱さにあることは幾ら強調しても足りないが、これは國家をより高き經濟段階に引上げんとする多年の執拗な工作によつてしか克服出來ないからである。ロシアの經濟の後進性に何等かの軍事上の長所があるといふ意見ほど、理論的に當にならず、實際的に危険な意見はないのである。破壊的な違法の手段に訴へずして、少くとも一年間は戦争を遂行し得るだけ經濟的に強くなるまでは、すなはち日本との衝突に當つてロシアの發した金融上の要求に三乃至四倍する國家の財政的要求を、わが國內



貨幣市場が正常に充し得るに到るまでは、——それまでは、現實に我國に對立してゐるあのヨーロッパ聯合との武装衝突において、味方の勝目は敵の勝目より遙かに薄弱であらう」。(註一)

(註一) 前掲書、一四七、一四四、一五一—二頁。イー・イー・レーヴェンも、一九一四年二月十八日、財政改革協會で行つた「財政的戦争準備の問題とロシアの財政的戦争準備」といふ報告演説で、大體においてストルーズエの意見に左祖してゐる(同協會「會報」、一九一四年第九號参照)

ストルーズエが考慮に入れてゐなかつた、ロシアと英佛との同盟が、本質的に勢力關係を變へたことは、云ふまでもない。

かやうにストルーズエは國家の財政的戦争準備に決定的意義を附し、たゞそのためばかりに國家の經濟的發達を高く評價してゐるのである。氏から見れば、戦争が國民經濟に發する要求は、國庫への要求に歸一するのである。これでは軍の兵數が數十萬を越えず、戦争を行ふには金、金、飽くまで金が必要であつたあの時代に歸るやうなものだ。この問題では、グーレヴィッチ將軍の立場の方がはるかに正しい。尤も將軍も戦争に勝つために、戦争が國內の農工業や鐵道網に向つて出す要求を充足する手段の意義を充分には評價してゐなかつた。ストルーズエは國民經濟に向つて發する戦争の要求の問題については如何にも皮相な態度をとつてゐるけれども、それでも氏の立場の強味は、その戦争經濟觀がロシアの俗物どもの愛用する反動的國家主義的見解に全く縛られてゐない點にある。

わが國の今一人の經濟學者たるエム・イー・ツガン・バラノフスキー氏の見解については、残念ながら右と同様だとは云ひかねる。論集「世界戦の諸問題」(一九一五年)に収録されてゐる氏の論文「ロシア、イギリス及びドイツの國民經濟に對する戦争の影響」は、どうやら一九一五年の三月中に、すなはち開戦以來八ヶ月後に書いたものらしいが、國民經濟に對する戦争の影響の問題の取扱ひに關する限り、戦前の文獻に屬すべきものである。本論文には現戦争の経験は全く考慮されて居らず、問題の全論述は與へられた具體的現實の分析ではなくて、與へられたテーマの抽象的考察となつてゐる。

戦前に、まだ戦争の経験がなかつた頃なら、この種の考察も不可避であらうが、戦争勃發後には、全く無用の沙汰である。

ツガン・バラノフスキーの意見によると、「要するに戦争の經濟的影響は、二つの種類の要因に歸着する。第一に、戦費の調達に交戦國から非常に巨額の出費を要求する當該國の國民經濟は國富から相當額を控除する方法によつて、何とかしてこの出費を賄はねばならぬ。第二に、戦争は國際商品交換を混亂せしめ、國內商品交換の一部も混亂せしめる。これは、戦争のため國內の財貨の移動が困難となるため、信用機構の激動を來たし、また國內の勞働力を生産機能から吸收するため、生産が減少する」(註二)のである。ここで第一に目につくのは、消費高に對する戦争の影響を看過してゐる點である。これについてツガン・バラノフスキーは、あとでロシアの工業に對する戦争の影響を検討する段



になつて初めてこれを想起してゐるにすぎない。しかも軍需は製造工業の生産品ばかりでなく、農産物にも及ぶものである。またここでは生産の縮小と消費の増大を、国内商品交換を混乱せしめる契機だと見るのも、恐らく誤りであらう。国民生産及び消費の方面における戦争の影響は、別個に研究すべきもので、しかも最も細心な研究に値ひする問題である。

(註一) 世界戦の諸問題、二六九—二七〇頁

しかしツガン・バラノフスキーの提唱するが如き戦争の経済的影響の基礎的分類も亦容認しがたない。疑ひもなく、戦争は國家經濟にも、國民經濟にも影響を及ぼす。しかしこれは戦争影響の客體であつて、その要因ではない。だから戦争の影響そのものと、それが國家及び國民經濟に及んで行く道程とを分類するならば、戦争が國民及び國家經濟に發する諸要求の影響と、軍事行動のある種の結果、(たとへば陸上國境經由の外國貿易の杜絶や港灣の封鎖) から生ずる影響とを區別せねばならない。第一の種類の影響はあらゆる交戦國に共通のもので、ある程度まで豫測できるが、第二の種類の影響はひとへに豫測のつかぬ軍事行動の進展如何によるもので、敵味方のうち一方のみに打撃を及ぼすのが普通である。右に指摘した區別が如何に本質的なものであるかは、この區別を無視したが故に生ずる結論の虚偽を見ただけでも判断がつく。たとへばツガン・バラノフスキーの意見によると、「右に擧げた兩要因は、經濟形態を異にする各國に對して、決して同一の重要性を有するものではない。

その國が富んで居り、多くの資本を持ち、国内の資本形成が早ければ早いほど、その國は戦争のために生ずる出費を容易に賄ふことが出来る……従つて戦費を賄ふといふ意味では、商工業國は農業國より立場がよいのである。しかるに第二の種類の要因については、これと逆のことを述べねばならぬ。すなはちその國が自然經濟に近ければ近いほど、貨幣・商品交換の混亂が及ぼす破壊作用は少ないのである。この點では農業國は商工業國よりも被害がはるかに少ないのである。』

それ故、ロシアの國民經濟は戦争の被害が少い。「元來ロシアは工業國ではなくて、農業國である。わが國民の福祉は、何よりも第一に農業に立脚し、全人口の約四分の三が農業に従事してゐる。わが國民大衆は主として農民より成つてゐて、工場労働者ではない。この點にロシアとドイツの最も本質的な相違があり、またこの點にドイツのそれに比し、ロシアの國民經濟の比較にならぬほど大きな持久力の原因があるのだ。ロシアとドイツの間には、工業に對する戦争の影響について、わが祖國に有利な深刻な相違がある。しかしこの相違は程度の相違であつて、本質上の相違ではない。しかし國民經濟の全機構に對する戦争の影響については、ロシアとドイツの間に本質上の相違がある。要するに、わが國民經濟機構は、(ドイツにおいて認むるが如く)戦争によつて破壊されないのみか、殆んど戦争を感じないのである……この點においてはロシアとドイツの差は絶大なものがある。けだしドイツにとつては戦争の繼續は、一定の、さまで遠からざる限度を越へると、經濟的不能にぶつかる



が、われわれはわが國民經濟に關する限り、數年に互つて戰爭を遂行出来るからである」。(註一)

(註一) 前掲書、二七〇、三三〇—一頁

かくてツガン・バラノフスキーは、嘗つてプリオフやグーレヴィツチ將軍の到達したと同一の結論に達し、彼等と同様にロシアの經濟的後進性に満足し、生産力の未發達を稱讃してゐるのである。(註一)

(註一)

世界戰爭に對するこの反動的・國家主義的態度は、開戦刻々「ノーヴィイ・エコノミスト」誌に掲載されたペー・ペー・ミグーリン教授の論文において最も鮮明に表現されたやうである。ミグーリン氏は殆んど全くプリオフの見解に近づき、グーレヴィツチ將軍の行つてゐるだけの但書きへ附してゐない。氏の意見に従ふと、「近代國家の經濟的景氣は極めて複雑で、その相互の經濟關係は極めて密接に交錯してゐるので、長期の戦闘は全世界的破産を來す怖れさへある。この破産は、ドイツのやうに外國市場のために活動する工業的に發達した大國で、自國民のために食料品を輸入する必要ある國ほど、その危険が殊に大きいのである……既に何度も指摘したやうに、ロシアの經濟的立場は、ドイツやオーストリアに比し、比較にならぬほど有利である。むろんこれほどの大戦争となれば、わが國においても經濟的激動が起らないと断言は出来ないが、しかし相對的に云つてその激動は過度で危険な産業及び財政破産とはなり得ないのである。わが國の製造工業はもつぱら國內市場を自當に活動してゐるので、外國市場の閉鎖は何等の影響も及ぼさないのである。いや却つて、外國輸入の減少は土着工業生産品に對する需要の増大を來し、工業は一層の發達を來す刺激を受けるのであつて、この發達を阻害するものと云つては資本の不足(金融市場の梗塞)と戰爭に引上げられた労働力の不足くらひなものである。農業國ロシアは、むろん、農産物の輸出減のため苦しむが、それはまた反面、却つてよい所もある。國內消費者から見れば、右の農産物は安くなるが、恰度その時、工業國ではこれが大暴騰を來すのである。これは實際にわれわれの觀察した通りで、戰爭勃發となるや、わが國では穀物の價格が相當に低落し、ドイツでは非常な騰貴を來したのである」。

註、「ノーヴィイ・エコノミスト」誌、一九一四年七月二十六日、第三〇號。

これを読んで見ると、經濟問題をよく知らない世人が、反動的國家主義的先入観にあんなに嗜りつゝくのも驚くに當らないのだ!

特徴があるのは、ツガン・バラノフスキーが、戰爭の破壊的影響を特に強く蒙る工業國の例としてドイツを挙げたことである。ところがイギリスは工業の方面ではドイツに劣らないではないか。然るにツガン・バラノフスキー氏は、「英帝國は、その國民經濟にとつて本質的な損失を蒙ることなく戰爭を遂行してゐる唯一の強國である」と認めてゐる。その理由は、「海戦がイギリスに有利に進展した」と(註一)である。もしイギリスが、戰爭のため本質的な損害を受けなかつた唯一の強國であるとするならば、その立場はむしろロシアの立場よりも有利に違ひない。ツガン・バラノフスキー氏は、その論文に溢れてゐるこの矛盾にも氣づいてゐないのである。

(註一) 世界戰の諸問題、二七三頁

ツガン・バラノフスキー氏が、その論文に挙げた諸事實を理解出来ない理由は、われわれが前に引用した氏の戰爭の經濟的影響の分類にある。ところが事實そのものには何も謎はないのである。軍事行動の進展がイギリスに有利であつたため、イギリスは殆んど減することなく國際市場との連絡を保持することが出来た。これに反して、ドイツとロシアは軍事行動の結果、國際市場から殆んど切り離



されてゐるのである。そのため、戦時下におけるイギリスとドイツの國民經濟狀態のあの相違が生じたのである。しかしこの影響は多かれ少かれ偶發的性質のもので、軍事行動の成否によるものである。これに反して、今一つの影響は戦争と有機的な關連を持ち、近代戦が參戰各國の經濟力に發する要求にある。(註一)

(註一) ブリオフは運の好い男で、わが經濟文獻では、今日にいたるも、現戦争の體驗があつたにも拘はらず、外國貿易の杜絶に大きな意義を認めて、戦費には大した意義を認めてゐない。例へばエム・イー・ボゴレーボフはこの問題について、次のやうに述べてゐる。「戦争が始まつた時、各國の國民經濟は國際市場の諸條件のため、相互に密接に結びついた状態にあつた。戦争はまづ各國民經濟の全世界經濟的關聯を破壊した。そして各國民經濟機構の基礎的生條件を破壊した。國民經濟の與へられた部門は、主として、それが戦争の前後に全世界市場と結びついてゐただけ、それだけ被害を受けた。總體としての全國民經濟は、主として、それが全世界市場から孤立しただけ、またその經濟的利益が政治的限界を超え、その限度を過ぎただけそれだけ、被害を受けたのである」(一九一四年度の國民經濟、ペトログラード、一九一六年版、一一二頁)。この最後の結論は、明かに現實と矛盾してゐる。英佛の國民經濟は、主として、直接の戦費のために苦んでゐるのであつて、外國貿易の正常な運行に故障が入つたために苦んでゐるのではない。ロシアの國民經濟でさへも、外國貿易が殆んど完全に杜絶したためよりも、戦費——人・物及び金による——のための被害の方が遙かに大きいのである。こゝに讀者の注意を引きたいのは、ボゴレーボフが右の意見を書いたのは一九一六年の年頭で、その頃は一年半に亘る戦争の經驗をもう計算出来たといふことである。經濟的偏見といふものは、こんなにも根強いものである。

明かにこれらの要求は、單に財政的要求ばかりでなく、國民經濟的性質の要求も入つてゐるので、その生産力が農工業を通じて發達してゐる國ほど、これに堪へ易いのである。この戦争の影響に對し

て最大の抵抗力を持つものは、發達した工業國である。もしこの方面でドイツとロシアの間に深刻な相違があるならば、それはロシアに不利である。ドイツはイギリス海軍のドイツ港灣封鎖のために妨げられないならば、國民經濟的資材の補給について、ロシアよりも遙かに永く持ち堪へることが出来るであらう。

以上が戦前に發表されたロシアの經濟學者たちの、國民經濟に向つて發する戦争の要求および國內經濟生活に對する戦争の影響に關する意見である。こんどは現在の全ヨーロッパ戦争がロシアの國民經濟に、現實に如何に反映したかを検討しよう。

われわれはこの課題の困難さに目を蔽ふ者ではない。つい二、三ヶ月前に、エム・イー・フリードマン教授は、「近代戦の經濟はまだ我々には不可解だと白状せねばならぬ。このテーマはまだ調査も研究も出來てゐず、我々は結論を下すために必要な充分にして信頼すべき資料さへ持たないのである」(註二) これは全く大いに正しい。とはいへわれわれの手許には既に多少の資料はあるし、また現戦争の經濟の研究はこれ以上遷延する譯には行かないのである。

(註二) 「ヴェストニク・フィナンソフ」(財政時報)、一九一六年、第三七號、四〇六頁



## 第二章 戦費とその財源

ロシアの行つた最近の諸戦争の戦費は次のやうになつてゐる。

クリミア戦争（一八五三—一八五六）	五三八・二百万留
露土戦争（一八七七—一八七八）	一〇七五・四〇
日露戦争（一九〇四—一九〇五）	二九四〇・五〇

過去の諸戦争の経費を見れば、来るべき全歐洲戦がロシアにとつてどれ位の負擔となるかが、ある程度まで判断出來た。戦費の總額は、次の三つの要素を掛け合はせたものである。すなはち（一）兵士一人當り一日の平均経費、（二）戦時兵力數、および（三）交戦期間がそれである。

イー・エス・ブリオフの計算によると、トルコ作戦中には、兵士一人の維持費は一日二留五〇哥、即ち一〇フランに當つた。これを現在の貨幣相場に換算すると、應召豫備兵の家族扶助費を除き、一日三留七五哥に當る。但しブリオフは、「未來戦においては、経費が著増することは、萬々間違ひない」と附け加へてゐる。豫備兵家族扶助費は、氏の計算によると、一日約〇・二三フラン、即ち八・五哥となつてゐる。（註一）合計兵士一人につき一日三留八三・五哥に當るのである。



(註一) ブリオフ「未來戰」第四卷、三五七—八頁、三六〇—一頁

エム・エヌ・ソーボレフは、ブリオフに續いて、兵士一名の維持費を一日三乃至四留以上と認めてゐる。(註一) これに反してグーレヴィツチ將軍の數字によると、戦時における一軍人の維持費は、一日平均僅かに一留五八哥にすぎない。(註二)

(註一) 「アグロノミチエスキエ・ジュルナル」(農學雜誌)、一九一四年、第七—八卷、二三頁

(註二) アー・アー・グーレヴィツチ、「戦争と國民經濟」軍事集録、一八九八年、第三號、六八頁

ドイツでは一日一人の經費は六マーク、即ち二留七七・七哥に等しといふことになつてゐた。

戦時における兵力數についても、わが國の評論家たちの意見は、これに劣らず喰ひ違つてゐる。ブリオフはゴータ年鑑の資料に基いて、この兵數を二八〇萬人としてゐる。(註一) これに反してグーレヴィツチ將軍は、ロシアは五四〇萬乃至五三〇萬人を軍に提供出來ると認めてゐる。(註二) エム・エヌ・ソーボレフは兵力五百萬人といふ數字を採つてゐる。

(註一) 未來戰、第四卷、三四九頁

(註二) 軍事集録、一八九八年、第二卷、二六六、二七三、二七六、第三卷、六八頁

一日及び一年間の軍事費總額については、わが評論家たちの指摘する數字は、これよりもずつと接近してゐる。ブリオフに従ふと、一日の經費は舊造貨で七百萬留、即ち現行留貨で一千五十萬留、こ

れに豫備兵家族扶助費約二十四萬留、合計一日當り一千七十萬留、(註一) 即ち一年三十九億二千萬留である。グーレヴィツチ將軍に従へば、この數字は一億四千八百三十六萬八千留、(註二) 即ち一年三十億五千四百萬留である。ペー・ペー・ストルツェ氏の意見によると、「歐洲戦争は、何の誇張もなしに云つて、日露戦争に比し、同一期間で四乃至五倍も高いものにつくであらう」(註三) といふことである。日露戦争は一九〇四年一月廿七日に始まり、ポーツマスの平和會議は一九〇五年八月十六日に終了した。従つて、この戦争は五六八日間續いたのである。一九〇四—五年には軍事上の必要に對し總額十七億八十八萬留、即ち一日當り三百萬留を支出した。従つて、ストルツェの意見によると、全歐洲戦争中にはロシアの戦費は、一日千二百萬乃至千五百萬留、一年四十四乃至五十五億留に達するであらう。ソーボレフは一日一千五百萬留といふ數字をとつてゐる。(註四) 興味あることは、ロシアの經濟學者エル・エヌ・ヤスノポリスキエが、未來戦におけるドイツの戦費を一年二十二億マーク、即ち十億二千萬留と踏んだドイツのある學者の計算を「信ずべからざること」と認めた(註五) ことである。

(註一) 「未來戰」第四卷、一七三、三五九、三六一頁

(註二) 「軍事集録」一八九八年、第三卷、六八頁

(註三) 「大ロシア」第二輯、一五二頁

(註四) 「アグロノミチエスキエ・ジュルナル」前掲、二四頁



(註五) ヤスノボリスキ、ロシヤの財政とその戦争準備」論集、「大ロシヤ」第二輯、八九頁

プリオフは、「ロシヤとの戦争が解決までに二ケ年以内しかかゝらぬとは、殆んど想像も出来ない」と考へてゐた。一方歐洲諸國の戦費は極めて巨額に達し、「二年間の戦争に必要な資金は發見も出来ないほどであらう。唯一の財源は紙幣であらう。しかし戦争遂行に必要な金額は極めて大きいので、紙幣の發行額は巨億に達し、紙幣は急激に減價し、その結果或る國々の政府は、第一次フランス共和國の戦争中にはれたやうに、必要品を買ひ取らずに、徴發するの餘儀なきに到るであらう。しかし前世紀末に出來た事は、現在では實行不可能である。いづれにせよ、現在の社會條件の下においては、戦争遂行に必要な資金の調達難が、戦争そのものを終熄せしめるであらう」。しかも氏の意見によると、大部分の國家が一ケ年の戦争の緊張にも堪へ得ないのである。(註一)

(註一) 未來戰、第四卷、二六四頁、第二卷、六三八、六四〇頁

ところが實際の戦費は、ロシヤの經濟學者たちの期待を遙かに超えた。戦争は彼等の考へてゐたよりも、國民經濟にとつて遙かに破壊的であつた。一九一五年一月廿八日國會において會計検査院長ハットーノフ氏が報告したところによると、「軍事行動開始以來一九一五年一月一日までに、この種の(戦争の用に充つる)經費總額は、動員費ならびに馬匹車輛の動員買上費をも含め、三十億二千萬留に達した。但し右期間における實際の支出額は二十二億四千三百萬留と算定された……既濟の諸經費の

數字によれば、毎日の戦費額は約一千四百萬留となる。このうち約百四十萬留は陸海軍の用に供するため陸海兩省の通常豫算(一九一五年度豫算によれば四億九千六百萬留)に繰入れた資金でもつて賄ふことになつてゐる。一日あたりの戦費を計算する場合に、動員費をも經常費に加算するのは不當である。惜しいことにはハットーノフ氏は、この演説の中で、動員費の金額を指摘してゐない。

一九一五年七月十九日の國會の席上、大藏大臣ペー・アー・バルクは次のやうに報告した。「軍事行動開始以來本年七月十五日までのわが戦費は六十九億七千一百萬留に達してゐる。この經費中、七月一日までに實際に支出した額は、概算五十四億五千六百萬留で、一日平均の實際戦費一千五百七十萬留である。但し將來は一日の戦費一千九百萬留以上と認めねばならぬ……わが國にとつても、わが同盟諸國にとつても、はたまた敵國にとつても、軍の兵力が絶えず増大し、軍需物資の補給と新造に要する費用が増加する時は、國庫に對する戦争の要求は一段と増加するものと覺悟せねばならぬ。かかる事情の下では、七月一日以降本年末までのわが戦費は概算四十億六千六百萬留となり、一九一五年度全年では七十二億四千二百萬留にも上るであらう。これに前年度の經費を加へれば、九十億餘となる」(註一)

(註一) 「一九一六年度國家歳出歳入豫算案」第一編、八、一〇、一九一〇、一二八、一三三頁

八月四日には國會の豫算財政委員會の席上、大藏大臣は、一九一五年八月一日までに六十億四千三



百萬留の軍事費を支出した、と報告した。一九一六年度の國家豫算案によると、動員費四億五千八百萬留（一九一五年度初支拂裁可）、戰爭費一九一四年度十六億四千六百萬留、一九一五年一月一日以降九月末日まで五十六億六百萬留となり、更に一九一五年末までに約二十億留を要する。一九一六年には、全年を通じて戰爭が繼續するならば、戰費は約八十億留に達するであらう。（註一）

最後に、一九一六年二月十六日、國會の議場で、大藏大臣バルクは次のやうに報告した。「開戦以來一九一六年一月一日までに我國は軍事上の必要に充つるため一百五億八千八百萬留を支出したが、このうち一九一四年度は十六億五千七百萬留を占めた。一九一五年度全年の軍事費は、概算八十九億三千一百萬留である。これらの経費はかかる巨額に達してゐるにも拘はらず、尙ほ激増の兆を示してゐる。開戦當時にはこれら経費は一日八百萬留にすぎなかつたが、次第に増加して、一九一五年末には一日三千一百萬留に達した……過去の經驗に基づき、一九一六年度全年の軍事費は百二十億を下らずと想像することが出来る」。

かくて以上の數字により、次のやうな一九一四—一九一五年の戰爭費の概算を得ることが出来る。

勤員費	ハリトノフ氏	バルク氏	一九一六年度豫算	バルク氏	一日當り戰費
一九一四・七一九—十二月末	一九一五・二二八	一九一六・七・二九	一九一六・二・一六	四五八	一〇・〇〇
	二、二四三	二、二八〇	一、六四六	四五八	
				一、六五七	

一九一五・一・一—七・一	三、一七六	五、六〇六	三、三四一	一八・五
同七・一—一〇・一	四、〇六六	二、〇〇〇	五、一三二	二四・六
同一〇・一—一二・三	九、五二二	九、七一〇	一〇、五八八	三一・二
計				

これらの數字は完全には合致してゐないが、その間の喰ひ違ひは、戰費の額について確然たる概念を掴み得ないほど大きなものではない。開戦後の前半年の間に、戰費はグーレイツチ將軍の指摘した額——一日當り八百四十萬留——を超えて、殆んどブリオフ氏の期待してゐた額——一千七十萬留——に近づいた。開戦後の後半年には戰費はブリオフ氏の豫想をはるかに抜き、ストルーヴェ氏やソールフ氏の期待額——一日當り千二百萬乃至五百萬留——をも抜いた。開戦第二年度の前半期には戰費は一日當り二千四百六十萬留に達し、ヤスノボリスキー氏がドイツにとつても『信ずべからざる數字』と認めたところの、一日當り二千八百萬留の水準に接した。同第二年目の前半期末には、戰費はこの過大視された數字をも遙かに抜いた。その彼の新しい資料によると、一九一五年には戰費として八十八億一千五百四十萬留（註一）が支出されたのだ。

（註一）「一九一七年度國家豫算案」第一編、一〇頁

一九一六年度の戰費については、國立銀行發行權擴張法案に關するアー・エス・ボスニコフ氏の報



告から正確な数字を得ることが出来る。年初四ヶ月——一月乃至四月——に軍事上の必要に充つるため三十九億九百萬留、即ち一日當り三千二百三十萬留の経費が支出された。但し同年四月中には一日當りの戦費は三千七百六十萬留に上つた。従つて、右の数字に従へば、開戦第二年目の後半には、六十億留以上の戦費を支拂つた筈となる。一月一日以降八月末日までに八十二億二千萬留を支出した。年末までには更に概算約四十六億五千萬留の経費が必要である。従つて、一九一六年度の戦費総額は一百二十八億七千萬留(註一)となるであらう。もし戦争が一九一七年度全年續くものとすれば、同年度の戦費は一百五十億留を下らないであらう。(註二)

(註一) 前掲書、二二頁

(註二) 前掲書、一三〇頁

開戦以來この三ヶ年間の経費は約三百十億留に達するものと想像される。しかし戦費はこれだけで済むものではない。例へば日露戦争の場合には、一九〇四—五年の戦争中には十七億一百八十萬留を戦費として支出したが、その後更に一九〇六—一九一一年の間に戦後復舊費として十二億三千八百七十萬留を支出したのである。(註一)

(註一) エル・エヌ・ヤスノボリスキ、*「ロシアの財政とその戦争準備」*、「大ロシア」、第二輯、九〇—九一頁

日露戦争とは比較にならぬほど大きな破壊性を持つ現戦争の戦後復舊費として、ここ三年間に支出

される三百十億留のほかに更に數十億の金が必要である。

この巨億の國庫支出は、増税と、國債と、紙幣發行によつて賄はれるであらう。

むしろ戦費捻出の最も望ましい方式は新しい税であつて、これによる時は戦争は云はば掛けではないに、現金買ひで遂行されるのである。しかしこの財源は、高率の租税をかけ、住民の支拂力を極度に緊めつけてゐる國家には存在しないのである。平時から既に國民から搾れるだけを搾つてゐたら、この財源は戦費賄ひのために何一つ餘分に出し得ないのだ。わが祖國の現状は實にその通りである。

一九〇〇年にはヨーロッパ・ロシアの人口一人當りの年収入は六三留(註一)となつてゐた。一九〇〇年現在のヨーロッパ・ロシア(フィンランドを除く)の人口を一億三千七十七萬人とすれば、同年度の國民所得は八十二億留に達する。

(註一) エス・プロコポヴィツナ著、「國民所得計算試案」自由經濟協會の事業、一九〇六年、第六輯、三五頁。わが國民所得額の問題については、現在では意見が極めてまちまちである。即ち二月十八、十九日及び三月廿二日、國會の討論の際、政府代表及び多くの議員たちは「財政時報」本年第一號に轉載されたロンドンの「エコノミスト」誌の算定を採擇したが、これによればわが國民所得は百五十億留、即ち人口一人當り八十八留となつてゐる。その時國會議員のアー・アー・ブブリコフ氏は「ロシア人口一人當りの所得は十一年ほど以前に各種の權威者によつて計算され、當時一年六十留と算定された。今これを一年八十八留と見るのは樂觀にすぎはしないか」(一九一六年二月十九日議事録、二〇二五頁)と述べた。アー・イー・コノヴァーロフ氏はその議場で、國民所得を百六十億と認めた(前掲、議事録、一九二九頁)。エム・イー・フリードマン氏は「財政時報」(一九一六年、第八號、二九三頁)誌上において、わが國民所得は二百億に等しと斷じ、この計算から發して、國民所得にしてかくの如くなれば、このう



ちより各種税として國庫に四十億留を納めることは國民にとり「甚だ困難なりとは云へ、尙ほ可能である」と結論してゐる。これでは國民所得の計算ではなくて、その氣儘な決定になり相だ。ロンドンの「エコノミスト」誌の計算は眞剣に考慮すべきものではあるが、われわれはこれを過大と認めてゐる。多分これは一八九四年度のロシアの國民所得を人口一人當り七十四留と算定したメルホルの計算 (Mullhall, Industries and Wealth of Nations, 1896) と同様に過大であらう。この同じ計算の中に、わが國貯金年額を二十五億留と過大に算定してゐることは、右のわれわれの想像を裏書するものである。實際にはわが國の年蓄積資金額は十億以下である。

一九一四年一月一日現在のロシア帝國の人口は、中央統計會議の計算によると、一億七千五百十萬人に達した。従つて、人口一人當りの從來の所得額を維持したものととして、國民所得は一百十億留に増加した筈である。最近十年間に認められた國內生産力の増加率は辛ふじて人口の増加率に相當するものであることは明白である。しかし或ひは反對があるかも知れないので、それを避けるため、生産力の増加率が遙かに人口の増加率を凌ぎ、人口一人當りの所得は一九〇〇年に比し十留だけ増加して、年七十三留になつたと假定しよう。すると國民所得は一百二十八億留に等しくなる。この國民所得のうちから一九一三年に國家は直接及び間接税ならびに國營企業及び財産收入として、總額二十一億三千四百萬留を取上げた。従つて一九一三年度の租税負擔は國民所得の一七%を占めたのである。この額には地方自治體への國民の支出額は含まれてゐないのである。

國民經濟がこんなに租税を負擔してゐたので、戦争の用に充つるため何か取立てようとしても、それは難しかつた。戦時には變轉常なき市場の一時的條件のため、個々の個人または團體の収入の景氣的増大が必ず起るものであるが、わが財政制度が十分の融通性を持たず、税務機關をしてこの景氣的収入増を掴ましめることが出来なかつたことも、増税を妨げた一半の理由であつた。この新税は所得税によつてのみ賦課されることが出来るが、所得税施行法案は一九一五年八月十一日、即ち開戦第二年目の前半期に到つて初めて國會で審議を開始した始末であつた。

のみならず戦時にはある種の税收入は必然に減少する。たとへば關稅、鐵道の旅客貨物通交輸送税、印紙税及び財産税がそれである。第一に、軍事行動が不利に進展したことは、わが國と西歐との通常の商品流通路を全く閉鎖し、その結果わが外國貿易は極度に減少した。即ち開戦第一年度には輸出は(價格から見て)前年度の僅か一一・三%、輸入は同じく二七・三%を占むるにすぎなかつた。そのため外國貿易と關係ある一切の國庫收入(木材收入を含む)は大低落を來した。

第二に、右の理由(軍事行動が不利に進展したこと)のため、開戦劈頭敵軍のためポーランド王國の半分を占領され、第二年目には全ポーランド王國と、グロドネン、グイレン、コヅノ、クルランヂヤ各州並びに、ミンスク及びヴォルイン兩州の大部分を奪はれる結果となつた。この理由による國庫歳入の未徴收額は、大藏省の計算によると、一年二億二千六百二十萬留(註一)に達する。

(註一)「一九一六年度國家豫算案」第一編、一二八—九頁



第三に、國營酒類販賣の中止も亦、國庫歳入を大削減した。「酒氣の抜けた」豫算は、「酒の入った」豫算よりも、非常に貧乏くさくなつたのである。

大藏大臣ヱー・エヌ・コフツェフを罷免し、その後任としてペー・エル・バルクを任命するに當つて、一九一四年一月卅日附で新大臣に賜つた勅語には、國庫の財産を人民大衆の精神的及び經濟的破産に依存せしむべからずと指示してあつた。大藏大臣はこの指示を實行に移して、三月十一日附で通牒を發し、間接税徵集所の支配人たちに對し、「禁酒勵行の結果として酒類販賣による國庫歳入の減少を憂ふべからず」と指令し、「酒類販賣の閉鎖または禁止に關する村會の請願に對しては遺漏なき好意を示し、常にこれに關する適法の判決に従ふべし」と命じ、また店舗の新設に當つては郡會及び市會の意見を聴取し、「最も眞摯にこれを尊重して變るべからず」と述べた。

一九一四年二月から六月にかけて採用された若干の酒類消費減少策の結果、一九一四年の上半期六ヶ月間には官營酒類販賣収入は、一九一三年の同期に比し一百七十萬留の減少となつた。尙ほ一九一三年度には、一九一二年度に比し、上半期だけでこの収入は四千四百六十萬留の増加となつた。ところが總動員となつて、一九一四年七月十六日には官營の酒類店舗は公安と秩序を遵守するといふ名目で閉鎖され、私營の酒類販賣は大縮小を受けた。その頃までは當の大藏大臣も、酒類販賣禁止が動員完了後も繼續されるものとは豫想してゐなかつた。大藏大臣は酒類價格引上法案を國會に提出したほ

どであつた。ペー・エル・バルクは一九一四年七月廿六日、國會の議席でこの法案の提案理由を説明して、次の二つの論據をあげた。即ち第一に、酒は生活必需品ではない。第二に、「酒類價格の引上げは間接に酒類消費の減少を來し、(その通り、といふ聲あり)、一方國內經濟生活に取り第一義的重要性を有するこの任務は、國民の精力と勞働能力と忍耐力とを全面的に強化する必要があるこの多難な大戰に際して、決して看過すべからざることである(さうだ、といふ聲あり)」と述べた。國會は、國民の酒氣を抜く任務は「看過すべからず」といふ大藏大臣の意見に賛成し、酒類價格を大いに引上げた。その頃、大藏省では、あとで國會の席上アー・イー・シンガルフが述べたやうに、「火酒を内密で三〇度にうすめ、後になつてこの火酒變造費として數百萬留を儲けようとした」。(註一)

(註一) 議事録、一九一六年二月十六日、一七七六頁

しかし八月廿二日の勅令によつて、現行の酒精、葡萄酒及び火酒製品の販賣禁止を爾後戰爭が終熄するまで繼續すべし、と命ぜられた。それ故、一九一五年度の豫算には、第一種飲食店および集會所クラブ賣店における官製酒類の販賣、並びに特殊用途酒精販賣の収入のみしか計上してなかつた。そして既に一九一五年度豫算案の編成を終つた一九一四年九月廿五日には、皇帝の裁可を仰いだ閣議決定事項をもつて、村會、郡會及び市會に對し、その管轄の範圍内において、あらゆる酒精飲料の販賣を一切禁止する權利を與へられた。民間の各機關ではこの權利を廣汎に行使したので、酒類販賣収益



は豫算案に計上した分よりも更に著減した。かくて國庫は思ひがけもなく、年額約七億留の歳入を失つたのである。

云ふまでもなく「酔の廻つた」國庫収入は國民經濟にとつて最も辛い負擔であつたし、その放棄は極めて崇高なことではあつた。しかしながら、過去數十年に互つて國民經濟にとりかくも害毒のある租稅形態を使用してゐたのに、住民の支拂能力を最高度に搾るべき瞬間に際して、これを放棄せしめられた財政制度のことは述べない譯には行かぬ。

豫算財政委員會の報告者たるアー・イー・シンガレフは、一九一五年八月十八日、國會において、この酒類販賣禁止策について次のやうに述べた。

「戦時には古今東西を通じて各交戦國とも資金の缺乏を來たした。右今東西を通じて各國とも善惡あらゆる手段に訴へ、或ひは市民の自發的獻金により、或ひは強制的請求により、更に私有財産の公然たる沒收によつて、これらの資金を調達した。しかし古今の世界史を通じて、各國を通じて、戦時中に國家が最も重要な歳入を放棄した例は嘗つてなかつたのである。あらゆる財政史を通じて、國家權力がかかる果敢にして驚倒すべき方策を行つたことを知らないのである」。

勇敢といふことは、むしろ甚だ大切な素質であるが、國家の政策は何を措いても合理的でなければならぬ。世界大戰の最中に政府がわが豫算を完全に破壊するが如き根本的破局的な變革を財政制度に

加へざるを得なくなつたとすれば、わが財政制度が如何なる内面的崩壊を來さざるを得ないかはけだし明白である。

かくて大藏省は、何は措いても、わが豫算に生じたこの大穴を少しなりとも埋めることに専念せねばならなかつた。通常の租稅資金によつて戦費の一部なりとも賄ふなどといふことは、全く問題にすらならなかつた。

かくて生じた歳入不足を埋めるため、既に確認を受けた一九一四年度の豫算を縮減し、從來のある種稅を引上げ、新稅を施行し、最後に一聯の歳出綱目を軍事基金の負擔に編入した。

内閣において縮減された融資總額は三億四千一百三十萬留で、その内譯は左の通り。

	豫算	豫算外支出
一九一四年	二四四・六	六六・四
一九一三年	二六・四	一・一
一九一二年	二・八	〇・〇

(註一) 經常部一八一・〇百萬留、臨時部六三・六百萬留

最近數年間の國家豫算は、(過去の決算濟豫算項目の支出殘高及び信用操作を除く) 次のやうな數字になつてゐる。(單位百萬留)



月	入		出		對一九一三年(百分比)
	經常部	臨時部	經常部	臨時部	
一九一三年決算	三四一七・四	一三・八	三〇九四・二	二八八・七	四八・二
一九一四年豫算	三五七二・一	一三・四	三三〇九・五	三〇四・一	▲二八・一
同 決算	二八九八・一	七・二	二九二七・一	二七六・四	▲二九八・二
一九一五年豫算	三一一三・一	九・五	三〇六八・一	一三四・四	▲六〇・八
同 決算	二八二七・七	五〇・六	二六九九・四	一九八・五	▲一九・六
一九一六年豫算	三〇三三・一	一五九・〇	三二八七・九	三五八・七	▲四五五・四
一九一七年 大藏省豫算案	三九九八・六	六〇	三七三四・七	三四三・二	▲七三・二
一九一三年	一九一三	一九一四	對一九一三年(百分比)	一九一五	對一九一三年(百分比)
七月	二六二・六	二二六・七	九〇・一	二一〇・九	八〇・四
八月	二九三・六	一二七・〇	四三・三	二二四・〇	七六・三
九月	二八四・二	一五六・七	五五・一	二二二・四	七四・七
十月	二八五・二	一五五・二	五四・六	二四七・〇	八六・六
十一月	三四六・三	一九六・八	五六・八	二七四・四	七九・二

かくて經常部國庫歳入は一九一三年度の三十四億一千七百四十萬留から、一九一四年度には二十八億九千八百十萬留に低下し、更に一九一五年には二十八億二千七百八十萬留に低落した。この低落の月別足取りは次表の通りである。

月	經常部	臨時部	對一九一三年(百分比)
十二月	三三二・九	二五八・一	七七・五
十一月	三一二・四	二一四・七	六八・七
十月	二六七・九	一六四・六	六一・四
九月	二五三・五	一六九・三	六六・八
八月	二五七・六	二〇四・六	七九・四
七月	三一三・三	二四六・三	七八・九
六月	三六三・九	三一・九	八五・七
前半年	一八〇四・八	一一三〇・五	六二・六
後半年	一七六七・六	一三一・四	七四・二
全年	三五七二・三	二四四一・九	六八・四

(註一) 短期債券割引による國立銀行の利益九千一百三十萬留を除く。

概算によると、一九一六年七月中には經常部收入二億八千五百萬留、八月中には二億九千五百萬留となつてゐる。

開戦及び官營酒類販賣中止後の國庫收入の著減——八月中五六・七%方、九月中四四・九%方の減少——は新税の施行を必然ならしめた。一九一四年度後半期には總額五億九千四百萬留の新税が施行され、一九一五年度には總額僅か六千八百萬留の新税しか施行出来なかつたが、一九一六年度には三億八千八百三十萬留の新税が施行された。従つてこの三ヶ年間に合計十億五千一百二十萬留の新税が







煙草收	煙草用紙收	同ヶ草收	砂糖收	茶收	石油收	燐寸收	關稅收入	印紙及裁列稅	財產移轉稅	港灣稅	旅客貨物及棉花稅	被保險財產稅	各種稅	鐵山收	貨幣鑄造益金	郵便電話收	貨貸土地、水面等	森林收	官營鐵道	
七九八	八二四	九二八	二二七	二二二	一四九・六	七〇〇	二五二・二	八・一	三三・二	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・〇
▲〇・五	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

五六

この表を見れば租稅收納額の低落の原因は、酒類販賣の停止ばかりでないことが分る。この四ヶ年間の豫算計上額を擧げると次表のやうになる。

官營工場その他	▲一・〇	〇・二	〇・五	—	〇・三	—	—	▲〇・一	—	▲一・八
資本利子	四四・五	四七・七	四七・一	—	五九・九	五九・〇	—	五九・〇	—	一五・〇
私營鐵道收益分配金	二六・六	三〇・九	三〇・四	—	二六・五	二六・七	—	二四・七	—	二四・七
國庫への補助金	二九・四	二八・七	二四・六	—	二七・六	二五・九	—	二六・四	—	三〇・〇
合 計	二三四・〇	三二九・六	一七〇・五	—	五四四・九	一九五・四	—	一七五・七	—	六八〇
酒類收益を除いた額	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
一九一四年豫算	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同年中施行新稅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
一九一五年豫算	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同年中施行新稅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
一九一六年豫算	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同年中施行新稅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
一九一七年豫算	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

もし國民の給附力が低下しなかつたならば、酒類販賣收益を除く一九一五年度の豫算は一億七千八

五七



百萬留、一九一六年の豫算は二億八千九百九十萬留、一九一七年の豫算は二億一千八百六十萬留方それぞれ増加せねばならぬ。この未收納額はロシア領土の一部を敵軍に占領されたためばかりではなく、住民の支拂能力が、特に開戦第一年度に幾らか低下したことを證明するものである。しかるに戦前にはこの支拂能力は急増し、豫算の各項目では年々巨額の増加を來してゐたのである。酒類販賣の中止は、疑ひもなく、住民の給附力を向上せしむべきものである。従つて收納額の低下は特に重要である。それは國內經濟活動の縮小を、國內生産力の低下を證明するものである。

新税のうち法規通りに上下兩院を通過して施行されたのは葡萄酒、麥酒及び煙草の間接税引上（一九一四年七月廿六日）と、一九一七年度豫算案に計上された所得税法（一九一五年八月廿五日提出、一九一六年四月六日確認）の二つにすぎない。次に鐵道、郵便及び電信料金の増額は行政手續をもつて施行された。爾餘の新税は全部憲法第八十七條によつて施行された。これを見ても、これら新税の性格を知ることが出来る。即ちそのうちの壓倒的な部分は間接税である。次に新税のうち若干は極めて根據のある批判をうけた。

特に失敗と認むべきは、一九一四年十一月三日に施行された鐵道輸送貨物税であつた。その主たる特徴は、課税率が輸送距離に應じて變化しない點にあつた。一九一五年度豫算に關する豫算委員會の報告には次のやうに述べてある。「貨物税に關しては豫算委員會は、基本法第八十七條による各種新税

の迅速なる施行態度を不充分なりとする本委員會の一般の見解は、かくも不備にして貨物輸送の條件に適せず、その施行後直ちにその機構に一連の改正を加ふる要ある本税の一例によつても正認されるものと見做さざるを得ない。何となればある點において、特に短距離輸送の點において、本税は禁止税の性質を持ち、往々にして極めて長距離に互る荷馬車輸送の復活を助長すればなり」。(註一)

(註一) 一九一五年度國家豫算に關する豫算委員會報告、三〇頁

豫算委員會の報告者エム・エム・アレクセエニコ氏は國會においてこの意見を敷衍して、本税は「全商工流通に影響し、小距離貨物に重大影響を及ぼし、輸送物資の累積負擔を來し、物價に複雑な影響を及ぼすものである」(註二)と指摘した。

(註二) 議事録、一九一五年一月廿八日、九六頁

本税の完全な批判はイー・アー・ポブラフスキー氏(註三)が下してゐる。氏は次のやうに述べた。戦時貨物税は鐵道運賃を混亂せしめ、一定の輸送距離においては、旅客運賃の方が、至急便はもちろん、除行便の貨物運賃よりも安いといふ結果を來した。短距離の場合には貨物税は多くの場合、運賃よりも三乃至六倍高く、明かに禁止税の性格を帯び、荷馬車輸送を必然ならしめてゐる。それ故一九一五年の一月には止むなくその最高額を運賃の五〇%と規定せざるを得なかつた。次にこの税率は一ブード當り〇・二五乃至一五カベークの間を上下し、平均運賃の二五乃至三〇%となり、高價な貨物よ



りも、むしろ大衆的な安價な貨物に重壓を加へてゐる。これ等大衆用品の税率は運賃の三〇乃至四〇%、甚しきは八〇%にも達してゐるが、高價な貨物は安い貨物より一層高い運賃に堪え得るにもかかはらず、例へば織物類の如き僅か一〇%前後の課税を受けてゐるに過ぎない。それ故後になつて一部のブード税率を引下ぐるの止むなきに到つた。最後に、輸送税は製品のみならず、原料、燃料、補助材料等にも課税されるので、既製品の實際上の課税額は往々にして税率の三乃至四倍に上つてゐる。

(註一)「一九一四—五年度のロシアにおける鐵道税と鐵道運賃改正の條件」一九一五年、三六—九、五〇、七一—三、七八—八四、九一頁。「戰時貨物税と物價騰貴に對するその影響」現代物價騰貴研究會出版物、第三輯、一九一五年、七六一—七、八〇、八五—九〇、九七頁

要するに、新税は主として大衆日用品にかかり、贅澤品はよけて通つてゐる。一九一五年八月十八日國會においてエス・ヴェー・ウオストロチン氏は次のやうに述べた。「本議場においては大藏大臣以下全員が贅澤品課税の思想に對し甚だ同感の意を表された。然るに我政府は戰時下においてこの問題を如何に解決したであらうか。憲法第八十七條に基き政府の發布した各種の臨時法規を検討すると、まさにその正反對である。日用必需品は全部最大限に課税を受けた一方、贅澤品は僅かな引上げを見たか、或ひは全然課税を受けないまゝとなつてゐる」。(註二)

(註二) 議事録、一九一五年、八月十八日、九五二—三頁

開戦劈頭には多少は歳出を縮減することが出来たかも知れぬが、戦争が長期の消耗戦の性質を帯びた瞬間から、猶餘なき解決を要する一聯の國家的要求が起り、又舊來の要求を充足するに必要な経費は物價騰貴の結果急増を遂ぐる筈である。然るに國家の歳入は多大の未收を生じてゐるので、歳入不足は巨額に上るに違ひない。それ故この歳入不足を避けんがため、多くの経費を軍事基金の負擔に繰り入れたのである。

かくて陸海軍動員部隊の用に充つべき當面の経費、總額五億一千二十萬留は、開戦以來一切軍事基金に繰込まれてゐる。一九一五年度には道路の新設、在來の道路補強工事に關する各種工事費として、(車輛の購入費まで含めて)總額約四億留を軍事基金から支出した。本年度には建設工事費だけで三億五千五百萬留を遂行する豫定で、三億留以上の車輛を注文する件が問題となつてゐる。この合計六億五千萬留である。次に官營鐵道従業員待遇改善費として一九一六年度には軍事基金から六千八百萬留を支出し、同様に郵便電信従業員待遇改善費一千四百萬留及び税關吏の日常支給(六萬留)を行つた。生活費の昂騰は戦争のために起つたものではあるが、これらの融資は戦争と直接の關係はない。従つて戦時下の必要及び開戦に先だつ特殊準備の用に充つべき融資を規定した第八十條によつてこれらの経費を支出したことは、全く不當である。最後に軍事基金から支拂つたものは軍の背後における衛生水利工事費一千萬留ばかりでなく、幾多の荒廢地を耕作に適せしめるために行つた廣汎な土



地改良工事費——一九一五年六百七十萬留、一九一六年一千二百三十萬留——もある。サラトフ、サマラ兩州の水利工事、サマラ州の測量、同地方における防砂護岸工事及び植林事業、シルソン草原東南部の灌漑、ミリ草原の灌漑、ロマノフ運河水系の小水系網建設、浚渫材料の購入、ゴロドナヤ草原のセメント工場建設、チュー河溪谷の灌漑着手、カリヂール河溪谷の灌漑、並びにモスクワ農業専門學校技術部の校舎建設がこれである。

これらの工事がいづれも戦後經濟國力の復活にとつて極めて有益なことは疑ひもないが、戦時下の必要には何の関係もないのである。かくて軍事基金のうちから一九一五年度にこれらの工事に充てた額は九億留以上で、一九一六年度には十二億留以上、即ち總戦費の約一〇%を支出することになつてゐる。これらの経費はいづれも特別各省協議會の決議に基いて支出される。この協議會は一九一四年十二月十二日及び一九一五年一月二日の閣議の決定によつて設立されたもので、各省は軍事基金からそれこれの経費支給について本協議會に請願するのである。一九一六年六月十七日、國會は豫算財政委員會の報告者アー・エス・ボスニコフ氏の提案に基き、軍事基金中よりの支出振りの總花式を停止するため最も斷乎たる方策を講ぜよ(註一)と決議した。

(註一) 國會のこの決議があつたにも拘はらず、アー・アー・ポプリンスキー氏は九月初めに軍事基金から農業機械購入費、同生産擴張費、林業組織費その他として一億一千三百萬留の支出案を提出した。

かかる事情では戦費の一部なりとも租稅收入によつて埋め合はせることなど問題にもならなかつた。わが國家豫算の現状は、經常部歳入によつて戦費を賄ふのではなくて、軍事基金によつて經常部歳入の一部を埋め合はせる状態である。この軍事基金からの巨額の買入があるばかりに、わが國の豫算は年々少額の歳入不足で辻褄が合つてゐるのである。軍事費を賄ふ今一つの財源は國債である。貨幣市場に對して戦争が發した要求が如何に度はづれであつたかは、軍事費と戦前の貨幣市場との大きさを比較すれば判断がつく。世界市場及びロシアにおける有價證券の發行高は次のやうであつた。(單位一〇億留)

世界市場	ロシア(註二)
一八九〇—一四年	三・一
一八九五—一九年	四・一
一九〇〇—一四年	五・八
一九〇五—一九年	八・〇
一九〇〇年	九・九
一九一一年	七・三
一九一二年	七・六
一九一三年	七・九
	?

(註二) 一九一五年度國家豫算案、第二編、一〇六頁



六四  
 しかるに戦費はロシヤ一國だけでも、毎年八十乃至百二十億留に及んでゐる。各交戦國の貨幣需要  
 が世界市場の資本形成力を凌ぐことは明白である。この事情が、戦費賄ひのため行つた政府の金融操  
 作の性格を豫め規定したのである。

開戦以來戦費を賄ふために次のやうな國債が發行された。(註一)

(單位百萬留)

一九四年 七月三日	五分利短期債券	四〇〇
" 八月三日	四分利國庫證券(シリーズ)	三〇〇
" 一〇月三日	五分利内國債	五〇〇
" 六日	五分利短期債券	四〇〇
"	同上、一千二百萬磅	一一三・五
" 三月六日	五分利短期債券	五〇〇
"	同上、四千萬磅	三七八・三
一九一五年 二月六日	五分利短期債券	六〇〇
"	五分利内國債	五〇〇
" 三月三日	外債六億二千五百萬法	二三四・四

" 三月七日	四分利國庫證券	三〇〇
" 四月六日	五分利國庫證券(外國)	二〇〇(註二)
" 二四日	五分半利内國債	一〇〇〇
" 六月二日	五分利短期債券五千萬磅	四七二・九
" 一八日	五分利短期債券	五〇〇
" 七月五日	五分利短期債券	一五〇〇
" 八月四日	四分利國庫證券	二五〇
" 二六日	五分利短期債券	一〇〇
" 九月九日	五分利短期債券三千萬磅	二八三・七
" 一〇月九日	外債交渉成立、總額	五五〇〇
" 二六日	五分半利内國債	一〇〇〇
" 三月三日	五分利短期債券	二〇〇〇
一九一六年 二月六日	五分半利内國債	二〇〇〇
" 六月一日	五分利短期債券	三〇〇〇
"	五分半利國庫證券(外國)	二二二五



"	十月二日	五分半利内國債	.....	三〇〇〇
"	"	五分利短期債券	.....	三〇〇〇
"	十月三日	外債交渉成立、總額	.....	二〇〇〇

(註一) 以前に發行した債券の償却に充つるため行はれた國庫證券の發行は除く。

(註二) このうち一九一五年前半期には(北米合衆國で)僅々一九・八百萬留しか消化しなかつた。一九一六年前半期には更に五〇百萬留(うち日本で四八・四百萬留、合衆國で一・六百萬留)消化した。

一九一五年十二月卅日發行に決定した短期債券は消化されなかつた。これと同様に、一九一五年十月九日成立を見た外債も、僅かその一部しか消化しなかつた。同盟諸國との十月協定によると、對外註文及び債務の支拂に充つるため、わが國に對しフランスは五分利融資五億留以内、イギリスは六分利融資三十億以内をそれぞれ設定し、且つ國立銀行の在外「金」準備を強化するため無利子融資二十億留を設定した。(註一) この最後の二十億は債務ではなくて、大藏大臣が國立銀行の現行發券權を侵さずして二十億留の信用券を發行することを可能ならしめる一つの取引である。あとの三十五億留は本當の借款であつて、わが國は必要に應じて、イギリスでは一ヶ月二千五百萬磅、フランスでは一億二千五百萬法を受取るのである。このうち一九一六年一月一日までに二億五千八十萬留、一九一六年七月一日までに七億九千三百萬留が消化された。

(註一) イー・アー・ミハイロフ、「戰爭とわが貨幣流通」一九一六年、一五頁

かくてわが國は戰爭の用に充つるため、合計次のやうな金額を借入れたのである。(單位百萬留)

	ロ シ ャ		國 内		外 國	
	短期債券	國庫債券	國 債	計	國 債	計
一九一四年七月—二月	一三〇〇	三〇〇	五〇〇	二一〇〇	四九一・八	七二七・一
一九一五年一月—六月	一一〇〇	三〇〇	一五〇〇	二九〇〇	五三四・五	八四三・〇
一九一五年七月—十二月	一六〇〇	二五〇	一〇〇〇	二八五〇(註二)	四五〇〇(註二)	二五九六・四
一九一六年一月—六月	二五〇〇	一	二〇〇〇	四五〇〇(註二)	一二三五〇(註二)	
合 計	六五〇〇	八五〇	五〇〇〇	一二三五〇(註二)	二五九六・四	

(註二) 在外資金による信用券總額約一二〇〇百萬留の發行を含まず。

かくの如く軍事費は主として國內市場の資金によつて賄はれた。開戦以來二ヶ年間に發行した國債のうち國內市場割當は約八四%、外國市場では僅か一六%にすぎなかつた。國內市場で調達した資金の大部分は短期國庫債券によるものであつた。國內債總額に對する百分比を示すと、

短期國庫債券	.....	五二・六%
國庫證券	.....	六・九%
國內債	.....	四〇・五%

ところが短期國庫債券は、主として國立銀行が、その信用發行によつて割引するものである。従つ



て、戦費を賄ふ主たる財源は紙幣の發行であつた。

あらゆる國家の蓄積力、その蓄積資金は、現世界戦の怪物の如き戦費を賄ふには全く不充分である。あらゆる交戦國が國民所得のうちで消費資金をなす部分に大いに手をつけざるを得ないのは明白である。ロシアは國民所得百二十八億とすれば、蓄積資金は僅かに十億留にすぎないので、殊のほか消費資金からの借入れを行はざるを得なかつた。國民蓄積資金は債券で取上げることが出来る。しかし國家が住民の消費資金の一部に手をつけようとする時は、債券でその借入れをやることは出来ない。多少の金額なら租税によつて取ることも出来る。しかし大きな金額になると、信用券の發行以外に取上げる術はない。かくて紙幣の發行は不可避となつた。與へられた國民經濟事情の下においては、これを措いて戦争の用に充つべき資金を調達する手段がなかつたからである。

紙幣發行に訴へる必要は、イー・エヌ・ブリオフも既に豫想してゐた。氏は「未來戦においては、以前の光輝ある時代に立戻るといふが如き筋の通つた希望は全く捨てて、巨額の紙幣を發行するの餘儀なきに到ることは、何の疑ひもない」と豫想してゐた。たゞ氏はその必要を來す理由は、世界市場が世界戦の戦費を賄ふに足りないことではなくて、國定紙幣の相場が下ることだと思つてゐたのである。「戦争の初期にはあらゆる國家を通じて相場の大崩落を來し、戦争目的のためにする新規國債の締

結は極めて苦しくなり、専ら紙幣を發行せざるを得ないであらう。後には、これら紙幣の大増發の結果、その支拂能力が低下すると、世人は紙幣をさけて、相場の大昂騰を來し得べき有價證券、ことに價格に變動がないとか、または戦争のため大した影響を受けることのない収入を土臺とする有價證券を新規に購入するやうになる」。(註一)

(註一) イー・エヌ・ブリオフ、「未來戦」一八九八年、第四卷、三七二、三七三頁

ブリオフ氏は未來を正しく豫想しながら、全然誤つた説明を加へたのである。まして紙幣の大増發のため國內における紙幣の量が度を過し、流通上の必要をはるかに凌ぐことになれば、その購買力は減少しないとしても、即ち留の相場は下らなくとも、利附證券への交換が必然に始まる。留の相場が下れば、それは信用證券においても、國債においても、同様に下るではないか。國內の紙幣が多くなれば、利附證券の買入れは、留貨と同一の價值喪失をなす國家の借金證文と替へて、爾後の價值喪失を防ぐために行はれるのではなくて、市民の手に自由な金があつて、その一部を利附證券に注ぎ込むために行はれるのである。ところが産業企業の株券や、外貨、例へば磅で發行した國債の買入は、これとは別である。この場合には價值の低落して行く留を、價值の低落する筈のない證券に替へることとなるのである。かやうな取引の場合には買手は新しい利益を得る譯で、ブリオフ氏が正しく指摘したやうに、これら證券のより高い相場で給附を受けるに違ひないのである。



ロシアの別の經濟學者——エム・イー・ボゴレーボフ——はこの問題について全然誤つた見解を抱いてゐる。氏の意見に従ふと、「もし資本市場に對して單純な算術的尺度を使ふならば、現代國家は歐洲大戰に際して紙幣を全く使はなくてもやつて行けると結論してもよい。けだし資本市場の年生産力は臨時軍事費を賄つて餘りあるからである」。(註一)

(註一) エム・イー・ボゴレーボフ、「國債」一九一〇年、三三八頁

われわれは先にその計算をして、世界資本市場の資金では、ロシア一國の戦費を賄ふにも足りないといふ確信を得た。明かに、ボゴレーボフ氏は、現戦争がこんな大規模のものとなることも、全交戦國の物質力のこんな大緊張を要求することも、全然期待してゐなかつたのである。

戦争が交戦國の國民經濟に與へる損害は、戦費が世界資本市場の資金を超えなければ、ひろんずつと少いに違ひない。しかし交戦國の將來が軍事行動の進展如何に左右され、各國の存在そのものが一枚のカルタに賭けられてゐるとなれば、交戦諸國の手許に残つてゐる最後の手段——紙幣の發行——に訴へることもけだし必然であらう。

前述の通り、紙幣は國立銀行が主として短期國庫債券を割引するために發行したのである。これらの短期債券は私營銀行や各種個人も購入する。國立銀行以外に分散された短期債券の額については、二、三の證言がある。國立銀行の一九一五年度營業報告によると、公開市場に散布された短期公債の

額は、一九一五年一月一日現在で一億五千二百萬留、一九一六年一月一日現在で七億二千四百萬留となつてゐる。エム・イー・フリードマン氏は、個々の商業金融銀行の手持短期債券の額に關する數字を擧げて、脚註に「バランスシートにこの債券の額を擧げてゐる銀行は極く少數にすぎない」と指摘してゐる。氏の考へでは、各銀行の手持債券高は、そのバランスシートに出てゐるよりすつと多いのである。氏の意見に従ふと、一九一五年二月八日現在「ロシアの各私營銀行の割引債券高(總割引高と國立銀行の割引高との差額)は三億留であつた。われわれは二月廿三日までに、國立銀行以外で二億六千二百萬留の短期債券が割引されたと考へる根據を持つてゐる」(註二)のである。

(註二) 「戦争とロシアの國家經濟」論集「世界戦の諸問題」収録、一九一五年、三七九頁

一九一五年七月十九日大藏大臣バルクは國會において、一九一五年五月一日現在で國立銀行以外に散布された短期債券の額は約三億五千五百萬留であると報告した。一九一五年八月四日國會の豫算財政委員會における大藏大臣の言明によると、八月一日現在で私營銀行の割引した短期債券は三億八千一百萬留であつた。一九一五年八月十八日國會における同大臣の言明によると、同日現在で國內市場に散布された短期債券の額は四億留を超ゆるのであつた。豫算財政委員會の報告者アー・イー・シンガー氏は、各私營銀行においてこれら債券が四億七千八百四十萬留以上割引されたと確言した。一九一六年度豫算案によると、私營銀行及び個人の購入した國庫短期債券の額は一九一五年十月一日











二・一  
六・一  
九・一

一〇〇六  
一二九五  
二七〇八・九

約 一二五〇

七六

四八九・〇

六三五・六

特に注意すべきは一九一五年十月一日現在の数字である。明かに、この数字を對照すれば、各私營銀行のバランスシートに公表される数字によつて、これら各銀行の割引した短期債券の實數に相當に近い資料が得られる。もしフリードマン氏の云ふが如く、自行のバランスシートにこれら債券の額を特に擧げてゐる銀行は僅かで、多くの銀行はこれを擧げてゐないといふのが本當ならば、一九一五年十月一日現在で双方の数字がこんなに接近する筈はないのだ。次に又これらの数字を見れば、他の金融機關ならば個人の手持ち短期債券高は一九一五年秋までは極めて僅少——一九一五年十月一日現在僅かに一千九十万留——であつたと云はねばならぬ。十月一日以前に個人や、商業銀行以外の金融機關が、多額の短期債券を持つてゐたと考ふべき理由はない。更に忘れてはならないのは、一九一五年の八月に到つて初めて、有産者の遊資を短期國庫債券に投下し易からしめるため、その額面を十萬留から五千留(註二)に引下げ、期限を六ヶ月一本建から三ヶ月、六ヶ月、九ヶ月及び十二ヶ月に變へたことである。従つてフリードマン氏の計算した数字や一九一五年五月一日と八月一日に大藏大臣バルク氏の報告した数字は多少誇大であると認めねばならぬ。またシンガーレフ氏の引用した数字も誇

大であると認めねばならぬ。尙ほ氏の数字と同日現在の各私營商業金融銀行の割引した短期國庫債券の額とを對照して見ると、シンガーレフ氏の使用した原本に誤植があると見て誤りあるまい。一九一五年秋以來各種對策を講じたため——主として短期債券の額面を一千留に引下げたため——國立銀行及び各私營銀行以外の個人及び各種金融機關への短期債券の消化は甚だ順調に進んだ。しかし今日でも、發行される短期債券の大部分は國立銀行が割引してゐるのである。

(註一) 一九一五年十二月卅日新短期債券發行に當つて、額面を一千留に引下げた。一九一六年三月十八日附勅令は、あらゆる債券の額面を一千留に引下げ、その振當國の當該貨幣相場比率をその債券に記入することを許した。

國立銀行をして戦時下の要求に相當するだけ短期國庫債券の割引を行はしめるため、その發行權は三億留から十五億留に引上られ(一九一四年七月廿七日)、ついで二十五億留(一九一五年三月十七日)、五十五億留(一九一六年八月廿九日)まで擴大された。このオペレーションの進行については、次の数字を見れば判る。

年月日	信用券流通高	短期債券割引高	短期債券割引高以上の信用券發行高
一九一四・七・一	一六三〇・四	—	一六三〇・四
八・一	二三二一・一	—	二三二一・一
九・一	二五五三・六	一七五・〇	二三七八・六
一〇・一	二六九七・五	二三九・四	二四五八・一

七七



一一・一	二七九一・〇	四三四・二	二三五六・八
一一・一	二八四六・〇	四七三・四	二三七二・六
一九一五・一	二九四六・六	六六三・一	二二八三・五
二・一	三〇五九・一	一〇〇六・二	二〇五二・九
三・一	三一五一・五	一一三〇・四	二〇二一・一
四・一	三三一二・七	一二八六・七	二〇二六・〇
五・一	三三六一・八	一四八九・八	一八七二・二
六・一	三四七七・三	一五七三・二	一九〇四・一
七・一	三七五五・六	一五八九・四	二一六六・二
八・一	三九六二・五	二一四六・七	一八一五・八
九・一	四二一〇・八	二四二二・〇	一七八七・八
一〇・一	四八九三・二	二六五〇・四	二二四二・八
一一・一	五〇四〇・五	三三一九・〇	一七二一・五
一二・一	五二〇一・三	三二八九・一	一九一二・二
一九一六・一	五六一六・八	三二七〇・一	二三四六・七
二・一	五七〇九・五	三五〇五・〇	二二〇四・五
三・一	五八九九・一	三八六七・二	二〇三一・九
四・一	六〇七八・三	三七四四・六	二三三三・七
五・一	六二一三・〇	三六四六・六	二五六六・四

六・一	六三七九・五	三六七九・三	二七〇〇・二
七・一	六六二八・三	三八二二・七	二八〇四・六
八・一	六八七六・二	三八七三・四	三〇〇二・八
九・一	七一二二・三	四四二〇・三	二七〇二・〇
一〇・一	七五八七・一	五一四四・五	二四四二・六
一一・一	八〇八三・四	六二〇二・二	一八八一・二
一二・一	八三八三・五	六一八五・一	二一九八・四

この表の示す通り、国立銀行が信用券を發行するのは、短期國庫債券を割引するためばかりではな  
い。宣戦布告後最も早く現はれた直接の結果の一つは、貨幣市場の恐慌であつた。民衆は各種の金融  
機關から自分の預金を引出さうと驅けつけた。その危機的瞬間に国立銀行が私營金融機關の助太刀を  
した。一九一四年度国立銀行營業報告に述べてある通り、「宣戦布告の結果、私營各種金融機關は本行  
に對し、手形の再割引及び有價證券を擔保とする當座借越につき、全然異例の要求を提出し、これ  
を満足せしめるため本行は八月一日に到る數日間に四億二千五百十萬留を貸出した。この貸出は、動員  
及び戦争のため起りたる、これまた異例の現金要求を充足する可能性を上記各金融機關に與へた。し  
かしその後間もなく私營銀行への資金の上潮を來たし、これら銀行は年内に本行に對する負債の大部  
分を償却したるのみならず、内國債の消化に關し極めて重大なる援助をなすことを得るに到つた」。



(註一)

(註一) 一九一四年度、國立銀行營業報告、第七頁

次にこの私營各種金融機關に與へた援助が國立銀行の貸借對照表に如何に現はれてゐるかを検討しよう。短期債券を賄ふ爲め以外に發行された銀行券の高と、手形割引及び有價證券擔當の貸出高とを比較して見ると、次の通りである。(單位百萬留)

年月日	信用券 發行高	七月一日に 比し増額	一九一四年 手形割引高	有價證券擔當 貸出高	割引及び擔當 貸出合計	七月一日に 比し増額	一九一四年 信用券發行 過剩高
一九一四・七・一	一六三〇・四	—	四〇六・一	一一五・七	五二一・八	—	—
八・一	二三二一・一	六九〇・七	七一・七	二五二・一	九六三・八	四四二・〇	二八四・七
九・一	二三七八・六	七四八・二	七三三・八	二二二・四	九四六・二	四二四・四	三二二・八
一〇・一	二四五八・一	八二七・七	七〇九・四	二〇九・五	九一八・九	三九七・一	四三〇・六
一一・一	二三五六・八	七二六・四	六四六・二	二一八・五	八六四・七	三四二・九	三八三・五
一二・一	二三七二・六	七四二・二	六三七・四	二五八・三	八九五・七	三七三・九	三六八・三
一九一五・一・一	二二八三・五	六五三・一	六一八・八	二五四・一	八七二・九	三五一・一	三〇二・〇
二・一	二〇五二・九	四二二・五	五四三・六	二〇三・三	七四六・九	二二五・一	一九七・四
三・一	二〇二一・一	三九〇・七	五一三・四	二〇〇・五	七三三・九	一九二・一	一九八・六
四・一	二〇二六・〇	三九五・六	四五九・一	三〇五・三	七六四・四	二四二・六	一五三・〇
五・一	一八七二・〇	二四一・六	三九〇・二	二四六・一	六三六・三	一一四・五	一二七・一
六・一	一九〇四・一	二七三・七	四一八・二	六〇一・〇	一〇一九・三	四九七・五	▲二二三・八

かくの如く、國立銀行が一九一五年五月中葉に到るまで、殆んど開戦第一年の全部を通して、何等かの自己の經費を賄ふためにも信用券を印刷してゐたことは、何の疑ひもない。その頃同行は、戦争遂行のためにも、經常費を賄ふためにも、大いに資金の缺乏を來してゐた國庫に對し、(いはゆる無證文國庫貸出として)、盛んに資金を貸出してゐたのである。これについては國立銀行における國庫の當座勘定の減少が何よりもよく證明してゐる。(單位百萬留)

年月日	一九一四年	一九一五年	
七月一日	四九一・一	一九一五年一月一日	二二九・七
八月一日	五一七・九	二月一日	二〇七・七
九月一日	二三〇・八	三月一日	二〇二・一
十月一日	二〇八・三	四月一日	二〇四・六
十一月一日	二一〇・六	五月一日	二〇九・一
十二月一日	二二一・二	六月一日	四九一・〇

一九一五年十一月以降の信用券の發行はこれとは全く違つた性質を持つてゐる。それは國庫の國內的の必要のために、(現實的及び名目的な)在外金準備を利用する一つの手段であつて、次表を見れば明白である。(單位百萬留)



年月日	信用券發行高	一九一四年七月一日に比し増	在外正金	一九一五年十月一日に比し増	信用券に對し金準備超過高
一九一五・一〇・一	二二四二・八	六一二・四	三七・四	—	—
一一・一	一七二一・五	九一・一	一三〇・二	九二・八	一・七
一一・一	一九一三・二	二八一・八	二二七・七	一九〇・三	九一・五
一九一六・一・一	二三四六・七	七一六・三	六四六・一	六〇八・七	(-) 一〇七・六
二・一	二二〇四・五	五七四・一	七五八・五	七二一・一	一四七・〇
三・一	二〇三三・九	四〇一・五	九四五・七	九〇八・三	五〇六・八
四・一	二三三三・七	七〇三・三	一一三七・三	一〇九九・九	三九六・六
五・一	二五六六・四	六三六・〇	一二二三・九	一一八六・五	二五〇・五
六・一	二七〇〇・二	一〇六九・八	一四九三・七	一四五六・三	三八六・五
七・一	二八〇四・六	一七四二・二	一六八三・〇	一六四五・六	四七一・四
八・一	三〇〇二・八	一三七二・四	一九六二・四	一九二五・〇	五五二・六
九・一	二七〇二・〇	一〇七一・六	二〇五四・九	二〇一七・五	九四五・九
一〇・一	二四四二・六	八一二・八	二〇五四・九	二〇一七・五	一一〇五・三
一一・一	一八八一・二	二五〇・八	二〇五五・一	二〇一七・七	一七六六・九
一二・一	二一九八・四	五六八・〇	二一四九・九	二一一二・五	一五四四・五

イギリスの金（前に引用して置いた一九一五年十月一日の協定を参照）によつて一九一六年七月一日までに殆んど十二億留の信用券が發行された。十一月廿三日現在ではこの發行額は十八億九千一百

五十萬留に達した。（註一）

（註一）「商工新聞」第二六九號

かやうに工業の所要に應ずるための信用券の發行は一時的性質（一九一五年二月まで）のもので、國家の經常費を賄ふための借入金も同様（一九一五年五月まで）であつた。開戦以來流通面に放出された信用券の金額は、戦争の用に充つるため發行されたものである。紙幣流通高が如何に増加したかは、次の統計から判断できる。一九一四年度及び一九一五年度の國立銀行營業報告による流通高は次の通りであつた。（單位百萬留）

	一九一四年一月四日	一九一四年七月一日	一九一五年一月一日	一九一五年七月一日	一九一六年一月一日
信用券	一六六四・七	一六三〇・四	二九四六・六	三七五五・六	五六一六・八
金貨	四九四・二	四六三・七	四五九・八	四五五・九	四四二・九
定位銀貨	一一二・七	一一九・九	一四一・二	一三八・二	一四五・四
小額銀貨	一〇三・一	(一〇二・九)	一一九・八	一三三・九	一六一・八
銅貨	一八・一	(一八・五)	一八・九	二〇・四	二一・九
計	二四〇二・七	二三三五・四	三六八六・三	四五〇四・〇	六三八八・八(註二)

（註二）このほか三千九百八十萬留の兌換切手と國庫證券が流通してゐた。

國立銀行の營業報告には七月一日現在の小額銀貨及び銅貨の流通高が示してないので、本表にあげ



た當該欄の數字は概數である。のみならず一月一日現在の數字も必ずしも正確とは云へない。要するに貨幣の流通高について正確な報告を得ることは極めて困難である。例へば金貨の流通高は、(一)流通面に放出する金貨の量、(二)外國から輸入した量、(三)流通面から回収した量及び(四)外國に搬出した量を差引して算定される。旅客がポケットに入れてロシアから外國に持ち出す小額の金貨は、むろん登録される譯はないので、國內金貨流通高から、かやうにして外國に持出した金の量を差引かねばならぬ。これと同様に、紛失、毀損、加工その他で流通しなくなった金貨の量も、貨幣流通高から引かねばならぬ。それ故、國內流通面にある貨幣の量に關するあらゆる統計は、大いに正確を缺いてゐるのである。(註一) それにも拘らず、これらの統計に基けば、貨幣流通上の變遷について大體の概念は掴めるのである。

(註一) 例へば一九一五年八月五日國會の豫算及び財政兩委員會の席上、大藏大臣は、わが國の金貨流通高は四億五千五百萬留ではなくて、僅か二億留にすぎないと述べてゐる。

開戦以來、金は流通面から姿を消した。次に一九一五年の秋以來、定位銀貨と小額銀貨及び銅貨が姿を消した。一九一六年度中に發行された兌換切手と國庫證券の金高については報告がないので、一九一六年七月一日の分として、一九一六年一月一日現在の數字を適用すると、貨幣の流通高は次のやうである。

一九一四年七月一日	二二三・五・四萬留	一〇〇・〇%
一九一五年一月一日	三二二・六・五	一三八・二
七月一日	四〇四・八・一	一七三・四
一九一六年一月一日	五六五・六・六	二四二・四
七月一日	六六六・八・一	二八五・七

この計算によると、開戦第一年度の前半期に貨幣流通高は三八・二%、同年後半期に七三・四%、第二年度前半期一四二・四%、同年後半期一八五・七%とそれぞれ増加してゐる。一九一六年十二月一日現在では、貨幣の流通量は次のやうな數字に達した。即ち信用券八十三億八千三百五十萬留、小額通貨三千九百八十萬留(?)、計八十四億二千三百三十萬留で、戦前より二六〇・七%の増加である。むろん戦争は國內市場の收容力と貨幣需要とを増大した。ことに第一次動員期には貨幣需要が旺盛であつた。次に信用の縮小、現金買の發達、物價の騰貴もまた貨幣の需要を増大した。しかし國民經濟の側からのこれらの要求が如何に大きかつたとしても、それは到底あの信用券の大増發に追隨できらるものではなかつた。

一九一五年一月、國內貨幣流通高が僅か四〇%の増大を示した時、會計検査院長ペー・アー・ハリトノフ氏は、一月廿八日の國會の席上次のやうに述べた。「信用券流通の増大は、戦時下における經濟循環の緩漫化から見ても、はたまたわが方の占領した他國領土における信用券の必要から見ても、



過大にして國內の貨幣需要に不相應とは認め得ない」。

八六

しかし開戦一年後に貨幣流通が七五%の増加を來した時、大藏大臣ペー・エル・バルクは國會の議場で（一九一五年八月十八日）、信用券發行の過大と、それが近き將來に過剰を來すべきことを認めたのである。「もし我々が、主として軍事費の支拂に充つるため、國立銀行の發行權の擴大をなすならば、即ちわが信用券流通を増大せしめるならば、大藏省は出来るだけ流通面から餘剰の信用券を回収して、貨幣流通のインフレーションを防止し、重大な結果を伴ふ留貨の價值喪失を防ぐべき任務を負ふのである。この點に關し余の云ふべき事は、嘗つてわが國內にあつた官營酒店といふ單純な流通貨幣回收方法は今や存在せず……且つ今後も存在しないであらうが、余としてはこの方法に代ふるに貯金局を以つてすることが出来るものと期待してゐる。それ故、大藏省の任務は貯金局網を出来るだけ擴大し、もつて貨幣を國立銀行の中央金庫に流入せしめ、もつて餘分の信用券を國民流通から回収することである」。

かくて大藏大臣は國內貨幣流通高が七五%の増大を來した段になつて、初めて信用券の過剰と留貨の價值喪失の危險を論じ出したのである。この演説があつて、開戦第二年度には信用券の流通高は、第一年度以上の急速度で増大を續けた。貨幣餘剰高をこれ以上増大せしめず、留貨の價值喪失をこれ以上進めないために大藏大臣の講じた對策が充分でなかつたことは明かだ。またこれらの對策ではこれ以上の成績は期待出来なかつたのだ。第一に、酒類專賣と貯金局を、國內餘剰貨幣防止策とするその見解が珍妙である。これでは官營酒類販賣さへ存續してゐたら、貨幣流通のインフレーションはあり得ない筈だといふことになる。云ふまでもなく酒類專賣はわが貨幣流通を信用券の過剰發行から守る能力は持たない。國營貯金局にもこの能力はない。預金者が貯金局へ持つて行く貨幣は、直ちに何等かの通路を経て國庫の支配下に入り、國庫によつて消費される。従つて貯金局の活動によつて貨幣流通の減少を期待する譯には行かない。各貯金局の活動強化の成績は歴然たるものがある。しかし貯金局の預金高は大増加を來したにも拘らず、國內の通貨高は、開戦第二年度には、第一年度以上に増大したのである。

大藏大臣はその後半歳を経て、貨幣流通高が一五〇%の増大を來した時、國會において再び國內信用券の過剰の問題を取上げた。バルク氏は一九一六年二月十六日國會の議席において、國立銀行の發行權を無制限に擴大し、その發行する信用券の保證として同行の割引した國庫債券を當てるといふ法案を提出して、次のやうに述べた。「信用券の發行増大は戦時下における必然惡であつて、あらゆる交戦國が軍事費の一部を賄はんがため紙幣資源利用を開始したのである。ロシアは茫大な面積を有し、手形流通が餘り發達して居らず、且つ小切手支拂の習慣がないため、信用券の國立銀行還流が大いに困難となつてゐる。そのため戦時下において、他の國家以上の紙幣發行の必要を來したのは至極當然

八七



である。但しそのために、右の戦争金融方法を使用するに當つて、あらゆる不利な結果を伴ふ市場に對する国立銀行券の過重負擔を避くるため、嚴重な警戒を加へる必要がなくなる譯ではない。ここでも國債は、流通水路への過剩兌換券の氾濫を防ぐ、貨幣市場健全化の一手段たるの役割を演ずるのである。國債は國家に對して所要の資金を齎らすと共に、經濟循環にとつて餘分の紙幣を流通面から回収する主要なる手段となるのである。

信用券發行上のこの「嚴重なる」警戒なるものがどんなものであるかは、その流通高の増加の示す通りである。

信用券發行高		貨幣流通増加率	
一九一四年七月至十二月	一三・一六・二	三・八・二	
一九一五年一乃至六月	八〇・九・二	三・五・二	
七乃至十二月	一八・六・二	六・九・〇	
一九一六年一乃至六月	一〇・一・五	四・三・三	
七乃至十二月	一七・五・二	七・五・二	

明かに、紙幣發行上の警戒、しかも嚴重なる警戒は、國會の議場における一場の言論に終つたのである。さて到来した貨幣流通路の氾濫防止策としては、國債とても貨幣市場を健全化することの出来ないことは疑ふべくもない。けだし國債によつて得た資金は、再び政府によつて支出されるからであ

る。しかしもしも國債によつて得た信用券が廢棄されるならば、話は別である。

國債および貯金局の現状を一方とし、流通面に放出された信用券の量を他方とする兩者の間の實際の關係は、貯金局への預金流入が盛んになつた結果が、國債の消化を容易ならしめつゝ、これら紙幣の製造に當る印刷機の使用を少なからしめるといふ點にあるにすぎない。いくら成功的に行つても、國債の意義はこれ位のものである。従つてこの關係は、バルク氏の設定せんと試みたそれとは全く違つた性質を持つものである。何となれば國債と貯金局の預金増加とは、既に流通面に放出された信用券を回収するものではなくて、その新規發行の必要を豫告するものだからである。

戦時下における巨額の紙幣發行は、それが國庫に對し、課税も國債も企て及ばない國民經濟よりの借金の新財源を興へるからである。

また實際、國債の購入申込はしなくともよいし、國庫證券は買はなくともよいし、租税の納入は逃げも出来ようが、自分の製品や商品に對する代價として、国立銀行がふんだんに發行する信用券の受領を拒む譯には行かないのだ。政府は信用券を流通せしめることによつて、住民の意志に拘はりなく、強制的に、その必要とする物的價値を國民經濟から引上げるのである。

政府がその國民經濟よりの借金において、遙かに國民蓄積資産の限度を超え、人民の消費資金に眞剣に手をつける必要を感じると、政府は信用券の發行に着手し、これを使つてその必要とする物を何



でも手に入れるのである。

金を使はずに支出を行ふあらゆる政府にとつて、紙幣の貴さは實にこの點にあるのである。

現戦争が主として信用券の發行によつて遂行されてゐる事實は、——戦争遂行のために最も極端な國內經濟力の緊張に訴へざるを得ない事情は、——この戦争が國民經濟にとつて極めて過重なことを證明するものである。

開戦以來、各銀行や貯金局の預金が巨額の増加を來たしたことは、一見右の結論と矛盾するやうに見える。國立銀行當座勘定中の各種個人及び官廳の預金高、各商業金融銀行の當座勘定の預金及び國營貯金局の金銭預金高は、最近次のやうに増加した。(單位百萬留)

年月日	國立銀行	私營各銀行	貯金局	計
一九一三・七・一	一八二・六	一七三三・四	一六一六・五	三五三二・五
一九一四・一・一	二〇七・四	一七八六・一	一六八五・四	三六七八・九
七・一	一八四・七	二〇一二・六	一七〇四・二	三九〇一・五
八・一	三〇九・六	一八一四・七	一六六三・一	三七八七・四
九・一	三二九・二	一九〇二・六	一六七三・二	三九〇五・〇
一〇・一	三一・一	一九四七・三	一六九九・〇	三九五七・四
一一・一	三六一・六	二〇二七・四	一七二〇・七	四一〇九・七
一二・一	三六九・二	二〇六八・三	一七四五・五	四一八三・〇

一九一五・一・一	一四一・二	二一六一・九	一八三四・七	四四三七・八
二・一	四六五・二	二二八六・三	一八九〇・九	四六四二・四
三・一	七〇四・〇	二三八六・〇	一九三五・四	五〇二五・四
四・一	六五六・八	二四七九・五	一九八一・四	五一一七・七
五・一	七二八・一	二六二三・三	二〇二九・二	五三八〇・六
六・一	六八五・七	二六三九・二	二〇八〇・〇	五四〇四・九
七・一	六五五・七	二七二三・七	二一三五・〇	五五一四・四
八・一	七二三・二	二八九二・八	二一九二・二	五八一二・三
九・一	七〇六・二	二九一〇・六	二二〇〇・六	五八一七・四
一〇・一	六七七・五	二九六八・七	二二五八・五	五九〇四・七
一一・一	七八八・九	三一二四・二	三三三六・〇	六二四九・一
一二・一	七八〇・九	三〇八八・〇	二三七八・二	六二四七・一
一九一六・一・一	九三五・七	三二九八・二	二四四八・六	六六八二・五
二・一	九八八・四	三四八四・三	二五六五・九	七〇三八・六
三・一	一一四三・七	三六九二・三	二六六八・三	七五〇四・三
四・一	一〇七五・四	三八六六・一	二七四九・九	七六九一・四
五・一	一〇二一・九	四〇〇二・四	二八〇三・八	七八二八・一
六・一	一〇八一・〇	四一二八・八	二八六九・五	八〇七九・三
七・一	一二九五・〇	四四六一・五	三〇四〇・六	八七九七・一



八・二	一二八五・七	四六七四・二	三一九五・四	九一五五・三
九・二	一三一八・六		三三三七・〇	
一〇・二	一四〇八・六		三四五九・一	
一一・二	一四七九・九		三五九七・八	
一二・二	一五七一・七		三六八六・四	

九二

これを半年毎に合計して見ると、預金の流入は次のやうになつてゐる。(單位百萬留)

	國立銀行	各私營銀行	貯金局	計
一九一三年一—六月	二四・八	五二・七	六八・九	一四六・四
一九一四年一—六月	▲二二・七	二二六・五	一八・八	二二二・六
七—十二月	二五六・五	一四九・三	一三〇・五	五三六・三
一九一五年一—六月	二一四・五	五六一・八	三〇〇・三	一〇七六・六
七—十二月	二八〇・〇	五七四・五	三一三・六	一一六八・一
一九一六年一—六月	三五九・三	一一六三・三	五九二・〇	二一四四・六

かやうに開戦以來數年間に、銀行及び貯金局の預金額は數倍に上る巨額の増加を來した。開戦直前の一年間にはこれら金融機關の預金高は概數三億七千萬留であつた。開戦第一年目には預金高は十六億留に達した。即ち四倍半の増加である。更に開戦第二年目には三十二億留を超え、九倍以上の増加となつた。

經濟生活が正常に進行してゐる場合ならば、預金の増加は國富の増大を、生産力の發展を證明するものである。普通は、當面の切實な要求を満してから預金をするものである。しかし一階級を貧窮に陥れることによつて他階級を富ますといふ資本主義社會の矛盾は、國民蓄積の増加が國民大衆の貧窮化と時を同じうして起り得る結果を來したのである。次に資本主義社會においては貯蓄は常に任意に行はれてゐた。市場爭奪戦は技術的改善を要求するが、これには金がかかる。産業循環の段階の變遷は、國民資本の自動的増大を來すのである。従つて、國民貯蓄の問題は經濟生活が正常に進行してゐる場合でも、一見したところよりはなかなか複雑である。いはんや戦時の情勢下においては、この問題は極めて複雑である。

この現象の説明は既に幾つか提唱されてゐる。大藏大臣バルク氏は、一九一五年七月十九日、國會の議場で、この現象と酒類販賣停止を結びつけやうとして見た。一九一五年一月一日から七月一日に到る貯金局への預金増加は、氏の計算によると、「毎月五千萬留以上に上つた。最近十年間におけるこの増加高は、一年五千萬留以下である。戦時下に納めた、かくの如き貯蓄増加は、國民の間に禁酒が勵行されてゐることの疑ひもなき結果である。(その通り——といふ者あり)。一九一五年の六ヶ月間にあける酒類収益損と、貯金局への預金増とを比較すれば、次のやうな數字になる。即ち一九一四年に比較した一九一五年度の酒類收入減は四億五百八十萬留で、貯金局の預金増加は三億八千二百七十萬



留である。もし貯蓄が現在通りの流入を續けるならば、この一年間を通じて、平年の四乃至六千萬留に對し、六乃至七億留の増加を來すであらう。

この思想は『ロシア經濟生活の若干面に及ぼしたる戰爭の影響について』といふ大藏省の出版物に一段とはつきり現はれてゐる。「酒類販賣禁止によつて民間に残つた巨額の資金は、國民を助けて徴集された豫備兵、現役兵及び新兵の出征をなさしめ、勞働力の減少による損失を埋め、日用品の物價騰貴に克ち、租税の増徴に堪へ、榮養を改善せしめればかりでなく、巨額の貨幣資金を貯へてこれを國營貯金局及び小額金融機關に注ぎこませたのである」。(註一)

(註一)「戰爭の影響について」四二〇頁

もちろん酒類販賣の中止は、國民大衆の經濟的福祉にとつて好結果を及ぼした。これについては後で詳しく述べることにして、茲ではここに引用した國民禁酒と預金増加の因果關係のみを調べよう。預金業務の増大に影響するのは酒類販賣の禁止だけであつて、他の原因——例へば應召豫備兵家族への手當支給——はないといふ理由は何であらうか。大藏大臣は酒類販賣中止以來の國民蓄貯の數字と、貯金局への預金増加の數字とが殆んど完全に合致することによつて、この因果關係の論據としようとしてゐる。では氏の擧げた數字を検討して見よう。

酒精飲料の消費がどれだけ減少したかは、一九一三年度の實收入高と、一九一五年前半期の收入に

基いて算出された一九一六年度の豫算額とを對照すれば判る。(單位百萬留)

官營火酒販賣	一九一三年度	一九一六年度豫算
麥酒間接税	八八六・九	三六・〇
	二二・六	一・一

一九一三年度には、麥芽ブードにつき一留七〇哥の割で間接税を徴收した。現在ではこの間接税はブード當り六乃至九留、平均七留五〇哥に、即ち四倍半に上つた。もしも間接税が昔のまゝの率になつてゐたら、一九一六年度豫算には僅か二十五萬留と計上されたであらう。一九一三年中にロシアでは九千四百四十萬ヴェドロの麥酒が消費された。一瓶の小賣値段一〇哥とすれば、總額一億八千八百七十萬留である。従つて一九一六年度豫算によれば、同年度には僅か百萬ヴェドロ餘、僅々二千一百万留を消費する豫定になつてゐる。かくてわが國は火酒について八億五千九百萬留、麥酒について一億八千六百萬留、合計十億三千七百五十萬留を節約したこととなる。大藏大臣は半年間の酒類販賣收益減四億五百八十萬留だけを考へて、國民の麥酒節約を無視してゐるのである。火酒費の節約だけが貯金局の預金増加を來し、麥酒の節約はさうした能力を持たないと云ふ理由はあるまい。次に預金高三億八千七百二十萬留といふ數字であるが、これは次の二つの數値の合計である。

貨幣預金

三〇〇・三百萬留



利附證券の預入は、火酒販賣停止とどう云ふ關係があるか？ 何等の關係もないのだ。明かにこの關係は貨幣預金についてのみ有り得ることである。さう考へると、一九一五年度の酒精飲料販賣による節約高は十億三千七百五十萬留、貯金局への貨幣預金増加高は六億一千二百三十萬留となる。大藏大臣が國會で擧げた二つの數字が殆んど完全に一致してゐたのは、麥酒販賣による住民の節約高を無視し、利附證券の預入高を加算するといふ、全く人爲的な計算法で割出したものである。

國會では預金増加について、この他にも證明が行はれた。ヴィスチャーク議員（ロシア國家主義派）は、國會議員のうちで、「今や農民は懷具合がよくて、その貯蓄を酒類專賣に注ぎこまないで、貯金局へ入れてゐる」と斷定する連中を反駁した。「それは一再ならず新聞雜誌にも現はれた意見だが、この諸君は恐るべき思慮ひをしてゐるのである。余は信ぜべき筋より得た事實をもつてこれを説明したいと思ふ。これは余が親しく現地を見たことであるが、豫備兵や現役兵や新兵の動員がある度に、市場では牛馬農具などあらゆる財産が飛んで行くのである。それは農民にとつては必需品で、それがなくては農民はやつて行けないのだが、それを預けて世話をして貰ふ人がないので、やむを得ず賣つて行くのである……従つて貯金局の預金高激増は、——それ自身農民財産を賣拂つて得たもので、——農民の収益ではないのである」。(註一)

(註一) 一九一五年八月十三日の議事、議事録、六七四頁

これと同じ意見は、それから半年後にヴェルシーニン議員（勤勞派）が國會で次のやうに展開した。「大藏大臣は國營貯金局の預金増加を指摘して、これは農村が金持になつた結果だと云はれた。だが諸君、これは農村が本當に金持になつたのであらうか？ これは大藏省が至つて気軽に發行してゐる紙幣のだぶつきに他ならないのであつて、農村は産物の物價高に目がくらんで、この紙幣と引換にあらゆる必需品を賣るのみならず、農業經營の基礎をも破壊して、家畜を初め何んでも賣れる限りの物を賣拂つてゐるのである。かくて手に入れた遊資を農村が貯金局へ持つて行くのは當然である」。(註二)

(註二) 議事録、一九一六年二月十九日、一九四七頁

最も大規模な動員が行はれたのは一九一四年の七月であるから、もしヴィスチャーク議員の説明が本當なら、最も預金の増加したのは一九一四年七月または大體として一九一四年後半期となる筈である。ところが數字は全然正反對になつてゐる。一九一四年七月中には預金は増加しないのみか、却つて一億九千七百九十萬留の減少を來し、一九一四年七月乃至十二月中には預金は僅か一億三千五十萬留の増加しか示してゐない。然るに最近の半年間の増加額は五億九千二百萬留に達してゐるのである。預金が絶えず増加してゐることは、ヴェルシーニン議員の説明にも反してゐる。農民經營は限り



なく賣拂つて行けるほど豊かには出来てゐない。だからもしこの賣盡しが原因であつたら、預金額は夙の昔に増勢を停めてゐたであらう。

以上引用した二つの説明——大藏大臣と兩國會議員の説明——は、貯金局の預金増加の問題だけに限られてゐた。しかし云ふまでもなく、この問題は銀行その他の金融機關への預金増加の原因問題と別個に切離す譯には行かない。こんなに勝手に問題を切り詰めたところは、右に引用した説明の本質的缺陷の一つである。

「<sup>ウエストミンスター・タイムズ</sup>財 政 時 報」(一九一六年第十七號)に載つたこの説明の一試案は、さうした缺陷を持つてゐない。本文の筆者は國立銀行、各種私營金融機關及び國營貯金局の預金増加の數字を擧げて、次のやうに述べてゐる。「この期間に増加した預金額(二十四億一千三百萬留)と信用券流通高(二十七億六千五百萬留)との比を計算すると、預金増加率は信用券流通高の増加率の殆んど九割(八七・二%)に當つてゐる。明かに、わが支拂計算機構は不完全ではあるが、紙幣資本蓄積に關する各信用機關の活動は、世間で決めこんでゐたほど悪くはないのだ」。(註一)

(註一)「財政時報」、一九一六年第十七號一七八頁

この預金増加理由の説明には、信用券の發行と預金額との間にあるべき關聯の本質が明白ではない。もし信用券が銀行の金庫に入つて、そのまま寝るならば、その間の關聯は自明のことである。と

ころが信用券は直ちに流通面に投げこまれるので、預金業務に關する銀行や貯金局の活動は、信用券を印刷する内閣印刷局の活動と何等の對立をも來さないのである。さて信用券の發行と預金高との實際の關係はどうかといふに、私營金融機關のうち株式組織の商業金融銀行のみを取ると、(それ以外の金融機關は營業月報を出さず、また年報は非常に遅れる)、次のやうな比になる。(單位百萬留)

信用券發行高	預 金 高	百 分 比
一九一三年七月—十二月	一九五・五	一四六・四
一九一四年一月—六月	三四・三	二二二・六
七月—十二月	一三一・六	五三六・三
一九一五年一月—六月	八〇九・〇	一〇七六・六
七月—十二月	一八六一・二	一一六八・一
一九一六年一月—六月	一〇一一・五	二二一四・六

この二つの欄の間に何等かの依存關係を求めやうとしても無駄なことは明白だ。

最後に、一九一六年度國家歳入歳出豫算案にも、戦時下における壓倒的預金増加に關する説明がある。開戦以來「短期間の預金流出に次いで、國民預金の貯金局流入が前例なくかつ漸増歩調で行はれてゐる。従つて、戦争の如き國家の經濟生活に一見不利な現象が、しかも穀類收穫期と重つて到來したにも拘らず、國營貯金局の現状には何等の消極的影響なきのみか、却つてその業績の未曾有の發達



を齎したのである……その後戦争の進展に伴ひ、次の二つの事情が貨幣市場において多大の重要性を帯びるに到つた。即ち軍隊の装備及び補給に對す國庫の大支出（これは最初は主として信用券の發行によつて行はれた）と、酒精飲料の販賣停止がそれである。この二つの事情は貨幣市場における遊資の大きなだぶつきを來し、大いに國民貯蓄の増加を促進した。そのためあらゆる金融機關において預金の増加を認めるに到つた……上述の如き貨幣市場の現状は、利附證券の消化に關する金融市場の收容力を著増し、わが國債の賣出にとつて有利な條件を作つた。僅か一ヶ年間にこの種の國債を總額二十億留も消化したことは、わが財政史上前例なき事であつて、國內經濟力の増大といふ觀點から極めて注目すべき事と認めねばならぬ」。(註一)

(註一) 一九一六年度豫算案、第二編、一一二―一三、一二六、一二七頁

一九一六年二月四日の國立銀行發行權擴張案に關する大藏大臣の説明にも、これと同様の意見がある。「貯金局預金増加の數字は、戦争にも拘らず、貨幣資本の蓄積とわが國內市場の收容力が急激に増大してゐることを示すものである」。

戦時下の數年間に於ける國內經濟力の増大の問題、即ち生産力の發展と國民貯蓄の増加の問題については、あとで詳しく検討する。茲では開戦以來二年間に、わが國內生産力は増大しなかつたのみか、僅かながら低下したといふ、争ひ難き結論だけが重要である。

だが大藏大臣のこの言明が全く誤つてゐて、官製樂觀論の明白な見本だとしたら、——ロシアの大藏大臣は常に國內生産力の異常なる増大を信じてゐる義務がある、——結局のところロシア貨幣市場の收容力のこの巨大なる増大は一體何によつて説明されるであらうか？ この市場は何よりも先づ機械・建物・備品（いはゆる復興資金）の修繕費の節約によつて擴大した。戦時下においては修繕は全く中止された。しかしこの財源は、精々年額四乃至六億留しか與へない。では戦争に注ぎこんだ數十億の金はどこから持つて來たのか？ その回答は、前に述べて置いた、國民の意志に拘はらず、政府の必要とする物的價値を取上げる信用券の能力に關する説明を見れば、自然と判る。戦時下の數年間に巨額の増加を來したわが國內貨幣市場の收容力は、この紙幣の魔術的能力によつて作られたものであつて、國民消費の餘儀なき縮減の結果である。

國民は、國庫の買上げる製品や食料品の支拂ひに當つて、紙幣の收受を拒むことは出來ない。それ故、政府は紙幣を使へば、租税や國債を使ふよりも、遙かに多くの物的價値を民間から取上げることが出来るのである。開戦以來民間からどれだけのものを取上げたかは、次の初歩的な計算の示す通りである。上の欄には蓋然的國民所得額を擧げて置いた。但し一九一四―六年度の分は、敵軍がロシア領土の一部を占領した結果起つた國民所得の減少のみしか差引かなかつた。開戦第一年度には、人口六百四十萬を有するポーランド王國の西部五州が占領され、第二年度には人口約二千一百七十萬人を



有する十五乃至十六州が占領された。そのためばかりでも開戦第一年度には國民所得は三・七%、第二年度には一二・四%の減少となつた。次の欄には國內貨幣市場からの借入高を示して置いた。これは『貯蓄』とも云ひ難いもので、戦前までは各種有價證券の發行によつて行つたものであるが、開戦以來は内國債、國庫證券及び短期債券、並びに信用券の發行といふ方式で行はれた。云ふまでもなく、國民經濟の立場から見れば、借入の方式は國債であらうと、留紙幣であらうと、全く何の變りもない。重要なのはたゞ、あらゆる方法で國民經濟から吸収した物的價値の額の總和にすぎない。そこで次のやうな數字が出る。(單位百萬留)

戦前	國民所得		國內市場借入	
	金額	百分比	金額	百分比
一九一四—一五年	一一、八〇〇	一、〇〇〇	五、〇〇〇	四〇・六
一九一五—一六年	一一、二〇〇	八、六〇〇	七五・九	

かやうに戦前には國民所得の七・七%が蓄積資金になり、九二・三%が消費資金となつてゐたのが、戦時下においては前者は巨額の増加を來し、後者は極度に著減した。一見すれば政府としては信用券の發行による國民經濟よりの資金吸収には何等の限界もないかに見える。紙幣の新規發行は、銀行及び貯金局への預金の流入を強め、従つて國債の消化を促進する。幾十億の信用留貨を支出すれば、國

内から數十億の新規流入があると云つた風に、際限もないかに見える。だが紙幣の魔力にも際限はあつた。いくら紙幣を發行しても、國內から國民所得の年額以上のものを取上げ得ないことは、明白であり、何等の證明にも値しない。しかしこの限界には達する譯には行かない。けだしこの限界に近づいたら、國民は寒饑に迫られて死んで終ふであらう。國民所得からのこの強制的借入の實際的限界は、それよりすつと手近なところにあるのであらう。

國民所得のうち蓄積資金に入る分以上にのぼる借入は、必ず必然に市場の均衡を破壊し、物價の騰貴を來す。次に戦争費、軍備、彈藥、軍隊用の衣服及び食料費、ならびに幾億にのぼる應召兵家族手当などが、わが商品市場の現狀に明白に反映さるべきであつたかを検討しよう。ロシアの農村は自然經濟的な機構になつてゐるので、市場に出るのは決して國民生産の總額ではない。國內で生産される物的價値の總額のうち二五乃至三〇%は自家用として消費されるものと思はねばならぬ。これを假りに二七・五%とすると、市場に出廻はるのは國內生産の約七二・五%となる。次に需要の方は、戦前までは供給と同額であつた。開戦第一年度には需要は五十億留の増加を來し、通常の有價證券發行で十億留の減少を來し、差引四十億留の増加となつた。第二年度には、右と同様の計算で、七十五億留の増加となつた。需要と供給の比率は、(わが國が世界市場から隔離してゐるため)、供給が需要に應ずるに必要なだけの物價騰貴を示すのである。この物價に修正を加へれば、現實に幾何の物的價値が國



民經濟から取上られて、戦争に費されたかが判る。即ち次表の通りである。(單位百萬留)

戰前	國民所得	市場出廻	國內需要	物價騰貴	國內市場上の吸收した物的價值
一九一四一五年	一二、八〇〇	九、三八〇	九、三八〇	一〇〇	一、〇〇〇
一九一五一六年	一一、二〇〇	八、一二〇	一五、六二〇	一九二	八、五〇〇

開戦第二年度における國內市場の信用業務の増大は、開戦第一年度に比し實に二八%といふ破局的物價昂騰のため、政府に對して物的價值を七〇%しか與へなかつた。明白に、今後戦争に必要に應じて與へる國內物的價值の總額の増加は、より以上の戦費支出の合理性を疑はしめるほどの物價昂騰と國債によつて購はれるのであらう。この點に紙幣の魔術にも限界があるのである。

ロシアの國民經濟はその國民所得の四〇乃至五〇%以上を戦争のために支出することは出来ないらしい。

以上われわれの計算は全部、疑ひもなく略圖的性質を帯びてゐて、われわれはわが國內市場の需要供給に影響する他の要素は一つも考慮に入れなかつた。にも拘はらず、この計算は甚だ明白である。

この計算は第一に、現在の商品不足と物價騰貴の根本的原因が戦争の必要に向ける尨大な需要であることを示してゐる。戦争のためには、蓄積資金形態で國內に保有されてゐたよりも、遙かに多くの

資金が必要ながつた。これまで馴染んでゐた普通の外國貿易路が杜絶しては、この製品不足は海外よりの輸入によつて満たす譯には行かない。従つて戦争の必要に充つるため、國內の消費資金に手をつけ、國民の消費を切りつめて行かざるを得なかつたのである。需要の増加はあらゆる商品の異常な騰貴を來した。むろん色々な商品については、その商品の需給關係如何によつて、物價の上り方も一樣ではなかつた。ことに物價の上り方のひどかつた商品は、軍隊によつて大量に消費されるもの、ならびに生活必需品で民間においてその消費を縮減できず、また縮減を欲しないものであつた。(註一)

(註一) 全露都市同盟經濟部の統計によると、開戦以來實際の物價騰貴は次の指數の示す通りである。(一九一三—一四年度の物價を一〇〇とす)

	一九一五年五月	一九一五年十二月	一九一六年六月
生活必需品(十種)	一五五	一九九	二四二
原料及半製品(八種)	一二八	一五四	一七八
製品(僅か一種)	一五四	一六〇	二一三

同經濟部の發行したパンフレット「開戦二ヶ年間に於ける物價の動き」一九一六年、四—五頁参照。

戦争の必要に充つるこの需要増の結果起つた國民消費資金の縮小については、次表の示す通りである。(單位百萬留)



戦前	國民所得	自家消費	貨幣民需	値上り	貨幣消費實額	民需總額
一九一四―十五年	一二、八〇〇	三、四二〇	八、三八〇	一〇〇	八、三八〇	一一、八〇〇
一九一五―十六年	一二、三二五	三、三八九	七、九三六	一四五	五、四七三	八、八六二
一九一五―十六年	一一、二〇〇	三、〇八〇	七、一二〇	一九二	三、七〇〇	六、七八〇

かやうに軍需増の影響をうけて、民需は開戦第一年度に約二〇%、第二年度に約四〇%の減少を來した。わが經濟の半自然的性格があつたばかりに、民間はその消費資金をこれ以上戰爭に注ぎこまなかつたのである。

一八五三―五六年及び一八七七―七八年の兩戰爭の國民經濟に對する影響を研究したヴェー・ペー・ベゾブラーゾフ氏は、戰時下における物價騰貴の諸原因について、次のやうに述べてゐる。「わが國民の間には、戰爭は必ず物價騰貴を來すものだといふ信念が根を下してゐる。この國民的信念は、わが國では紙幣の發行を伴はない戰爭が一度もなかつたので、極めて當然である」。(註一)

(註一)「ロシアの國民經濟」第一編、一八八二年、三〇五頁

紙幣の發行が貨幣單位の價値を低下して、物價騰貴を來すことは疑ふべくもない。しかしもつと大きな意義を持つものは、國民經濟からその大部分を戰爭のために吸収することである。この方の影響は、しばらくの間なら、第一の影響を絶滅することもある。軍事上の必要に向ける需要のため暴騰し

た大量の商品が循環するためには、それに相當する大量の紙幣が必要である。従つて新規發行の信用券の大部分は、物價昂騰のため、商品流通の経路に縛られることとなる。この限界内においては、紙幣の發行が物價騰貴を起すのではなくて、物價の暴騰が紙幣の發行を要求するのである。この程度以上の發券になつてはじめて、國內市場における貨幣單位の價値低落に影響を及ぼすのである。次に開戦第一年末及び第二年末における、わが國の物價騰貴と紙幣發行との實際の關係がどうなつてゐたかを検討しよう。

戦前	物價騰貴	通貨量(百萬留)	同上百分比
第一年末	一〇〇	二、三三五・四	一〇〇
第二年末	一九二	四、〇四八・一	一七三
第一年末	一四五	六、六六八・一	二八六

掛賣の廢止は、どう見ても、十億留、即ち戦前の通貨高の約四〇%以上の貨幣の需要増加を來す筈はない。開戦以來一九一五年一月一日までに流通信用券の量は十三億一千六百二十萬留の増加を來した。開戦以來流通面から姿を消した金貨は、戦前にはある計算では四億六千三百萬留、また別の計算では僅か二億留が民間の手持高であつた。従つて、この間に貨幣市場の收容力は約十億留の増大を來した。かやうに開戦第一年末には、明かに、過剰通貨はなかつたのである。これに反して第二年末に



は、流通面には疑ひもなく紙幣が氾濫してゐたのである。明かにインフレーションの端初は、僅か一ヶ月間に六億八千二百四十萬留の信用券を流通面に放出した一九一五年九月に當つてゐる。またその頃には、國內生産高の減少も歴然たる影響を及ぼし始めたのである。

戦争終了後に軍の必要に充つる需要が消滅すれば、高物價によつて保たれてゐた需要供給の平衡が破れ、物價は急落をつけるに違ひない。しかし大量の通貨はこの低落を妨げるであらう。さうなれば紙幣發行額が物價に對して決定權を持つこととなるであらう。

更にわれわれの擧げた要圖的計算は、現在進行中の各銀行の當座勘定の膨脹と貯金局の預金の著増とは、如何なる意味においても、バルク氏の斷言するが如き、國內生産力増大の證據となるものではない。これは國會においてエム・イー・スコベレフ氏の使つた表現によれば、病的な水腫れであつて、巨億の軍事費を支出し、民需を縮小し、且つ國債券から信用券に到るあらゆる政府の借金證文で財布や、金箱や金庫が一杯になつたために出來たものである。戦費が停止され、國民の生活水準が昔の水準に高まる時、貯金局や銀行への預金増も停まり、かくて初めてわが國民經濟の蒙つた戦争の創痍も治り始めるであらう。

現歐洲戦争はわが資力を遙かに超ゆることが判つて來た。われわれの手許にある蓄積資金は、戦費の一〇%以下しか賄つてゐない。わが國は從來の諸戦争の時と同様に、大いに國民の消費資金に手を

つけ、國民生活水準の低下を犠牲として戦争を遂行せざるを得ないこととなつた。それ故、開戦劈頭から國家信用券の兌換を停止し、國立銀行の紙幣發行權の擴張を行はざるを得なかつたのである。

現代の戦争は經濟的觀點から見れば、最大の資本主義的企業である。わが國は貧乏國であるから、資本よりもむしろ人命をもつてこれに參戰してゐる。(註一) むしろわが國は同盟諸國から財政的援助を求めてをり、同様に同盟各國はわが軍の人力の援助を求めてゐる。この要求は相互的なものである。だがわれわれは同盟諸國から借款ではなくて補助金を仰ぎたいといふ希望を國會の議場で表明するのは、右翼の指導者マルコフ二世にして初めて出來ることであつた。

(註一) この點についてはロンドンの「エコノミスト」誌の計算が甚だ明瞭である。その計算によると開戦二ヶ年間に於ける人命及び貨幣による戦費は次の如し、

	戦病死及び労働能力喪失	戦費(單位百萬磅)
イギリス	二三五、〇〇〇	二、〇二五
フランス	五一五、〇〇〇	一、七五五
ロシア	九八〇、〇〇〇	一、二〇〇

「財政時報」一九一六年第一號、一二頁所載、「戦争は歐洲諸國にとり幾らに當るか」といふ論文を参照。

これらあらゆる信用操作の結果、わが國債額は戦時中にまさに双曲線的増大を來した。公式の豫算數字によると、その動きは次のやうになつてゐる。



一九一四年七月一日.....	八、七六四・六百萬留
一九一五年一月一日.....	一〇、四八八・五
一九一六年一月一日.....	一八、八七六・七
一九一七年一月一日(豫想).....	三一、〇〇〇・〇以上(註二)
(註一)「一九一七年度歳入歳出國家豫算の編成について」『財政時報』一九一六年第二五―二六號、五四―一頁	

國債支拂としては近年次のやうな額が豫算に計上してある。

一九一四年度.....	四〇二・一(百萬留)
一九一五年度.....	四三九・七
一九一六年度.....	六九〇・三
一九一七年度.....	七二〇・八

一九一七年度豫算編成に關する大藏大臣と會計検査院長との覺書には、一九一六年度の支拂額の中に國庫短期債券利子二億八千萬留が入つてをらず、また一九一六年度中に既に行はれまたは今後行はるべき信用操作に關する支出が入つてゐない。この覺書には、一九一七年度の國債關係支拂は十五億留に達するであらうと豫測してある。

國債に關する毎年の支拂額は如何にも巨額に達してゐるが、それでもこれは戦後に控へたわが國の支拂額を減ずるものである。戦争はまだ一ケ年は續くものと思はねばならぬ。この戦費を賄ふために

わが國は一九一六年七月一日までに次のやうな信用操作を行つた。(單位百萬留)

信用券發行高	元 金	利 子
五分利國庫債券(註一)	四、九九七・九	一三三・八
四分利國庫證券	二、六七六・三	三四・〇
五分利内國債	八五〇・〇	五〇・〇
五分半利内國債	一、〇〇〇・〇	二二〇・〇
五分利外國債	四、〇〇〇・〇	八七・八
六分利外國債	一、七五六・九	五〇・四
計	八三九・五	五七六・〇
(註一) 國立銀行以外にて割引した短期債券額	一六、一二〇・六	

大藏大臣の豫想によると、開戦第三年目には歳出は百四十億留を下らない。この歳出は次のやうな信用操作によつて賄はれるものと思はねばならぬ。(單位百萬留)

信用券の發行高	元 金	利 子
自由市場の短期債券割引	四、〇〇〇	一〇〇
内 國 債	二、〇〇〇	三〇二・五
外 國 債	五、五〇〇	一五〇
計	二、五〇〇	



この計算によると國債關係支拂高は一九一七年六月末日で次のやうになる。

計	一四、〇〇〇	一一二	五二五・五
戦前に締結された國債支拂	.....	四〇二・一	百萬圓
開戦第一、二年度國債利子支拂	.....	五七六・〇	
開戦第三年度國債利子支拂	.....	五五二・五	
戦時國債償却〇・四%	.....	九〇・九	
計	.....	一、六二一・五	

従つて戦争終了までには次のやうになるであらう。

信用券流通高	.....	一〇、六三〇	百萬圓
國債	.....	三〇、五〇〇	
國債關係支拂	.....	一、六二〇	

一百六億といふ巨額の信用券流通高は、留相場の激落を來す危険がある。もしもそのうちの二十五億留だけを流通面にとどめて、八十億を回収したならば、わが國債は三百八十五億留となり、國債關係支拂高は毎年二十億留を超えるであらう。

### 第三章 戦時の外國貿易と留相場の低落

一九一四年七月十九日對獨戦争、同七月廿四日對奧戦争の開戦から生じた最初の、直接的經濟的影響とも云ふべきものは、獨逸國境並びにバルチック海南部經由の商品の輸出入が停止したことである。一九一四年十月廿日「ゲベン」及び「ブレスラウ」兩艦のわが無防備黑海諸港砲撃によつて開始された對トルコ戦争は、トルコ及びダーダネルス海峽經由のわが貿易を杜絶せしめた。但しダーダネルス海峽經由の貿易路は、軍事行動の開始される以前から極めて窮屈になつてゐて、永いこと閉鎖されてゐた。最後に一九一五年十月五日ブルガリヤがわが敵國の陣營に参加したことも、ブルガリヤ及びセルビアとのわが貿易を杜絶せしめた。軍事行動の失敗のため、これらの經路は今日もわが外國貿易のために閉ざされてゐる。

開戦後も開かれてゐたわが歐洲國境と云つたら僅かにアルハンゲルスク、ポトニツチェスキ灣及びスウェーデン、ルーマニヤ並びに——一九一五年十月までの——ブルガリヤ經由の經路にすぎなかつた。平時にはわが外國貿易はこれらの路線を最も狭い範圍にしか利用してゐなかつた。大量の商品の輸出入をなすには、これらの經路は全然不適當であつた。即ち一九一三年度にはヨーロッパ國境



(コーカサスの黒海沿岸及びわが對フィンランド貿易を含めて)よりの輸出總額十四億二千九十万留、同輸入總額十二億二千五十萬留のうち、上記各通商路經由の商品交換高は次のやうであつた。(單位百萬留)

	輸出	輸入
白海經由	三六・四	五・七
對スウェーデン貿易	一一・四	一六・九
對ノールウエイ	六・七	九・八
對ルーマニヤ	二一・七	一・四
對アルガリヤ	二・三	〇・〇
對セルビヤ	〇・五	〇・〇
計	七九・〇	三三・八

即ち輸出總額(ヨーロッパ國境經由)の五・六%、輸入總額の二・八%にすぎなかつた。この數字は、それ自身微細なものであるが、それにも拘はらず誇大になつてゐる。といふのは對ノールウエイ貿易の一部は白海經由で行はれてゐるので、二重に計算されてをり、また對ノールウエイ貿易の他の半分と對スウェーデン貿易は戰時下において通商航海の不可能なバルチック海の水面を經由するからである。従つてヨーロッパ國境經由のわが外國貿易が極度に減少したのは當然である。更に殘されて

ゐた外國貿易路の大商品交換への適應化についても、われわれは非常な立おくれを喫したのである。

即ちヴォログダ—アルハンゲルスクの狹軌鐵道を廣軌に替へる命令は、一九一五年三月になつてやつと發せられた。ヴォログダ—ニヤンドマ間の廣軌運轉は一九一五年十月廿三日に開始され、ニヤンドマ—アルハンゲルスク間は一九一六年一月十五日に開始された。ア・イ・シンガレフ氏が國會において指摘したやうに、「わが爲政當局は他の多くの點を看過してゐたのであるから、北部諸鐵道の設備を戰前に豫見しなかつたといふことはむろん有りそうなことである。しかし開戦とともに、北部の諸鐵道の設備を整へるため、精力的方策を講ずることは出來たらうと思はれる。アルハンゲルスク鐵道では、誤つた想像のため工事が極めて緩漫に行はれてゐるが、これについては大いに問責に値ひする。北部鐵道をムルマンスク開港に即應せしめる工事も極めて緩漫に行はれてゐる。これに關して、余の知るところでは、ムルマンスク鐵道を自費で建設するとイギリスの某會社の提議した時、大藏大臣も大いにその案を支持されたにも拘はらず、交通大臣の故障によつて遂に實現を見なかつたのである」。(註一)

(註一) 議事録、一九一五年八月十八日、九〇—一一二頁

次にアルハンゲルスク狹軌鐵道も個人商業のためには殆んど使用できなかつた。といふのはアルハンゲルスク及びその途中各驛の運轉は軍の支配下にあり、個人の輸出貿易の必要など全く顧みなかつ



たからである。その結果、大部分の車輛が空車でアルハンゲルスク鐵道を往復してゐたのである。

(註一) 前掲議事録、九四九頁

その結果、アルハンゲルスク—ヴォログダ間(距離六〇〇露里)には、鐵道と平行して荷馬車輸送が開始された。若干の貨物はアルハンゲルスクからベトログラードまで(距離約一二〇〇露里)も、荷馬車で輸送された。しかし多くの外國品はウラヂヴォストク經由で受取らねばならなくなつたので、シベリヤから移入する穀類やバターを充分に使用できなくなつた。

わが外國貿易の主要路線が閉鎖され、且つ第二次的各路線の設備不十分で不適當であつたことが、わが輸出入にどんな影響を及ぼしたかは次の數字を見ればよく判る。戦前の平均に比し、一九一四—一六年のヨーロッパ國境經由のわが輸入額は次のやうになつてゐる。(單位百萬留)

月	一九一四—一五年			一九一五—一六年			一九一六—一七年		
	實	額對一九一三年百分比	實	額對一九一三年百分比	實	額對一九一三年百分比			
七月	一一一・八	七二・七	六五・〇	六二・九	五三・三	一一二・〇			
八月	一〇六・五	三二・一	二九・二	六九・一	六四・九	一七三・四			
九月	一五九・五	一〇・六	六・六	四二・六	二六・七	五五・五			
十月	一四四・三	一五・五	一〇・七	五三・二	三六・九	六六・三			
全年	一、五三四・六	二八二・八	一八・三	三八八・五	二五・三	—			

月	一九一五年	一九一六年	一九一七年
十一月	一三五・四	一五・九	一一・七
十二月	一三五・一	一一・一	八・二
一月	一〇〇・七	九・六	九・五
二月	九二・三	一一・〇	一一・九
三月	一〇六・〇	一〇・五	九・九
四月	一〇四・六	一一・五	一一・〇
五月	一三九・八	二二・四	一六・四
六月	一三四・三	二八・二	二一・〇
全年	一、五三四・六	二八二・八	一八・三

(註一) 税關の概算による「商工新聞」一九一六年第二五五號  
(註二) 一九一五年年初十ヶ月間に輸入された九百六十萬留の商品は月別に分けてないが、これは各月平均に輸入されたとすれば、年初六ヶ月間の輸入高五百八十萬留、他の四ヶ月三百八十萬留となる。

かやうに開戦直後の十一ヶ月間(七月を除く)には、わが國の輸入高は三億四千三百四十萬留、即ち開戦直前の輸入年額の二七・四%まで低下した。開戦第二年度には輸入額は一九一三—一四年度の七〇・一%まで、即ち開戦第一年度の二倍半に増加した。この數字は必ずしも正確とは云へない。けだしわが國の統計に輸入品を登記するのは、それが外國から入つて來た場合ではなくて、税關倉庫から出荷する場合である。従つて開戦第一年度の輸入統計に戦前の輸入品が入ることもあれば、第二年度



の輸入に第一年度の輸入も入つてゐるに違ひない。一九一四年度及び一九一五年度の十二月中に輸入額が高數字を示してゐるのは、擬制的性質のもので、税關倉庫から商品の持出が盛んに行はれたことを證明するにすぎない。

明かに新しい國際商品交換路は、その負はされた諸任務を解決することに、次第に適應して行つてゐるやうである。しかしこの適應の程度は、前掲の數字では誇張されてゐる。

商品種別に見ると、ヨーロッパ國境經由のわが輸入高は、戦時下に次のやうに變つてゐる。(單位百萬留)

	生活必需品	原料、半製品	動物	工業製品	計
一九一三—一四年	一七五・一	七〇〇・三	二・八	四八八・六	一、三六六・八
一九一四年七月—十二月	三六・九	一一二・一	一・一	七八・八	二二九・〇
一九一五年一月—六月	三三・一	七八・六	〇・七	七五・七	一八七・〇
◇ 七月—十二月	四三・五	二一八・七	〇・二	二二四・七	四八七・一
一九一六年一月—六月	四九・三	一六四・六	〇・二	二五六・六	四七〇・六
◇ 七月—九月	四〇・〇	一八四・一	〇・一	二二一・三	四四五・五

この表は充分明白だとは云へない。だから一九一四—一六年間の輸入高を、開戦前年度の輸入高の百分比で現はして見よう。但し計算の基礎は全一年間ではなくして、半年分の輸入をとつた。

	生活必需品	原料、半製品	動物	工業製品	計
一九一四年七月—十二月	四二・二	三三・〇	七八・六	三三・二	三三三・六
一九一五年一月—六月	三六・六	二二・四	五〇・〇	三一・〇	二七・四
◇ 七月—十二月	四九・六	六二・四	一四・三	九二・〇	七一・二
一九一六年一月—六月	五六・三	四七・〇	一四・三	一〇五・〇	六八・九
◇ 七月—九月	九一・四	一〇五・二	一四・三	一八一・二	一三〇・四

外國からの動物輸入は、わが國民經濟にとつて本質的な意義は持たない。他の輸入品種については、第一に目に立つのは工業製品の異常な輸入増で、これは價格から云へば一九一六年前半期において一九一三—四年度の輸入高を抜いてゐる。原料及び半製品の輸入も亦、開戦第一年度に比し著増したが、生活必需品の輸入増はそれほど目に立たない。

しかし戦争はウラヂヴォストク經由の輸入の大發展を來した。その輸入價格は一九一三年度の二千一百三十萬留から、一九一五年度には三億一百万留に増加した。更に茲に加算すべきはヨーロッパ・ロシアにおいて關稅を免除された商品で、歐露國境貿易統計に出てゐるものである。これらの餘分に輸入された商品は殆んどその全部が、ヨーロッパ國境輸入の減少と代つて、歐露に入つて來てゐる。商品種別に見れば、この輸入は次のやうな數字になつてゐる。(單位百萬留)



年	生活必需品					計
	原料、半製品	動物	製品	不明	計	
一九一三年	八・三	三・七	二・〇	三・七	三・七	二一・三
一九一四年一—六月	四・七	二・七	一・〇	三・三	二・四	一四・一
〃 七—十二月	三・五	四・七	〇・一	四・五	二・〇	一五・〇
一九一五年一—六月	七・七	五・〇	〇・〇	四八・八	三・六	一一・一
〃 七—十二月	四・六	九五・八	〇・五	六九・八	九・三	一九〇・〇
一九一六年一—六月	一四・三	一三三・一	〇・〇	一七二・一	二五・一	三四四・七

戦時下におけるウラヂェオストック經由の輸入高の数字には、沿海州及び東部シベリヤの消費に充つべき正常な輸入も入つてゐる。この数字から右の正常輸入額を（一九一三年度の統計によつて）差引けば、歐露の必要に充つべき輸入増額が判る。このウラヂェオストック經由の餘分の輸入高と、ヨーロッパ國境經由の輸入高とを合算すると、一九一三—四年度のヨーロッパ國境經由の輸入に比し、開戦以來の輸入が次のやうな百分比になつてゐることが判る。

年	生活必需品		製品		全商品
	原料、半製品	動物	製品	不明	
一九一四年七—十二月	四二・二	三二・八	四二・四	三四・二	
一九一五年一—六月	四〇・八	三六・四	五〇・二	四二・〇	
〃 七—十二月	六一・六	八九・二	一一九・八	九七・四	
一九一六年一—六月	六八・〇	八四・五	一七四・七	一一七・七	

むしろこの数字は絶對的な正確さを主張し得るものではないが、かなり實際に近いものである。これらの数字は、前述のやうな交通省當局の失敗があつたにも拘はらず、開戦第一年度には外國品の輸入が相當に調節されて、工業製品は一九一三—四年度に比し著しく多量に輸入され、原料及び半製品は殆んど同額、生活必需品は三分の一減の輸入となつたことを示すのである。

しかし上記のやうな結論は誤りであらう。わが國にとつて重要なものは棉花や、農業機械その他の輸入量であつて、留で示したその輸入高ではないのだ。輸入を貨幣單位で示せば、現代の物價騰貴と留貨の低落の結果、輸入額を過大に見ることとなる。

戦時下の外國品輸入高に對するこの物價騰貴と留貨低落の影響を除くため、われわれは十五主要輸入品の税關價格の變動表を選んだ。このうち四種目は生活必需品類に、五品目は原材料及び半製品類に、六品目は製品類に屬する。（別表（一）参照。）一九一三年の物價を百とすれば、半年毎の物價指數の動きは次の通りである。

年	生活必需品		製品		全商品
	原料、半製品	動物	製品	不明	
一九一四年七—十二月	一〇〇・一	九九・七	九七・八	九九・一	
一九一五年一—六月	一一一・〇	一〇二・八	一二七・二	一四・八	
〃 七—十二月	一五四・三	一五八・六	一三四・一	一四七・七	
一九一六年一—六月	二二一・一	一九九・六	一七七・四	一九九・一	



この指數を使へば、留貨相場低落と物價昂騰との影響を除いて、前表を修正することが出来る。すると一九一三—四年度に比較した開戦以來の輸入額を示す、次の數字が出る。(單位%)

生活品	原料、半製品	製品	全商品
一九一四年七月—十二月	四二・二	三二・八	四三・四
一九一五年一月—六月	三六・八	三五・四	三九・四
七月—十二月	四〇・〇	五六・二	八九・四
一九一六年一月—六月	二九・四	四二・三	九八・五

従つて實際には工業製品のみが僅かに一九一三—四年度の水準に迫つてゐるだけで、生活品や原料半製品は一九一三—四年度に比して大凡半減してゐる。

かやうにわが輸入の減少は、輸入品の價格の數字によつて判断されるよりは、遙かにひどいのである。しかもかやうに切り詰めた外國品の輸入でさへも、國民經濟の手に入るのはそのうちの極く僅かである。恐らく輸入製品のうち四分の三以上は軍需に向けられてゐるであらう。これと同様に原材料及び半製品の大部分も陸海兩省の支配下に入つてゐるのである。それ故、通常の國際通商路の閉鎖によつてわが國民經濟の蒙つた損害は、決して前掲の外國輸入減の統計によつて判断できるものではないのである。

注目すべきことは、必要な商品を外國から輸入することは、上記の通り困難を極めてゐるにも拘は

らず、ロシヤへの贅澤品輸入が禁止されないのみか、却つて相對的增加さへ來してゐることである。わが國は一九一五年度には一九一四年以上に化粧品、精油及び香油を輸入したのだ。贅澤品の輸入は一九一六年十月廿日に到つて、やつと制限を受けた。

戦争はこれ以上にわが輸出に影響してゐる。一九一四—六年にわが國はヨーロッパ國境を経て、開戦直前の一九一三—四年度に比し、次のやうな輸出をした。(單位百萬留)

月	一九一三—四年度輸出	一九一四—五年輸出	一九一三—四年度輸出に對する%	一九一五—六年輸出	一九一三—四年度輸出に對する%	一九一六—七年輸出	一九一三—四年度輸出に對する%
七月	一二三・八	一二三・三	九九・六	三〇・八	二四・九	六一・一	四九・三
八月	一五八・八	一二二・二	七七・七	四六・五	二九・九	八二・五	五二・〇
九月	一五九・五	一〇・六	六・六	四二・六	二六・七	五五・五	三四・八
十月	一四四・三	一五・五	一〇・七	五三・二	三六・九	六六・三(註)	四九・九
十一月	一三五・四	一五・九	一一・七	二五・〇	一八・五		
十二月	一三五・一	一一・一	八・二	二一・六	一六・〇		
一月	一〇〇・七	九・六	九・五	一七・二	一七・八		
二月	九二・三	一一・〇	一一・九	一七・四	一八・九		
三月	一〇六・〇	一〇・五	九・九	二〇・一	一九・〇		
四月	一〇四・六	一一・五	一一・〇	三九・七	三八・〇		
五月	一三九・八	二三・四	一六・七	二五・一	一八・〇		



六	月	一三四・三	二八・二	二一・〇	四九・三	三六・七	一二四
全	年	一五三四・六	二八二・八	一八・四	三八八・五	二五・三	—

(註一) 關稅局概算による「商工新聞」一九一六年第二五五號

開戦直後の十一ヶ月間(七月を除く)に輸出は一億五千九百萬留まで、即ち前年同期の輸出高の一・三%まで低落した。従つて戦争は直ちにわが輸出を、輸入よりも遙かにひどく減少せしめたのである。その後引續いて起つた外國貿易の好轉は、輸出よりも輸入の方を旺盛にした。その結果、開戦第二年目の後半期には、わが輸出は價格の點から見れば、輸入よりも三倍以上の被害を戦争から受けたこととなる。

商品種別に見れば、わが輸出は次のやうになつてゐる。(單位百萬留)

	生活品	原料・半製品	動物	製品	計
一九一三—一四年度	九〇一・七	五七一・六	二九・四	三一・九	一五三四・六
一九一四年七月—十二月	一〇〇・九	八〇・〇	一・〇	六・六	一八八・五
一九一五年一月—六月	五〇・九	三五・一	〇・〇	八・一	九四・二
〆 七月—十二月	一一八・二	九五・五	〇・〇	六・〇	二一九・七
一九一六年一月—六月	五八・三	一〇一・一	〇・一	九・三	一六八・八
〆 七月—九月	六八・九	一一一・七	〇・〇	八・五	一九九・一

もつとはつきり示すために、一九一四—一六年間の輸出高を、開戦直前の輸出高の百分比で現はし、

全年ではなくて半年を基準として計算して見よう。

	生活品	原料・半製品	製品	全商品
一九一四年七月—十二月	二二・四	二八・〇	四一・四	二四・六
一九一五年一月—六月	一一・二	一一・二	五〇・八	一一・二
〆 七月—十二月	二六・二	三三・四	三七・六	二八・六
一九一六年一月—六月	一一・九	三五・四	五八・五	二二・〇
〆 七月—九月	二二・九	六三・九	八〇・二	三八・九

かやうに開戦第二年目には、わが輸出はその價格において、以前の輸出高の約四分の一に低落した。最も低落の少なかつたのは工業製品だが、これは元來が極めて僅少なものである。次は原料及び半製品で、最も被害の大きかつたのはわが國の主要輸出品たる生活用品であつた。

前にも指摘したやうに輸出高を計算する場合に、現在のやうな物價騰貴の際にこれを貨幣單位で現はすと、その額を過大視することとなる。

この輸出高に對する物價騰貴の影響を除くために、わが主要輸出品十四種の稅關價格を選んだ。このうち七品目は生活品、五品目は原材料及び半製品、二品目は工業製品である。(別表(二)參照。)一九一三年度の物價を百とすれば、輸出品物價指數の動きは次のやうになる。



生活品	原料、半製品	製品	全商品
一九一四年七月—十二月	一〇三・三	一〇二・九	一〇八・一
一九一五年一月—六月	一五三・六	九五・六	一三八・〇
〆 七月—十二月	一六一・一	一四五・〇	一五五・一
一九一六年一月—六月	二〇一・六	一七二・三	一九五・七

この指数を使つて前表を修正すると、一九一三—四年度に比較した、戦時下の輸出高は次のやうになる(單位%)

生活品	原料、半製品	製品	全商品
一九一四年七月—十二月	二一・六	四〇・二	二二・八
一九一五年一月—六月	七・二	五三・二	八・八
〆 七月—十二月	一六・二	二六・〇	一八・四
一九一六年一月—六月	六・四	三四・〇	一一・二

かやうに開戦第二年目のわが輸出高は、戦前の正常な輸出高の六分の一にも足らぬ有様で、一方輸入高はその三分の一に當つてゐた。

しかし重量單位で輸出高を計つて見ると、またその數字が多少違つて来る。次に擧ぐる表は、わがヨーロッパ國境經由貿易報告に重量を明示してある全商品に關するものである。百萬布度を單位とする輸出總額は次の通り。

生活品	原料、半製品	製品	全商品
一九一三—一四年	七七四・三	四・四	一四九七・七
一九一四年七月—十二月	六一・四	〇・六	一七二・六
一九一五年一月—六月	一六・三	〇・七	二九・六
〆 七月—十二月	三一・一	〇・六	九八・五
一九一六年一月—六月	一八・八	〇・八	四四・七

即ちこれを一九一三—四年度に對する百分比で示せば次の通り、

生活品	原料、半製品	製品	全商品
一九一四年七月—十二月	一五・九	二七・三	二二・〇
一九一五年一月—六月	四・二	三一・八	四・〇
〆 七月—十二月	八・〇	二七・三	一三・二
一九一六年一月—六月	四・九	三六・四	六・〇

明白に、外國貿易路線の縮少は、各商品類別のうちで、専ら最高比價の生産品の輸出の制限を來したのである。(註一)

(註一) 一九一七年度豫算案説明者の統計によると、貨物の數量から見れば、わが輸出入は次のやうに變化した。(單位百萬布度)

輸出	輸入
一九〇九—一九一三年平均	一、五〇一
一九一五年	一五〇
	六八六
	二四〇



輸入に比しわが輸出が著しく減少した理由の一つは、疑ひもなくわが輸出品が嵩張つてゐて、その比價が低い點である。も一つの理由は、(敵の必要とする物品を敵が手に入れることを防止するため、また戦争目的及び国内工業の必要品を国内に保有して置くために、)一聯の商品の輸出を禁止したことである。それと同時に大藏大臣は、これら禁止品のうちからロシアの同盟國及び友好國のために除外する権利も持つてゐる。これについては、むろん全く咄めいた多くの珍事件が起つた。輸出禁止品目のうちには魚卵や高價な毛皮——黒貂・北極狐・捲毛羊皮——も入つた。シベリヤの國會議員エス・ヴェ・ウオストロチン氏が國會で話した所によると、バターについては次のやうな経緯があつた。「バターはシベリヤで四百五十萬布度以上も生産され、しかも専ら外國市場に向けられ、ロシア國內には僅か一五—二〇%しかさばけないのであるが、このバターが開戦劈頭から、すつかり輸出を禁止された。バター輸出業者は危機に瀕し、それが全バター製造業に深刻な影響を及ぼした。殊に開戦初期には、勞働力が戦場に送られて、農業よりもバター製造に適する婦人ばかりが残つたので、この影響は甚大であつた。バター製造業はそのバターを賣り捌く可能性を奪はれたのである。その後バターは軍用に充てるためといふ觸込みで徵發を受けたが、何ヶ月経つてもバターを取りには來なかつた。そのまゝ納屋や倉庫で腐敗し始めてゐたら、十數ヶ月も経て、極く少量を軍用として取り上げ

- 果 實 (六一)
- 各種茶、紅、磚 (二)
- 葡萄酒、果實酒 (二)
- 鍊 壺 燻 製 (三)
- 生 皮 革 (五)
- 石 炭 (七)
- ゴム及び生ゴム (八)
- 棉 花 (一)
- 未染色羊毛 (一)
- 鋼 製 品 (一)
- 鐵鋼製機械 (一)
- 各種農具 (一)
- 各種 紙 (一)
- 綿 織 物 (一)
- \* 毛 製 品 (一)

\* 毛製フェズ帽を



(一) 一九一三—一六年度歐露國境經由の商品輸入量(單位千布度) 及び税關價格(單位哥)

商品	一九一四年				一九一五年				一九一六年			
	後半年	前半年	後半年	前半年	後半年	前半年	後半年	前半年	後半年	後半年	前半年	後半年
果實(六一七條)	二五五	五九九	三二	一三三	三七	六七	三三	二八・二	一八九・三	三三・七	二九九・〇	五九・五
各種茶、紅、磚(二〇一ノイ)	八九	八三	五	六八	一〇一	一〇三	一七九	一七九・〇	一七九・〇	一七九・八	一八二・八	二二三・〇
葡萄酒、果實酒(二八)	二八	二五	八	六	四	二	一	一・一	二七・一	三三・五	二〇四・五	二〇一・七
鍊鹽、燻製(三七ノ四ノイ)	一〇七	七八	二九	六七	五七	五六	五六	一五〇・〇	一五〇・六	一五四・八	二二〇・五	二四三・五
生皮、革(五四)	一八九	一七五	二七	一一	三	一	一	六三・〇	五九四・七	七三・八	二二〇・五	七二五・〇
石炭(七九ノ一ノイ)	三〇八・六	一九七・九	八四・〇	二九・五	三六・五	二五・三	五二・一	一六・〇	一六・〇	一五・二	一九・六	四四・二
ゴム及び生ゴム(八七ノ二)	三三	四三	二四	二八	三五	一六	一〇四	四七・四	四三・一	三九・三	四二・五	五〇・二
棉花(一七九ノ一ノイ乃至ホ)	五四七	七〇六	一五七	八〇	二四	五一	三〇〇	一〇六・八	一〇八・六	一〇四・六	一三三・八	一三六・八
未染色羊毛(一八一ノ一ノイ、ロ)	二二六	一六七	一七	八	一五	二七	二九・八	三〇・二	三三・八	三三・四	二八三・三	三五〇・九
鋼製品(一四九)	一八六	一九	六	一三	三	二九	九三	三〇六・四	二九九・四	三〇四・九	四九〇・八	四八六・七
鐵鋼製機械(一六七ノ一)	五三	五六	二	六	一	二六	五二	九三・七	九八・九	一〇四・一	一四〇・九	一五〇・五
各種農具(一六七ノ四及ビ六)	一七七	五八一	三〇	五	四〇	二九	三九	五八・三	五八・四	四九・九	八七・〇	八七・五
各種種紙(一七七ノ二ノロ)	二八七	二八五	二五	二九	三六	三六	九六	三六・〇	三三・五	二九・一	三三・三	四九・〇
綿織物(一八七―一八九)	五	九	三	三	六	六	八三	一〇二・九	一一〇・六	九三・九	七三・二	七九・九
*毛製品(一九八―二〇四)	一〇	九	七	四	三	三	一	八二・一	八七・六	八九・九	九八・二	七四・七

\*毛製フェズ帽を除く。







(二) 一九一三—一六年度歐露國境經由の商品輸出量(單位千布度) 及び稅關價格(單位哥)

品名	商 品 輸 出 高				關 稅 價 格			
	一九一三年 後半年	一九一四年 前半年	一九一五年 後半年	一九一六年 前半年	一九一三年 後半年	一九一四年 前半年	一九一五年 後半年	一九一六年 前半年
小麦(一條)	1,012,200	1,330,300	1,410,700	1,794,300	3,049	2,211	2,233	1,591
小麦(二)	27,510	1,930,000	3,970	1,070	1,704	83	80,400	1,717
小麦(三)	1,694,500	1,005,800	2,003	50	7,800	7,400	7,500	1,551
小麦(四)	2,337	1,270	5,800	90	40	833	75	1,910
燕麥(一五)	2,540,700	2,327	4,500	1,970	1,400	70	6,700	6,900
燕麥(三六)	2,801	1,930	2,930	770	1,530	1,493,900	1,520,000	2,329
燕麥(三八)	1,961	1,600	5,000	370	2,500	2,688,500	2,697,400	3,028
板(七一ノチ)	1,496,400	5,446,600	4,882	4,330	7,413	4,000	6,400	5,000
油(八三)	2,586,700	2,247	4,541	5,630	3,300	4,000	6,400	1,000
亞麻(八九)	7,330	1,100	1,465	3,320	2,900	5,000	5,300	1,000
未製皮革(九九—一〇一)	2,233	2,290	1,350	90	1,700	1,400,500	1,68,500	2,348
石油同製品(一七五—一八一)	2,804,500	2,465	4,677	5,930	1,569	870	950	1,019
棉織物(二七五—二六〇)	1,490	1,300	5,900	300	1,300	2,550,000	2,707,700	2,473,300

\* 百萬個







て、あとは解禁になつた」。

白海沿岸諸港の木材は同盟國船又はロシア國旗を掲げた船舶以外には積出を禁止されてゐた。ところが現在では世界市場で同盟國の船舶を傭船することは不可能で、ロシア船は殆んど皆無である。その結果、一九一五年秋にはアルハンゲルスク港に四千萬留の木材が滞荷した。然るにドイツとしてはその必要とする木材はいつでもスウェーデン、ノールウェイ及びオーストリアで手に入れることが出来るので、ドイツが木材を必要としないことは明白である。

「ウラヂヴォストックは輸入品のためには充分に利用されてゐるが、輸出に關しては殆んど使用されてゐない。ところがこの輸入貨物のためシベリヤ鐵道が塞つたため、シベリヤはその嵩張つた多量の穀類輸出について全く外界と切離されてゐる。そしてこの穀類餘剰高は小麥だけでも昨年度の收穫高から見ても幾億布度に達し、それが歐露へ搬出出来ないでゐるし、その上多量の燕麥があり、ロシア本國との連絡はかくして全く亂脈に陥つてゐる。この交通には東方への出口もない。だから過般鐵道局において海外輸出といふ意味で東方への輸送調節問題について、特別協議會が開催された。ではその協議會の結果如何といふに、皆がその輸出の技術的可能性を認め、車輛を二百輛までは東方へ使用出来ること認めたが、これらの車輛が空車のまゝ走つてゐる理由は長距離に互る高率の鐵道運賃が安價な農産物をウラヂヴォストックへ送ることを不可能ならしめてゐるからである。だから輸出協會はこ



の運賃を一露里布度當り百二十五分の一まで低下したら鐵道資材の大部分も稼ぐことにならうと請願し、小麥の價格は極度に低落し、鐵道沿線においてこそ小麥一布度を六十乃至七十哥で賣れるが、鐵道線路から二百露里のところでは三十乃至四十哥で、四百露里から十七乃至二十哥で、砂糖一フロントとか燈油半フロントに對し小麥二布度も拂ふ状態である……と指摘してあつた。この協議會において外務省代表者は、この問題がどんな解決を得ようとも、……この血路は達成できないであらう、けだし陸軍省は中立國船舶をもつてする同盟國への食糧及び飼料品の輸出をも斷じて許容しないからであると言明した。かくてこの問題は後廻しとなり、日程から除かれて、遂に未決のままになつた。かくて一ヶ月には六百萬布度、一ヶ年には七千二百萬布度の國家のために運搬できる二百輛の車輛は依然として空運轉を續けてゐるのである。

エス・ヴェ・ウオストロチン氏は次のやうな言葉でこの演説を結んだ。「これらすべての路線によるわが輸出能力を總計して見ると、いくら内輸に見ても、これら路線を完全に利用すれば、少くとも一年間に二百五十萬布度までは輸送出來るであらう。輸出品の中にはバター、鶏卵、亞麻、木材その他があつて、平均一布度あたり二留とすれば、總額約五億留に達するのである」。(註一)

(註一) 國會議事録、一九一五年八月十八日、九〇二、九四五—五二頁

わが輸出に關するこれらすべての非經濟的處置のうちで特に注目し値するのは、政府の役割であ

る。あとで重ねて論ずるが、政府は今次の戰爭中、軍事行動の經濟的一面に對し極めて貧弱な理解しか示さず、また國民經濟の利害につき極めて粗漏な態度を取つてゐた。むろん昔の戰爭なら、——むろんある程度までだが——經濟を無視してもよかつた。しかし現代の戰爭は、消耗戰と化し、最大の經濟的企業となつてゐるので、その國民經濟的一面に對しては全然別の態度を要求してゐるのである。

例へば、わが輸出の發展に對し無關心な態度を採つたことは、わが外國貿易勘定の極度の惡化を來した。最近數年間に於けるわが外國貿易は次のやうな數字になつてゐる。(單位百萬留)

	ヨーロッパ國境		アジア國境		全 國 境	
	入	出	入	出	入	出
一九〇九—一三年平均	一、〇〇三・七	一、四二二・八	一三六・〇	七八・六	一、一三九・六	一、五〇一・四
一九一三—一四年	一、三六六・八	一、五三四・六	一〇三・四	一六二・八	一、四七〇・二	一、六九七・四
一九一四年七月—十二月	二二九・〇	一一八・五	六七・八	三九・九	二九六・八	二二八・四
一九一五年一月—六月	一八七・〇	九四・二	一八七・一	三四・八	三七四・一	一二九・〇
七月—十二月	四八七・一	二一九・七	二五二・七	四八・五	七三九・八	二六八・二
一九一六年一月—六月	四七〇・六	一六八・八	三九四・九	五三・三	八六五・五	二二二・一
七月—十月(註二)	六九九・五	二四七・三	三二六・二	二四・六	一、〇二五・七	二七一・九

(註二) 關稅局概報による。



開戦以來輸出の激減と、それほどひどくない輸入減のため、わが外國貿易勘定は輸入超過となり、一九〇九—一九一三年平均に比較すれば半期毎に數億留の受取不足をつけ、しかもその不足はまさに慄然たる級數で増加してゐる。(單位百萬留)

	ヨーロッパ國境	アジア國境	兩國境計	一九〇九—一三年對比不足額
一九〇九—一三年平均	四一九・一	五七・四	三六一・八	—
一九一三—一四年	一六七・八	五九・四	二二七・二	—
一九一四年七月十二月	▲ 四〇・五	▲ 二七・九	▲ 六八・四	▲ 二四九・三
一九一五年一—六月	▲ 九二・八	▲ 一五二・三	▲ 二四五・一	▲ 四二六・〇
七—十二月	▲ 二六七・四	▲ 二〇四・二	▲ 四七一・六	▲ 六五二・五
一九一六年一—六月	▲ 三〇一・八	▲ 三四一・六	▲ 六四三・四	▲ 八二四・三
七—十月	▲ 四五二・二	▲ 三〇一・六	▲ 七五三・八	▲ 八七四・四

かやうに貿易尻の輸入超過と、一九〇九—一九一三年平均に對する受取不足額は次の通りである。

(單位百萬留)

開戦第一年度	輸入超過	受取不足
◆ 第二 ◆	三三三・五	六七五・三
◆ 第三 ◆ (概算)	一、一一五・〇	一、四七六・八
	二、二六一・四	二、六二三・二

貿易尻の輸入超過は、従つて、現在約二十五億留に達してゐる。この實情と、開戦直後にミグーリ教授の發表した判斷とを對照すると面白い。氏は一九一四年七月廿六日に次のやうに書いた。「わが對外決算勘定にとつては、輸出の減少は何等の重要性もないであらう。けだしそれと平行して、いやそれ以上に、外國品、特にわが輸入のうちで歴倒的部分を占めてゐるドイツ品の輸入が減少するからである。更にわが國の多數の旅客や病人が戦争を機會に殆んど全く海外旅行を中止することも、わが對外決算勘定に極めて好影響を與へるであらう。これに反して外國資本の流入が減少することは不利な條件となるであらう。要するに戦争となれば、わが對外決算勘定は決して悪化を來す筈はなく、却つてむしろ好轉するであらうから、わが本位貨は絶対に甚だ僅少な被害しか受けずに違ひない」。

(註一)

(註一) ベ・ミグーリ著、「戦争とわが經濟状態」、「新エコノミスト」誌、一九一四年、第三〇號

正しい經濟的豫想を行ふには、反動的國家主義的な衝動だけでは足りないことは今や明白である。かやうな恐るべき國際貿易勘定の悪化は、わが留貨の相場に最も苦痛な影響を及ぼさざるを得なかつた。一九一四年七月廿三日の勅令は、一九一四年七月廿七日に正式の法律となつたが、この勅令によつて信用券の金貨兌換が停止された。開戦直後の數週間、國際市場は恐慌に襲はれてゐたが、留貨の相場は二〇乃至二五%の低落を來した。その頃外國貨幣を買つたのは、餘儀なく買はされた人々ば



かりであつた。九月の初めに國際支拂關係が調節され、それ以來取引所では留貨の相場が定期的に建つてゐる。ロンドンではペトログラード向の小切手は次のやうな建値であつた。

月	一九一四—五年度		一九一五—六年度		一九一六—七年度	
	ペトログラード向小切手	留貨相場	ペトログラード向小切手	留貨相場	ペトログラード向小切手	留貨相場
七	—	—	一四三・〇	六六・一	一五六・七	六〇・四
八	—	—	一三五・二	七〇・〇	一五〇・三	六二・九
九	一七・七	八〇・四	一三七・九	六八・六	一四九・八	六三・一
十	一一・二	八四・三	一四一・五	六六・八	一五六・一	六〇・六
十一	一一七・四	八〇・六	一四六・三	六四・六	一五九・二	五九・四
十二	一一七・四	八〇・六	一五四・六	六一・二	—	—
一	一一三・九	八二・八	一六〇・五	五八・九	—	—
二	一一三・五	八三・三	一五〇・九	六二・七	—	—
三	一一四・一	八二・九	一五二・二	六二・一	—	—
四	一一六・二	八一・四	一五四・四	六一・三	—	—
五	一二三・〇	七六・九	一五五・八	六〇・七	—	—
六	一二七・三	七四・三	一五五・四	六〇・九	—	—

かやうにわが國とロンドンとの取組では開戦直後の恐慌が納つてから、開戦第一年前半期には留相

場は平均一八・五金哥の低落となり、同後半期は同じく一九・七哥、第二年前半期には三三・八哥、同後半期には三八・九哥、そして第三年前半期には三八・七哥とそれぞれ低落した。毎月毎月次第に増勢をもつて繰返される貿易尻勘定の入超の蓄積作用は、留貨の加速度的低落を來してゐる。しかし留貨の相場の低落が平均に行つてゐないことは、ここに他の諸原因の影響があることを示すものである。

一九一五年七月十九日國會において大藏大臣も述べたやうに、貿易勘定の入超は、「わが國においては本位貨饑饉を招來し、それが更に外貨の暴騰とそれに相當するわが留貨の低落を來した。かやうな對外商品交換は、わが貨幣問題の運命を伸したところの巨大なる結節部である。この結節部を一斷すべき刀を發見するのは容易なことではなく、またこの結節を完全に解きほぐすには、わが國において正常なる國際貿易條件を復舊するより他にはないのである。」——「外貨は他のあらゆる商品と同じ商品であつて、その價值の變動は、他のあらゆる商品と同様に需要供給の一般的法則に従ふものである。供給が需要に追つかない時は物價は上り、しかも需給の差が甚しければ甚しいほど、その値上りも急速である」。

外國貿易が何等の制限も受けない平時には、需要供給の法則は次のやうに現はれる。即ち外貨が高くなれば、その國に輸入される外國品も、その國の輸出する國産品も高くなり、従つて外國品の輸



入は低下し、國産品の輸出は増大し、かくして結局は輸出入高（むろん國際收支勘定の他の諸項目も含むことは云ふまでもないが）の均衡が恢復される。これに反して外國貨幣の價格が低落する時は、右と同じ理由によつて、輸入は増大し、輸出は低落して、遂に再び均衡が来るのである。しかし現在では外的な諸原因が、需要供給のこの法則の作用を妨害してゐる。外貨は暴騰してゐるにも拘はらず、わが國は國防に必要な製品や資材を餘儀なく輸入して居り、しかもこの輸入を節減出来ないものである。と同時に、現在われわれの支配下にある外國貿易路線の收容力が不十分なため、充分に輸出も増大出来ないのである。

かかる情勢の下においては需要供給の法則も輸出入高の必然的平衡を設定し、この平衡を齎らすが如き留相場の水準を確立する力はないのである。従つてバルク氏の説明は通常の外國貿易の條件下においてこそ全く正當であつても、現戦争下のロシアの外國貿易の置かれてゐる諸條件には全く適用出来ないのである。明白に、世界市場におけるわが留貨の評価は何等か別の要因（フアクター）によつて決定されてゐるやうである。

前掲の表を熟視し、わが戦線における主たる軍事的事件の表を想起するならば、この二種の現象の間に平行關係があることを容易に氣づくであらう。一九一四年十月のワルシヤワ附近の戦勝と、ドイツ軍のワルシヤワ敗退は、留貨の相場を八四・三哥まで好轉せしめた。サムソーノフ軍團の撃滅は留貨

の相場では八〇・六哥への低落となつて現はれた。次にカルバチャ方面における作戦の成功は、一月末に留相場を八三・三哥まで昂騰せしめた。わが軍のカルバチャ退却は一九一五年四月末から五月にかけて留相場の惨落となつた。わが留は八二・六哥から七六・〇哥へ低落した。留相場にもつとひどい影響を及ぼしたのは、一九一五年六、七月頃、わが軍のポーランド領撤退であつた。留相場は七七・五哥から六三・九哥に惨落した。ブルガリヤの對セルビヤ宣戦（一九一五年九月廿九日）、オーストリア軍のセルビヤ及びモンテネグロ占領、聯合軍のガリポリ半島撤退は、全戦争中を通じて留相場の最大の惨落——六九・〇哥から五七・八哥へ（一九一六年一月五日）——を來した。その頃世界市場では、この戦争におけるロシアの勝目は最も低く評價されてゐた。アルメニヤ方面における戦勝は幾らか留相場を好轉せしめた。しかし本年の春から夏にかけて、留相場は緩慢ながら絶えず落調を辿り、わづかに八月十四日のルーマニヤの参戦が一時的ではあるが七〇・一金哥までの留相場の急騰を來しただけであつた。十一月廿三日ブカレストの陥落は、十一月廿四日に留相場を五七・三乃至五八・〇哥まで低落せしめた。

かやうに軍事行動の舞臺の形勢は、疑ひもなく外國におけるわが留貨の評価に直接の影響を及ぼしてゐる。開戦第二年目の留貨の低水準は、一九一五年春と夏にわが軍の蒙つた敗北の直接の結果である。



この軍事的勝敗の影響についてはゼ・エス・カツ・ネレンバウム氏が正しい説明を與へてゐる。現在の異常時において國際收支勘定を調節する機構を分析して、氏は次のやうな結論に達してゐる。「留貨の價格を決定する時、外貨の購買者も販賣者も、先づ第一にロシアにおける正常な貨幣循環の復活する見込を考量する。その國が間もなく金單本位制に復活する見込を増すやうな事實は必ず比較的安い價格で盛んに本位貨を賣出す刺戟となる……」。これに反して、本位貨復活の機を遠ざけるやうな事實は、これと逆の方向に作用する。貿易尻勘定よりも、政治的事件の方が遙かに大きな影響を及ぼす所以は實にこの點にある。La Longue 貿易尻勘定は、本位貨復興に作用する一聯の要因<sup>フアクター</sup>においてそれだけの役目はたすであらうが、現在の瞬間ではこの要因は第二義的な意義しか持つてゐないのである」。(註一)

(註一) 現代物價騰貴研究會出版物、第三輯、三四頁、大藏大臣のバルク氏も、留相場に影響する諸要因の一つは信賴である。本位貨に對する信賴、一般に財政状態に對する信賴と、軍事の成否に對する信賴である」と云つてゐる。豫算財政聯合委員會議事録、一九一五年八月四、五及び六日、五八頁。

次に大藏省の特別措置も亦、留相場に多少の影響があつた。最も合理的な相場矯正法は、外國での留債券賣出である。この方法は英佛獨が盛んに使用したものである。ところがロシアは外國の有價證券を持たず、世界の資本市場では債權者ではなくて、債務者の役割を演じてゐる。従つて右の本位

價調節法はわが國としては手の届かぬものである。次に重要な方法は外國での借款締結である。戦争の用に充つる買付費を用途とする軍事國債は留貨の相場には何の影響も及ぼさなかつた。貨幣相場に影響のあつたのは、戦前に行はれた對外債務を償還せんとする銀行及び會社の貨幣需要を充さんがための借款提供に關する一九一五年一月初めのフランス銀行及びイングランド銀行との協定ばかりであつた。これらの借款を開設した結果、留相場は一月中旬には八二・二哥から八五・六哥まで昂騰したが、二月中旬には再び昔の相場に歸つた。これと同様の一九一五年十月一日の借款協定は、借款事務所内に特別決済貨幣部を設置せしめ、同部は一九一六年一月廿五日に活動を開始した。同部の活動によつて留相場は五八・四哥から六二・七哥に(二月初め)昂騰し、更に六三・二哥(三月初め)まで上つた。しかし三月末には留相場は六〇・九哥に低落し、四月中旬には六〇・四哥に落ちた。かやうにこの對策も相場の一時的好轉を來したにすぎなかつた。二月頃には同部の活動が大變に大藏大臣の満悦を買つて、大臣は「十二月末乃至十一月初には自由市場において十磅につき百六十留以上であつた磅相場には、今や百四十九留である。従つてわれわれは數週間のうちに一〇%以上磅相場を引下げ、ロシアの留相場を改善することが出來た」(註二)とまで同部の活動の成果を認めた。しかしその後「財<sup>ウエストニック・インザンツ</sup>政時報」誌は「ロシアにおいては貨幣市場に對する國家的調整は重要ではあるが、直接的實踐的意義といふより、むしろ原則的意義を持つものである」(註三)と悲痛な承認を行はざるを得



なかつた。

(註一) 國會議事録、一九一六年二月十八日、一八六五頁。尙ほ大藏大臣の言葉には多少誤つた點があるので、これを修正して置く必要がある。二月十八日まではこの相場は一五〇留四分の三以下に降らなかつたが、これは一〇%以上ではなくて、僅か七・四%の好轉にすぎない。

(註二) 「財政時報」一九一六年、第二三二四合併號、四七四頁。

ロシア諸銀行の外貨投機、その留相場引下策を防止した大藏大臣の對策も、これと同様の一時的成功しか納めなかつた。一九一五年八月十八日大藏大臣は國會において「本國會において指摘された外貨投機事件については、大藏省において最も斷然たる對策を講じて置いた。諸銀行が外貨取引に手を出してゐるといふ情報が、大藏省に達した時、この種の取引を全部嚴重に登録せしめた。各新聞に記載されてゐる相場を見ても明かなやうに、例へば磅相場は低落して、百五十留を越えてゐたのが、今や十磅につき百三十五留前後を上下してゐるのである」。(註一)

(註一) 國會議事録、一九一五年八月十八日、九二二―二頁。

どうやら大藏大臣の言葉は、(留)相場が百四十八及び百四十六から一舉に百三十五まで昂騰した一九一五年の七月末を指すものらしい。しかし「商工新聞」<sup>トモゴウオウコウメイシンシンヤカゲ</sup>はこの留相場の好轉について全然別個の説明を加へてゐる。同紙は七月三十日の紙上に百三十五の相場を記述して下のやうに述べてゐる。「取引は百三十一の相場でも行はれた。ペトログラード向け相場の著しき改善は、ダーダネルス

及びロシアよりの有利な情報によるものである」。(註一)

(註一) 「商工新聞」一九一五年、第一七一號。

かやうに大藏大臣は國會において、全然別個の原因によつて起つた効果を、自分の對策の故だと述べたのである。

上記の通りロシア及びアルメニヤにおけるロシア軍の勝利は、留相場の漸落を妨げるものではなかつた。どうやらこの事情は、外國において、巨額の信用券流通——一九一四年七月一日現在十六億三千四十萬留から、一九一六年十二月一日現在の八十三億八千三百五十萬留まで、五倍以上の著増——とわが通貨單位の平價切下げ期待とによつて、わが財政狀態に對する悲觀的評價と關聯してゐるやうである。

通貨流通高の著増は、戰費の壓迫を受けて餘儀なく民間の生産及び個人消費を節減したので、民間には數十億の遊休消費力が蓄積されてゐて、それが絶へず市場を壓迫して、あらゆる物價を吊上げてゐることを示すものである。だが物の値が上れば、貨幣の値は下る。物價はそれに對して與へられる貨幣の量によつて決まるならば、貨幣の値はそれによつて買ひ得る物の量に現はれるのである。國家の戰費支拂の結果、物價が四五%乃至九二%昂騰したことは、それだけ貨幣の値が下つたことを意味する。それ故、外國市場における留相場の低落とは全然別個に、國內においては留の價値喪失が起つ



たのである。もしもわが外國貿易が通常の金額で行はれたら、留貨は國內市場では外國市場と同様——開戦第一年度末六三・九哥並に第二年度末六〇・三哥に低下したであらう。しかし今やロシアは始んど全く世界市場から切離されてゐて、わが輸入は殆んど全部戦争の用に充てられ、私營工業と商業は僅かにパン屑を貰つてゐるに過ぎない。従つて輸入品の物價騰貴は、國産品の物價を決定する力はないのである。しかるに一方わが國の輸出は餘りに僅少で偶發的な性質を持つてゐるので、この方法によつても世界市場の物價は國內市場に影響を及ぼし得ないのである。外國市場と國內市場とで留貨の相場に喰違ひを生じた所以はこれである。この二つの現象は、外國貿易の發達した條件下においては相互に有機的な關聯を持つてゐるが、現在ではこの關聯を失つてゐる。しかし戦争が終つて、國境が開かれたら、この關聯は直ちに急速に恢復するであらう。

戦後においては外國市場たると、國內市場たるとを問はず、留相場に決定的影響を及ぼすものは、まづ第一に戦時外債の支拂で、次が國內の信用券流通量であらう。前章の終りに試みて置いた計算によると、わが外債高は戦争中に五十億の増加を示し、その支拂高は償還高とも年三億留を越えてゐる。これに相當するだけのわが輸出の増加はけだし目安に置けないであらう。況んや信用券の形を取つた民間の自由購買餘力は、相當程度の價值切下げが行はれるまでは、市場を壓迫して、輸入を増大し、輸出を減少するであらう。われわれの計算によると、信用券の發行は開戦以來三ヶ年に約九十億

に上るであらう。かう云ふ譯で、戦後の留相場の見透は甚だ寒心に堪へないものがある。

市場では現在既にこの見透を完全に商量してゐるので、わが爲替相場は克服できぬ漸落傾向を示してゐるのである。

留相場低落の間接の結果の一つに、流通面から金貨が姿を消したことである。これに反して、小額貨幣が姿を消したのは、國際市場における留安とは何の關係もない。

世界戦争勃發の曉には金貨が流通面から姿を消すといふことは、戦争の始まるずっと以前から經濟學者たちの豫想してゐたところであつた。(註一)

(註一) フリオフ、「未來戦」第四卷三七〇—三七四頁を對照。

實際、恐慌にまきこまれて、金は開戦後數日ならずして流通面から姿を消したが、これはわが國ばかりでなく、他のあらゆる交戦國において起つたことである。その後、留相場が低落したため、金はそのまま退藏された。一九一四年七月一日現在でわが國の金貨流通高は四億六千三百七十萬留と認められてゐたが、あらゆる方策を講じたにも拘はらず、一九一六年一月一日までに——一年半の間に——流通面から回収した金貨は僅か二千八十萬留にすぎなかつた。現在かくも必要な金を國立銀行に回収する對策がこんな失敗した理由の一部は、國庫に金を引渡す際に設けられてゐた條件にある。國會でア・イ・シンガレフ氏が報告したやうに、「多少憂ふべくかつ驚くべきことであるが、國立銀行



に對して金を引渡す義務ありと認められた人々も、奇怪にして不可解な障礙に遭遇したのである。一時間待ちなさい、一時間半待ちなさい、この窓口ではないあちらの窓口へいらつしやい、十人ほどの役人と話して下さい、あなたの金貨に何百分の一位でも瑕が入つてないか調べて下さい——と云つた具合で、その結果は誰にも必要な時間の空費であり、用ない交渉であり、そして何故とも不可解な障礙である。今日もある新聞に出てゐた話であるが、サマラである愛國者が數百留の金貨を國立銀行に持つて行つたところ、大變な時間を費し、多勢の役人と面接し、どどのつまりが支配人にも面會したが、結局その金は受取らなかつた。といふのはその金貨の重量は充分で、擦れがないと云つたやうなことを調べねばならぬからであつた。大藏大臣のバルク氏は慌て、國會を慰撫して、「これまで金貨の受付に當つて國立銀行に存在してゐた形式尊重は既に排絶されたから、金を提出される方は何人たるを問はず、充分丁寧に接待するであらう」。(註一)

(註一) 國會議事録、一八一五年八月十八日、九〇六、九〇七、九二四頁。

この對話は一九一五年八月十八日に行はれた。つまり滿一年と云ふもの、開戦以來一ヶ年間といふもの、國立銀行に金を持つて來た民衆は、相當の注意も受けず、色々な形式責めにされたのである。愛國的熱意のさめた民衆が、國立銀行に金を持つて來なくなつたのは當然ではないか。

ところが産金業者に對する態度は又別物であつた。彼等は、あらゆる官吏が鼻の先であしらふ民衆ではない。一九一四年十月以降、産金業者から買上げる金地金には、相場比率によつて外國貨幣を拂つてゐた。次に、一九一五年十一月廿四日以降は、三〇%の獎勵金を拂ひ、一九一六年一月十四日以降は四五%とした。かくて一九一五年十一月末からは留信用券を七六・九金哥と評價して、著しい打歩をつけて金地金を買上げ、一九一六年一月中旬以降はこの取引では留紙幣をもう六九・〇金哥と評價するやうになつた。爲替相場は、前に引用して置いた表を見ても判るやうに、その當時一〇乃至一五哥低くなつてゐた。かくの如く戦時下における金地金の打歩は、爲替相場より著しく後れてはゐるが、これに次いで進んでゐる。(註二)

(註二) ゼ・エヌ・カフエネレンバウム著、現代物價騰貴研究會出版物、第三輯、四〇頁。

小額貨幣も亦、流通面から姿を消した。しかしこの現象を起した理由は全く別物である。外國でも開戦劈頭に銀貨や銅貨が姿を消したが、外國では盛んにその鑄造を増加したので、危機は去つた。わが國では、一九一五年八月五日國會の豫算財政委員會において國立銀行支配人イ・ペ・シポフ氏が報告したやうに、開戦劈頭から危険にさらされた地方では、貨幣流通の方面で二つの特色ある現象が認められた。第一の現象は民衆が銀行や貯金局やその他の貨幣保管所にかけて、金を求めることで、もしも銀行や國庫が待避したら、一文なしになつて生きて行けないと云ふ不安の現はれである。第二の現象は、皆が小額貨幣、銀銅貨を奪ひ合つたことである。去年はこの現象が七月末から八月初



めにかけてカメネツIIポドリヌク市、同じ頃ロッヂ市、その後ワルシャワその他多くの地方で殊のほか強く認められた。その結果は、地元の市役所や地方の公共團體から特殊の小額市民紙幣を出すまでに到つた……これこそ一般に金、特に小額貨幣を持つてゐたいといふ自然の要求である。何となれば買手は小額貨幣で丸パンとか、肉とか、生活上極めて必要な品を買へるからである。この全く自然な現象に投機が混入したのも當然である。しかもある場合には極めて猛烈で極めて害毒を流した投機が混入した……これは去年起つた現象で、その頃までドイツでは銅饑饉などをまだ云々するものなく、銅貨の買占とか、銅ストックの増加など全く何處でも問題になつてゐなかつたのである。現在では敵軍の侵入の危険ある地方では、これと同じ現象が繰返されてゐる」。(註一)

(註一) 豫算財政聯合委員會議事録、一九一五年八月四、五、六日、七二頁。

なほ戦場に接續したあらゆる地方では、住民は小額銀貨や銅貨ばかりでなく、小額の信用券に對しても猛烈な要求を示した。(註二)

(註二) 「開戦九ヶ月間におけるロシア國民の經濟生活と經濟狀態」、一〇九頁。

一九一五年の七、八月頃、内地諸州に移住民や避難民の波が押寄せた時、小額貨幣は、例へばベトログラード、キーエフ、モスクワなどのやうな戦場から遠隔の地方においても姿を消した。彼等はそ

等は日常の必要を満すに必要な小額銀銅貨の需要熱を一段と高めるのであつた。八月の中頃には、ベルブルグにおける銀銅貨の缺乏は激烈なものとなつた。八月十七日にはモスクワモスクワ關門外の小店に小額貨幣が足りなくて、紙幣の引換を拒んだので、群衆が數軒の小店を打ち壊した。その頃市内の中央部では、アー・イー・シンガーレフ氏の言葉によると、「藏つて置いたために小額銀銅貨を集める奇怪な人々を見かけることがあつた。彼等は貧富さまざまの服装をし、三角襟巻もあれば帽子を被つた者もあつて、それが教育のある者ない者と、いろいろ商店や電車の中で見かけることが出来た。知識のある人間が、どうしてこんな馬鹿氣な仕事に手を出すのか、呆れた話である。君らはそんな金を持つて何になる、集めて藏つて置いても何んにもならないぞ、その金には表面に書いてあるだけの値打はないのだから、役には立たないぞ、となぜ云つてやらないのだらう」。(註一)

(註一) 國會議事録、一九一五年八月十八日、九一〇頁。

全く銀貨の名目價値は、その中に含まれてゐる金屬の價値とは全然一致しない。例へば一九一五年には造幣局で鑄造用として買入れた銀は、一布度五百十九留九十三哥六であつた。銀行銀貨は一布度の銀で九百十留二十二哥二を鑄造し、小額銀貨はその二倍を鑄造する。従つて各銀留(九〇〇品位)には銀は五十七哥一しか含まれず、小額銀貨(五〇〇品位)には僅か二十八哥六しか入つてゐない。かういふ譯で、信用留券の相場は一九一五年十二月頃から、銀留の金屬價格に接近して來たが、それでも留



の最低相場五十七哥七（一九一六年一月五日）でも尙ほ留銀貨を鑄造してある金屬量の價格よりは高いのである。世人が金貨を隠匿する時の考へは、高品位銀貨でさへ適用出来ないのだから、それよりずつと安い小額銀貨では云ふもさらなりである。

これと同様に、銅貨隠匿の理由も充分ではない。銅一布度をもつて五十留の銅貨が鑄造される。ところが銅の伸棒一布度は戦前には十五乃至十七留であつたのが、一九一五年七月末モスクワでは二十六乃至二十七留五十哥に騰貴し、一九一六年四月には三十六乃至三十七留に達した。かう云ふ譯で、一九一五年八月には銅貨一留の中に信用券紙幣五十五哥が、一九一六年四月には同じく七十四哥が入つてゐることになつた。

では一體どう云ふ譯で民間では銀や銅を隠匿してゐるのか？ ドイツ軍侵入の危険にさらされた西部諸州なら、ドイツ軍は信用券は受けとらないで、金屬貨幣しか受とらないといふ誰知れず飛ばした流言が物と言ふかも知れない。しかし他の諸州では、これと違つた一般的な原因が働いたに違ひない。その原因は開戦以來わが貨幣流通の蒙つた變化に、流通高が殆んど二倍に増加した點にある。

わが國民經濟機構の下においては、この大量の紙幣を呑むのは小經營單位ばかりである。のみならず資本主義的大企業は金融機關のサーヴィスを利用することに慣れ切つてゐたので、紙幣に對するその需要は巨額に達する筈はなかつた。小經營が主として小額の紙幣を要求するのは自明の理である。

一方、一九一四年一月一日現在の金貨を含む各種額面の通貨量と、一九一六年一月一日現在の金貨を含まない通貨量とは次の通であつた。（單位百萬留）

	一九一四年一月一日	一九一六年一月一日	増加率(%)
額面二五・五〇〇留	九二〇・三	三、〇三二・二	二二九・五
〃 三——一〇留	一、三四五・六	二、五一二・〇	八六・七
一留及び半留	一二六・〇	三三八・二	一六八・四
小 額 貨 幣	一一一・二	一八三・七	五一・六

これを見ると、特に需要増の大きな小額貨幣の發行高が、明かに不足してゐたことが判る。小さな商店で結局この小額貨幣が不足を告げたのは至極當然である。小額貨幣が姿を消し始めて、紙幣の剩餘が取り難くなると、皆が競つて小額貨幣を藏ひ出したので、それは忽ち姿を消してしまつた。かやうに小額貨幣が珍らしくなると、國會においてアー・イー・シンガーレフ氏が話して聞かせたやうな蒐集狂が出て來た。しかしこの精神病者たちが小額貨幣消滅の原因ではなくて、あべこべに小額貨幣の消滅が彼等を生み出したのである……

ペトログラードで始つた小額貨幣の恐慌は、急速に全國に波及した。小額貨幣の缺乏は、その大量ストックがなく、かつ造幣局としては急遽これを製造することが不可能であつた——また以前にはそんなことは考へてもゐなかつた——ために起つたもので、その結果は流通面から小額銀銅貨の消滅を



來した。一九一五年八月五日、即ちペテルブルグにおける小額貨幣恐慌の起る以前に、國會の委員会で、各地の民間團體の例にならつて、國家が小額紙幣を發行する必要があるといふ問題が提出された時、大藏大臣はその意見を一蹴した。そして「大藏省がこの意見に従はなかつたのは、實に現地ではそれこれの難局を突破する方法を常に發見出来るものと認めただからである。余は政府の印を捺して右のやうな一、二乃至三哥の紙幣を發行出来るものとは想像いたし兼ねる」(註一)と述べた。

(註一) 議事録、一九一五年八月四―六日、七三―四頁。

しかしながらこの切實な通貨問題の解決を廻避せんとする大藏省の態度が必然の結果たる小額貨至の消滅を來すや、大藏省も遂に晩播ながら民間團體の例にならふことに決心し、一九一五年十月末に兌換切手を發行し、その後、國庫小額紙幣を發行し、これは十二月後半期に出現した。一九一六年一月一日までに、これらの切手及び小額紙幣の流通高は殆んど四千萬留に達してゐた。

小額貨幣恐慌の原因は至極明白であると思ふ。その原因は大藏省の目先の利かなさにあるのであつて、大藏省は一九一六年一月一日までに通貨量が一四二%方の増加を來した時、小額紙幣の量を僅か五一・六%しか増加しなかつたのである。人口一億七千五百萬餘のわが國に、小額貨幣は僅か一億八千三百七十萬留、即ち一人當り一留五哥しかなかつた。貨幣の流通高が少く、その循環も急速であつた頃には、この小額通貨量が充分であつた。しかし通貨高が二倍半の増加を來した結果、その循

環速度が緩漫になり、通貨が民間の金入に晝寝するやうになると、直ちにその不足が暴露したのである。

かくの如くこの恐慌の責任者は大藏大臣ばかりである。ところがこんな説明はむろん爲政當局や、いつ如何なる場合に、権力がどんなことをしても、必ずこれを支持して行くロシヤ輿論の潮流の氣に入らないのである。先づマルコフ二世が一九一五年八月十八日、つまりペトログラードで騒動のあつた翌日に國會で發言した。氏の意見に従ふと、小額貨幣の消滅は、「疑ひもなくドイツ側から放ち、かつ疑ひもなくわが留信用券の相場引下げを目的とする、悪意の煽動の結果である。諸君がこの事件を熟考されたら、單に交換するばかりでなく、留紙幣は四十哥か五十哥しかしませんよ、何なら一留紙幣と二十哥銀貨二つと換へて上げませうか、と到る處で話合つてゐるのに氣がつかれるであらう」。マルコフ二世はその防止策として、犯人を「警察署へ引致して、處罰せよ」と勸告した。その頃、留の相場は七〇哥〇で、國內産金の打歩は二〇哥以下であつた。従つて、誰一人、留が四、五十哥、——しかも金哥ではなくて、小額銀貨の四、五十哥だなどと云ふ筈はないのだ。計算をすれば、前掲の通り小額銀貨の一留は、金の二八・六哥である、小額銀貨の刻印を潰して、その含有貴金屬の量によつて評價すれば、その當時の相場では信用券一留に對し、小額貨幣二留四五哥を拂はねばならなかつた。かう云ふ譯で、留相場低落の問題を小額貨幣恐慌の問題まで持ち廻つて行く根據は全然なかつた。



のだ。にも拘はらず左翼のマルコフ二世の同志は、同日の國會の席上、次のやうな動議を提出した。「本國會は、一部の人物が紙幣を小額貨幣と交換することを拒否せる結果、本八月十七日ベトログラードに起りたる騷擾に鑑み、かつ國立銀行の金庫内の小額貨幣のストックは甚だ充分なれば、右の如き兌換拒絶は何等の根據もなく、またかくの如き個人の兌換難は、國內に擾亂を起さしめんとする敵の意圖に一致するものと認め、政府は即時有効なる方策を講じ、もつて支障なき兌換を復活しかつ利己的動機により貨幣の買占及び出溢りをなしたる犯人を處罰に處すべしとの確信を披瀝して、次の問題に移らんとするものなり」。

信用留券の小額貨幣兌換を拒む「何等の根據」が如何になかつたかは、前述の通りである。全く小額貨幣の事實上の缺如より他には、何の根據もなかつたのだ！ スネジコフ氏はこの提案理由を説明して、「國家の難局を悪用せんとする人物に對し嚴刑」を要求し、且つ國會としては「現下の瞬間においては犯罪以上の投機行爲に對し」憤懣の意を表すべしと議場に説いた。

われわれとしては、この問題に利己的動機とか、悪用とか、投機行爲とかどうして發見できるのか、全く驚き入つた次第である。留相場が七〇金哥の場合に、僅か二八・六金哥の金屬しか含有してゐない小額通貨を隠匿するのは何の意味もないのだ。假りに相場が二五金哥まで低落したら、また話は別だ。さうなれば、現在金貨がなくなつてゐると同一の動機で、小額貨幣も國民流通から姿を消す

であらう。これに反して、商人としては兌換を拒めば商品の賣行も、商品流通も減少するので、かうした拒絶は有利ではない。にも拘はらず右の動議には、實に商人たちが「利己的動機よりして」、「投機」の目的で紙幣の小額通貨兌換を拒んだのだと論告してゐるのである。

残念ながらこの動議は、問題の本質には變りのない、イー・イー・ドミトリユコフ氏の多少の修正を加へたばかりで、國會の採擇するところとなつた。(註二)國會の多數派はこの投票を行ふことによつて、貨幣流通の實際に暗いことを示し、小額貨幣恐慌の原因に對する無理解を露呈し、この恐慌を排除する力のない對策を進言したのである。

(註一) 國會議事録、一九一五年八月十八日、九三四、九六五―七頁。

かくして小額貨幣のなくなつた犯人が國會の多數派によつて發見された。その犯人は商人である。ところが警保局では、も一人の犯人——ユダヤ人——を指摘した。一九一六年一月九日警保局は回章を發送して、硬貨が流通面から姿を消したのはユダヤ人のせゐだと云つた。「流通硬貨の不足に乗じ、ユダヤ人どもはロシアの貨幣に對する不信を民間に流布し、この價值を下落せしめ、もつて預金者をして國營各金融機關及び貯金局の貯蓄を引出さしめ、かつ金屬通貨は彼等のいはゆる唯一の價値物として隠匿せしめんと努めてゐる。小額切手の發行については、ユダヤ人どもはロシア政府は貨幣を作る金屬さへ持たないから破産したのだといふ流言を盛んに民間に流布してゐる。それと同時にユダヤ



の手先は各地で高價に銀貨や銅貨を買占めてゐる」。

この回章に現はれた小額貨幣恐慌の正しき理解への一步前進は、流通硬貨の不足を承認した點である。それから先は出放題な非難である。ユダヤ人どもはロシアの貨幣に對する不信を民間に流布してゐるといふが、それから先はイギリスとかドイツとかの金を使へと勸告してゐるのだらうか？ それとも商取引に當つて全然貨幣を使ふなと宣傳してゐるのであらうか？ この非難が如何に痴けてゐるかを判断するには、こんな疑問を出して見ただけで充分だ。ユダヤ人どもは硬貨の不足につけて、ロシアの貨幣の價値を落さうとしてゐる、といふが、量の少い貨幣をどうして價値喪失できるのだ。ユダヤ人どもは貨幣の價値を落すことによつて、預金者をして貯金局から貯蓄を引出させようとしてゐるといふが、國民としては價値の下らぬ紙幣でなくて、下つた紙幣を慌てて貯金局から引出す理由はないではないか？ 價値喪失過程にある紙幣なら、貯金局に入れて置かうが、手許の財布の中に入れて置かうが、同じことではないか？ このやうなユダヤ人の煽動が實際どれ位行はれてゐたかは、貯金局への預金増の證明する通りである。(單位百萬留)

十	月	一九一三—十四年	一九一四—十五年	一九一五—十六年
十	月	一・五	二一・七	七七・五
十一	月	五・一	二四・八	四二・二

十	二月	〇・七	三五・六	二・二
一	月	一・九	五五・九	一一七・三

この四ヶ月間に戦前の預金高は九百二十萬留であつたのが、開戦第一年度は一億三千八百萬留、第二年度は二億三千九百二十萬留となつてゐる。次はユダヤ人共は硬貨を隠匿せよと勸告し、同時に高い價段で硬貨を買占めてゐるといふ非難だ。自分の買占ようと思ふ物を隠匿しろと勸めるとは一體どうしたことか？ 次に一留の中に二八・六哥の貴金屬しか含有してゐない小額銀貨に對して、高い價段を拂ふとは、どう云ふ意味か？ 次に最後の非難。それはユダヤ人どもは、ロシア政府は通貨を作るための金屬さへ持たないから破産したのだといふ流言を飛ばしてゐるといふのだ。小額貨幣の發行は政府として至つて有利な操作だから、金に詰つた政府はいつも喜んでその發行高を増すのである。故にその不足は經濟的破産の兆候とはなり得ない。

しかしながらこの不足が、小額貨幣の發行を不充分ならしめたため何の必要もない小額貨幣恐慌や街頭騒動を起させた政府の知的破産を證明することは、これまた何の疑問もあり得ないであらう。

警保局の回章については國會で質問が行はれたが、しかしこの痴けたユダヤ人攻撃は本質的な問責は受けなかつた。どうやら第四回國會の議員たちは、この種の問題を眞劍に討議するだけの經濟知識の持合せがない様だ。



この回章に署名した警保局副總裁は、その釋明の中で、本回章の基礎となつた情報は「極めて權威ある筋から入手した」と言明した。政府にとつて極めて權威ある筋が、經濟問題についてこんな無知では、その國の運命も悲惨なものだ。

## 第四章 生産と勤勞者の經濟狀態に對する戰爭の影響

國民經濟に對する戰爭の影響の問題は極めて複雑であるから、これを二つの獨立したテーマに分けて取扱つた方が合理的である。本章においては生産と勤勞者の經濟狀態に對する戰爭の影響を検討し、次章においては商品が生産者から消費者に移る商業及び輸送機關への影響を検討する。問題をかやうに分離すると國民經濟的諸現象の因果關係の認識が著しく容易になる。

生産の三要因——土地と勞働と生産手段及び要具——のうちで、戰爭は勞働に對して最も痛烈な影響を及ぼした。軍隊動員と相次ぐ國民兵召集は、新兵の繰上げ召集と共に、國內勞働力の著減を來した。若干の官立會議所（ベルム、モスクワ、ウラヂミルその他）の概算によると、豫備兵及び國民兵の徵集は、一九一五年春までに男子勞働力の二〇—二五%の減少を來した。例へばモスクワ縣ではこの減少は、ボゴロツト郡一九・二%、ボドリスタ郡二〇・五%、ヴォロコラム郡二二・五%、ルーザ郡一六・一%となつてゐた。（註一）

（註一）「ロシアの經濟生活の若干面に對する戰爭の影響について」、大蔵省出版、一九一六年、三、一六〇—一六一頁。



「耕地整理及び農業總局局報」に掲載された次の記事も、この頃のものである。手許にある統計資料によると歐露の農家数は一千八百萬戸以上で、労働年齢の農民總数は二千七百萬人と算定されている。現在（一九一五年五月初め）第一線部隊の補充として農村は約五百五十萬人の兵士を出してゐるので、歐露農家の労働力は二〇%の減少を來した。（註一）

（註一）「耕地整理農業總局局報」一九一五年第二〇號、四八〇頁。

この徴集率をロシア帝國の全人口にあてはめると、その頃——一九一五年春——約八百五十萬人が軍に召されてゐた計算になる。その後引續いて行はれた徴集は、農務大臣アー・イー・ナウーモフ氏の計算では、この數を労働人口の殆んど四分の一、（註二）即ち一千七十萬人に、またアー・イー・コノヅァーロフ氏の計算では一千五百萬人（註三）まで増大した。どうやらコノヅァーロフ氏の計算が實際に近いやうだ。と云ふのは開戦劈頭軍は約一百万頭の馬匹を徴集し、一九一五年末に更に五十萬頭（註三）を要求したが、周知の通り百萬人の軍を動員するには二十萬頭以上の馬匹を必要とする（註四）からである。一九一六年度の召集は更に國內労働力數を減少した。（註五）

（註二）國會議事録、一九一六年二月十八日、一八三九頁。

（註三）國會議事録、一九一六年二月十九日、一九三〇頁。

（註四）豫算委員會議事録、一九一五年十二月十四日。

（註五）エフ・アー・マクシエーエフ、「戦争經濟」、第三編、戦時の補給。一九一五年、二八頁。

（註五）一九一六年夏、食糧問題特別協議會事務局では、軍の兵數を一千萬人と算定した。食糧問題對策審議統一特別協議會會報、第二三—二四號、五四頁。

のみならず戰場となつた諸縣では召集漏れの男子労働人口は、軍用荷物の荷馬車輸送、既存道路の修繕、新道路の開設、塹壕掘りなどに使はれた。多くの地方では、婦人もこれらの労働に使用された。

この労働力の減少は、婦人、老人及び少年の國民經濟への吸収によつて、著しく埋め合はせがついた。殊にこの代置は農業において順調に行はれた。工業方面では、熟練工の交替は多くの場合不可能であつた。技術的條件からして婦人や少年を採用できる場合でも、力が強くて経験を積んだ男子の代りに、力が弱くて経験のない婦人や少年を使ふと、産業企業の生産力に影響を及ぼさない譯には行かなかつた。次に避難民や俘虜の勞力も大いに使用された。移住民や避難民の數は、公式の統計によると、三百萬人を超えてゐる。（註一）

（註一）國會議事録、一九一六年二月十八日、一八四三頁。

この避難民大衆のうち男子の數は普通より二分の一で、女子と子供の數は普通だとすれば、避難民労働の使用は次のやうな結果を與へたこととなる。

労働年齢の男子……

四一七、〇〇〇人（註一）



◇ 女子……………八三七、〇〇〇

男女未成年者……………二八七、〇〇〇  
(註一) 前掲議事録一八四四頁に農務大臣アー・エヌ・ナウーモフ氏の計算したやうに、農業労働者五十萬乃至百萬人はない。

俘虜のうち一九一六年初めに労働に使用したものは七十萬人以上で、このうち二十六萬人は農業労働に使用された。その上、農業に使ふためにこの上更に十二萬人の俘虜を出す筈であつたが、三月初めにはこの數は十七萬人まで増加した。(註一) 次に一九一六年度には播種及び收穫期に二十五萬人以下の兵士を出す豫定になつてゐた。(註二) 最後に支那人も多少輸入された。これらすべての對策は、國民經濟に對して約百五十萬人の男子労働者、即ち軍に徵集された男子數の約十分の一を提供する筈であつた。

(註一) 前掲議事録、一八四二―三頁、商工新聞一九一六年第五八號、俘虜の労働條件については、「現代物價騰貴研究會の事業」第三輯所載、ヴェー・イー・ミリュニチンの論文、二〇〇―二〇二頁参照。

(註二) 前掲、議事録、一八四三頁。

明かに戦時下においては、婦人及び少年労働の廣汎な使用は不可避である。また禁酒の結果、國內に残つた労働者の生産力が高まつたことも重大な意義があつた。官營酒類販賣停止は、國民經濟の中の生産労働の總額を歴然と増加した。農村では飲酒のため家を外に歩いてゐた多くの農民が自家の經

營に従事し、働くやうになつた。またこれまで仕事の出来なかつた者も、眞面目に働くやうになつた。彼等はどの仕事もきちんきちんとやつて行き、その家計は農業用具がよくなり、家族が豊かに暮すやうになつた。國民生活に對する火酒販賣禁止の影響に關する地方自治體の統計類には、この種の記事が一杯ある。例へば、ポルタワ縣では、「大酒呑みや、火酒のため破産した昔の金持ちの旦那たちが、火酒販賣停止このかた、倒れた建物を整理し、きちんきちんと土地の耕作や播種をやり、前に賣拂つた家畜を買もどし、立派に經營を行ふやうになつた」とコンスタンチノグラド郡から報告してゐる。家屋の新築とか、改造とかいふ記事は特に多い。この點についてある記者は「今では村の姿までが變つた」(ピリヤーチン郡)と述べてゐる。畑仕事の時機をきちんきちんと守るやうになつたことは、他の報道にも出てゐる。「土地の耕耘は時期を失せず行はれ、主人は皆、經理が細かになつた」(コペリヤーク郡)。「昔はほつたらかして置いた仕事も、今はしてゐる。たとへば春蒔地を選んで置くべきところも、火酒を飲んでゐる間に耕さずに放つたらかして置いたのである」(ポルタワ郡)。「土地の半分は土砂に蔽はれたまゝ、播種してあつたが、今では土地は全部立派に耕作してある」。昔の呑ん兵衛たちの經營に家畜が——豚、羊、馬までが——顔を出したといふ記事も少くない。コストロム縣からも同じやうな報道が來てゐる。「澤山の怠け者が家に歸つて、仕事を始めてゐる。この村には火酒のため素寒貧になつたガラス屋がゐるが、今では見違へるほどの立派な主人になつてゐる」(コストロ



ム郡)。「今では酔つ拂ひたちが皆仕事を始め、大きな家を建て、家畜を置いてゐる」(マカリエフ郡)。「一番ひどい呑ん兵衛で、一週間に一日しか働かなかつた男が、今では一番の働き者となつて、立派な着物を着てゐる」とはキネシエム郡からの報道である。モスクワ郡では記者たちの報道によると、「皆が氣を配るやうになつたので、目立つて経営がうまく行くやうになつた」。「経営方法の改善が目につく。酒を飲んでゐた頃は、秋のうちに畑を賣つてゐたが、今では賣らないで、自分で刈らうとしてゐる。農家経営には、これまでにない規帖面さと注意が拂はれてゐる」。「農産物は自家用として澤山藏つて置き、経営に氣を配るやうになつたが、火酒をやつてゐた頃は、こんな注意など少しも拂はなかつた。今日は酒だ、明日は頭が痛いし、明後日はまた祝酒だといふ具合であつた」。多くの通信員たちは、農村において一般に建物や家畜や馬具類がよくなつたことを指摘してゐる。モスクワ郡の特長は、通信員たちがいはゆる「酔ひ賣り」がない事實に與へてゐる重要性である。「酔つたまぎれの賣拂ひやいろいろな取引があつたことを絶つた」。「目につくのは、一部の農民がその経営をよく遂行し、農産物をよい値段で賣るやうになつたことである」。「火酒をやめてから、人間が打算的になつた。打算をし、曇のない頭で考へれば、商賣は自然とうまく行くものだ。何を見ても手早くやり、貯蓄をしてゐるので、賣れば儲かるのだ」。(註一)

(註一)「火酒販賣停止はボルタラ縣の住民生活に如何に影響したか」、一九一五年四四頁、「戦争とコストロムの農村」、一九一五年、一〇三—一〇四頁、「モスクワ郡の農村と酒類販賣禁止」、一九一五年、七九—八二、八八頁。

一五年、一〇三—一〇四頁、「モスクワ郡の農村と酒類販賣禁止」、一九一五年、七九—八二、八八頁。

酒類販賣禁止は工場労働者の労働生産性にもこれと同様の積極的影響を與へた。禁酒はまづ祭日後の二日酔を全滅せしめ、缺勤を激減せしめた。月曜日の缺勤は全くやんだ。農民の祭日は二、三日に互つてゐたのが、僅か一日となつた。工場監督局の報告によると、労働者の缺勤罰俸は次のやうに減少した。

年	モスクワ管區		カザン縣(註一)	
	件數	金額	件數	金額
一九一三年	二八九、八三六	一三〇、二九一留	七、九五五	二、一二八留
一九一四年	二二二、〇九四	八六、七八五	四、二二二	一、二四七
一九一五年	一五九、二七六	五三、三〇八	一	—

(註一)「ロシア經濟生活の若干面に對する戦争の影響について」四三六—四〇頁。

それと同時に労働者の體力は強くなり、健康で元氣になつた。労働者の罹病數は激減した。健康で酒氣を帯びない人間は、必ず上手に、手早くしかも立派な仕事をし、その労働は能率的となり、單位時間内には多量の物的價值を生産する。と同時に作業の質も高まり、一段と精緻を加へ、商品の質は改善された。材料や機械器具の取扱ひも正確細心となり、そのためその破損や廢れも著減した。モス



クワ工場主協會の調査票によると、缺勤の減少と、労働能率の向上の結果、労働者の生産性の増大は、繊維労働者三・一%、金屬労働者一〇・五%となつてゐる。(註一)

(註一) エフ・クバツキー筆、労働者の禁酒、「ロシアにおける財政政策の諸問題」第二卷、第二輯、一九一六年、四八頁。

生産のいま一つの要因たる生産手段及び用具に對しては、戦争はこれとは比較にならぬほどの僅少な影響しか與へなかつた。農業においては、馬及び牛の軍用徴發が最も重大であつた。軍は約百五十萬頭、即ち國內馬匹總數の約六%を徴發したと認むべき根據がある。尙ほ動員は農繁期の直前に行はれたこともあり、かつ一定の條件に合格する馬匹を全部取上げたので、農業に與へた被害は、ある場合には完全な馬匹皆無状態に陥るほどであつた。かくて一九一五年末に到つて初めて、農家一戸あたり馬二頭、大經營においては耕地十二デシヤチンあたり二頭を義務的に残すこと(註二)といふ法令が出た。

(註二) 「國會議事録」、一九一六年二月十八日、一八四一頁。

牛の徴發は戰場およびそのすぐ背後地の各縣に對して、殊に重壓を加へた。これらの地方では徴發された家畜の數は、五〇—六〇%に達した。この徴發は、地元農民から牛乳を奪つたばかりでなく、軍と國家へのバターの供給をも困難ならしめた。と同時に、それは次年度の收穫、特に西部非黒土諸

縣の收穫に大影響を及ぼすであらう。西部黒土帶諸縣では、去勢牛の徴發は農業の遂行に影響するであらう。次に農業にとつて本質的な重要性を持つのは、農業機械、特に收穫用機械——刈取機、馬索耙、東禾機(及びこれに必要な相繩)、打穀機——の國內生産及び輸入の激減、ならびに人造肥料の不足であらう。過燐酸は、國內の硫酸不足のため、全く市場から姿を消した。播種用燕麥の不足を感じてゐる所もある。

工業にとつて重大意義を持つのは、原料、半製品及び補助材料の海外輸入減である。のみならず國內で燃料及び多數の原材料が不足を來したため、國防用の重輕企業にその配給の優先權を與へたので、民需向の仕事をしてゐる諸企業は大影響をうけた。機械、備品の修繕は戦時下においては、最少限度にきりつめて行はれてゐる。

國民經濟的生産の第三の要素たる土地の使用については、戰場以外の地方では、最も大きな影響を及ぼしたのは一九一五年二月二日と十二月十二日の敵國民の土地所有廢止令である。中央統計委員會で行つた。一九一五年二月二日の法令により廢絶さるべき土地面積概算によると、これらの土地の總面積は二百三萬八千七十二デシヤチンで、これらの土地の分布してゐる一〇七縣と九共同體オブリチイナの私有土地總面積の約六・五%に當つてゐる。個々の縣及び郡では、この割合は非常に高くなつてゐる。即ち

タヴリチエスカヤ縣

二三・六%

ベレコープ郡

四〇・六%



一九一五年十二月十三日の法令によつて廢止範圍の擴大に伴ひ、廢止された土地の總面積は三百二十五萬六千三十三デシヤチンに増加したが、このうち二百九十五萬八百三十二デシヤチンは敵國出身者の所有で、敵國々籍者の所有地は僅かに三十萬五千一百八十一デシヤチンにすぎなかつた。(註一)

(註一)「商工新聞」一九一六年第五五號及び一五八號。

強制手續をもつて廢止を豫定された土地で、經營が行はれないことは明白である。南部各地からのあらゆる情報は、これらの土地においては作付面積の大減少を來してゐると云ふ點で、いづれも一致してゐる。ひろんさうなるものと想像するより他はなかつたけれども、地方官憲にとつては、ドイツの重壓を防止せんがために行つたこれらの對策からこんな結果が出ようとは、全く思ひがけないことだつたらしい。官憲は慌てて、特別の對策を講じ始めた。かくて一九一六年三月初めには各新聞に、次のやうなオデッサ電報が出た。「オデッサ管區においては、オーストリア、ハンガリヤ及びドイツ出身者にして、不動産沒收簿に記入された者はその所有地内にある家畜器具類の轉賣、森林、樹木栽培地の伐採および破壊、ならびに建造物の破壊を禁止された」。(註二)この廢止地における強制的耕作及び播種の法令がどうして發布されなかつたかは、驚くに堪へない。

(註二)「商工新聞」、一九一六年第五六號。

國會は、憲法第八十七條によつて施行されたこの法令には、ほんの一寸觸れたにすぎなかつた。ペー・エヌ・ミリュエーコフ氏の話によると、前内務大臣マクラーコフの告白したが、同大臣がエカテリノスラフ縣を敵國國籍者土地所有廢止法の効力範圍に入れたのは、上院議員のストルーコフから、この方策はロシア地主を百年の農業紛糾から救ひ、立憲民主黨の綱領にある私有土地強制收用の危険から救ふのだと説得されたからである。サラトフ縣はこの法律には含まれてゐないが、「もし戰爭が終了するまで貴下がドイツ人の土地を渡さなければ、こちらから行つて、自分で土地を取上げて、ドイツ人共は首を落してやりませう」とペー・エヌ・ミリュエーコフ氏に云つたさうである。この土地所有廢止に伴ふ關心と食慾はまさにこの通りである。二月二日の勅令の原文も特色がある。アー・エフ・ケーレンスキー氏が國會で指摘したやうに、「本法はその兩編を通じて、本法によつて沒收を受くべき土地は村<sup>セルスコエ・オプシチエ</sup>民<sup>ドヴォリヤニ</sup>會の所有地及び村民會員として所有してゐる土地だけであると斷つてゐる。従つて士族の所有地、村民會を脱退して普通のロシア地主や土地所有者として土地を買つた者の土地は、それが數萬デシヤチンに及んでも、本法から何等の拘束を受けないのである。のみならず、諸君、右のやうな村民會分讓地の所有者は、その祖先、本人または子孫がロシアのために參戰したと立證すれば、沒收を受ける義務をまぬかれる權利を與へられてゐる。但しそれは彼の祖先、本人または子孫が士官乃至義勇兵としてロシアのために血を流したことを證明した場合のことである。しか



しその所有者が一兵卒としてわが戦列で戦ひ、わが國の農民たちが血を流してゐるやうに、彼も血を流したのなら、彼もわが國の農民と同じ立場に置かれる。その事實が彼等を社會的に均等ならしめるのだ。本法の立案者にとつては、ドイツの農民もロシアの農民も同一の灰色の家畜にすぎない。どちらも何等の特権も享有しないのである」。

ある入植民がエフ・イー・ロヂーチェフのところに来た時、氏は「ふとこの人の祖先は、内閣總理大臣のシチュルメル氏の祖先より前にロシアへ来たことを思ひ出した。この男は農民で労働者だから收奪を受けるが、ドイツ人の地主所有地又はドイツ出身者の地主所有地は收奪を受けないのだ、諸君、余はドイツ人の財産收奪論者でも、ドイツ系の姓を持つた地主たちの收奪論者でもないが、余は諸君に問ひたい、正義はいづれにありや？ またこの（國會）議場において農民の收奪を投票するとなつたら、何のためにも一つの收奪をたじろく理由があるか？…… 三日前の夕刻、本議場で、委員會の席上、これらドイツ出身者の非愛國性を非難する聲が擧つて、メイエンドルフ男爵は、「さうだ、彼等の土地を取上げるからだ」と答へられた。しかもさうしたドイツ系の者は、土地を沒收されたにも拘はらず、十萬人も戦線で戦つてゐるのである」。基本法第八十七條によつて施行された本法の特殊性は、國會が一九一六年度の内務省豫算案を審議した際、一つの緊急動議を採決したことである。その動議には、「ドイツの重壓排除策の失敗は、差當り個々の地方における播種面積の減少と、經濟生活

の破産を來したにすぎず」（註一）と述べてある。

（註一）國會議事録、一九一五年八月三日の議事、四二七、五〇五頁、一九一六年三月四日の議事、二七六八―九頁、一九一六年三月八日の議事、三〇二四頁。

個々の生産要因に對するこれらすべての戦争影響が、ロシア國民經濟の全般的生産性に如何なる作用を及ぼしたかは、個々の部門の生産性の變化に立脚すれば判断できる。茲では穀物の播種面積と、製造工業の労働者數と、採取工業の労働者數及びドネツ炭田の石炭採掘高の數字を擧げるとどめ

る。  
作付面積に關する我々の資料の出所は、中央統計委員會の「……年度收穫」といふ出版物である。今日まで發表されてゐるのは一九一四年度までは全穀類の收穫高で、一九一五年度は秋蒔穀類の收穫高だけである。一九一五年度の春蒔穀類については、大藏大臣の一九一七年度豫算案説明書に引用してある、同中央統計委員會の數字を使用する。一九一六年度については、内務省村食糧班局の情報に基く特別食糧協議會事務局の、秋蒔穀類（註一）の統計がある。

（註一）「食糧問題特別協議會々報」第二二號、六六一―七一頁参照。

これらの統計によると秋蒔穀類（秋蒔大麥を含む）と春蒔穀類（燕麥および馬鈴薯を含む）の作付面積は開戦以來次のやうに變化した。（單位デシヤチン）



	秋 蒔	春 蒔	全 穀 類
一九一三年	三五、六九二、四四二	六七、〇〇五、一四一	一〇二、六九七、五八三
一九一四年	三四、二〇七、九四三	六五、三五九、四三八	九九、五六七、三八一
一九一五年	二九、七二四、一三九	五八、八三六、〇〇〇	八八、五六〇、〇〇〇
一九一六年	二五、六二七、三七七 <small>(註二)</small>		

(註二) 秋蒔大麥を含まぬもの如し。

かやうに一九一三年度に比すれば、作付面積は一九一四年度三%、一九一五年度一四%とそれぞれ減少してゐる。

一九一五年度には豊作だったから、食料穀物の總收穫高は作付面積よりも遙かに少い減少に終わった。總收穫高は次の通り、(單位百萬ブード)

	秋 蒔	春 蒔	全 穀 類
一九〇九—一三年平均	一、七五七・六	一、九八一・七	三、七三九・三
一九一四年	一、七五六・五	一、九一三・三	三、六六九・八
一九一五年	一、八四七・八	一、八八三・二	三、七三一・〇

上述の作付面積減少の一原因は、敵軍のため領土の一部を占領されたことである。その理由によつて、一九一四年度にはカリシ、ケレツク、ベトロコフ及びワルシャワ各縣の秋蒔穀類の作付面積の統

計がなく、その他のポーランド領では報告が不完全である。次にバツーム州の統計がない。ホルム縣では收穫高の統計がない。春蒔作付面積については、ポーランド領の全州、ホルム縣及びバツーム州の統計がない。一九一五年度についてはポーランド領の九州、ホルム、ヴォルイン、ポドルスク、クルリアンド、コヅノ、ヴィレン、グロドネン、エリサヴェトポリスク各縣及びバツーム州の穀類作付面積の統計がない。最後に、一九一六年度秋蒔作付面積については、一九一五年度のエリサヴェトポリスク縣を除く他の全縣及びミンスク州の統計がない。

次に開戦以來、個々の州、縣から報告の來なくなつたところもある。これは主として東部シベリヤ、トルケスタン及びザカフカーズの諸地方である。内務省村食糧班局の統計には、歐露の一連の縣——アルハンゲリスク、ヤロスラーヴリ、オリョール、ヘルソン、オレンブルグ各縣及びチユール州——が抜けてゐる。

かう云ふ譯で、上記の作付面積減少のうち、戦争の影響による國內經濟生活の混亂と云ふべきものは極く一部にすぎない。一九一六年度秋蒔作付面積の報告の來てゐる歐露四十七縣州の作付面積は次の通りである。

一九一五年	二七、六六六、四二六
一九一六年	二六、七二九、一〇〇



この統計によれば一九一六年秋蒔面積は僅か三・四%の減少を見たにすぎないことになる。村食糧班局の情報によると、五十三縣州の秋蒔面積は七・一%の減少となつてゐる。

手許にある不十分な資料で判断のつく限りでは、内地諸縣の作付面積減少は、一連の原因によつて起つたものである。普通は凶作のあとには作付面積が減少するが、一九一四年度は決して豊作ではなかつた。火酒醸造の停止は火酒醸造工場附屬の馬鈴薯作付の減少を來す筈であつた。對獨輸出の杜絶は、通常その産物を輸出してゐた、南部地方の扁豆及び豌豆の作付を減少すべき筈であつた。物價騰貴や燕麥の不足もこれと同様の影響を及ぼした。課税調査員の報告によると、種子用燕麥の不足は一九一五年度にノヴゴロド、ウラデミール、カールガ、コストロム、モスクワ及びビツヴェーリの各縣で春蒔作付面積の減少を來した。多くの地方では、いつもは燕麥を蒔く春蒔畠に、麻、馬鈴薯、クロウヅア、矢矧豌豆が作つてあつた。(註一)

(註一)「ロシア經濟生活の若干面に對する戦争の影響について」、七一、七四、七五、七七、七八頁。

南部諸縣においては入植民所有地の強制廢止が強い影響を與へた。「商工新聞」の報道によると、エカテリノスラーフ、タヴリツチ兩縣の全部及びヘルソン縣の一部では、最も作付面積の減つたのはドイツ人入植民の經營で、彼等はその土地所有權の廢止を怖れて、畑の作付を危んでゐるのである。ヘルソン縣會では、入植民所有地廢止が作付面積減少の本質的原因であると認めた。彼等入植民は、そ

の土地所有廢止の際に土地耕作費を賠償して貰ふといふ確信を持たないので、田畑の作業を差控へてゐるのである。ところが同縣内の廢止地面は五萬五千デシヤチンに及んでゐるので、もしこれが全部作付されなければ、縣は食糧救援を受ける必要に迫られるであらう。(註一)

(註一)「商工新聞」一九一六年、第三〇及び四九號。

しかし作付不充分的の主たる原因は勞働力の不足である。戦前には農村では餘剩勞働力は甚だ大きなものであつたが、一九一五年末と一九一六年年初の動員の結果、一九一六年度の勞働不足は農業面で相當激烈に感ぜられてゐた。一九〇〇年度分の中央貧窮化委員會の統計によると、歐露四十七縣の全體について見ると、農民の分有地は、これをその住民中の勞働力に相當したものと比較すれば、九七・三%少なかつた。従つて住民中の殆んど八〇%が、餘剩勞働力となつてゐたのである。(註一)むしろこれらの勞働力の一部地主私有地を耕作したし、また一部は副業に従事してゐた。にも拘はらず農村の餘剩勞働力は甚だ大きかつたので、一九一五年度には一九一四—五年の動員があつたにも拘はらず、農業勞働者の不足は殆んど感ぜられない程であつた。

(註一)一九〇一年十一月十六日勅命によつて設置された、一八六一年以降一九〇〇年に到る、他の歐露各地と比較した、中央農業諸縣の農村住民の財産變動問題研究委員會の資料、第三輯、一九〇三年、一六三頁。

農業における勞働力不足は次の三つの形式で表現される。(1)地主私有經營の農業勞働者及び作付面



積の減少、(2)地主私有小作地及び小作作付の減少、及び(3)農民私有地の作付面積減少。次に労働者不足は土地耕耘の質を低下し、收穫の成功率を下げるに違ひない。われわれの手許には地主私有地と、農民分有地とを含めた一般的作付面積の減少と、私營地主と農民とを別々にした作付面積減少の資料があるにすぎない。

ロシアの各地では、この労働力の不足は緩急一様ではない。たとへば工業的なモスクワ附近の諸縣や、女の國と云はれるベトログラードやノヴゴロド地方では、農業労働は女がやるのが普通で、男は殆んど出稼をやつてゐるので、動員は作付面積には本質的な影響を及ぼすことは出来なかつた。黒土三輪作地帯——西南諸縣、小ロシア諸縣、中央黒土帶諸縣及びヴォルガ河中流諸縣——では、草原地方へ労働者を出すのが普通であるから、農村における男子労働者數の減少は、農業出稼の激減を來す筈で、地元の作付には大きな被害はないに違ひない。これに反して草原地帯——ノヴォロシースク、ヴォルガ河下流、北カフカース諸縣——は地元の労働者を失ふばかりでなく、入稼労働者も失ふに違ひない、作付面積の最も甚だしい減少を豫想すべき地方は實にこれであつた。食糧部の統計はこの想像を完全に裏書した。秋蒔穀類作付面積の減少は次のやうな割合になつた。(單位%)

第一種 北部及び沿湖諸縣.....	二・一
中央工業地方諸縣.....	一・七
第二種 西南諸縣.....	〇・八
小ロシア諸縣.....	一・九
中央農業諸縣.....	〇・一
第三種 ノヴォロシースク諸縣.....	八・五
東南諸縣.....	一八・五
ヴォルガ河下流諸縣.....	四〇・〇
カフカース前面諸縣.....	二一・〇

歐露の農民の作付面積は全體として五・七%減、地主私有地では九・九%減であつた。

しかし一九一六年度の秋蒔は、一九一五年の秋、最後の大動員の行はれる以前に行はれてゐた。一九一六年の春蒔はこれよりもつとひどい作付不足を來すに違ひない。もし秋蒔が七・一%の減となつたとすれば、一九一六年度の春蒔と一緒にすれば、多分一〇乃至一五%の對平年減となるであらう。戦時下の工業の状態にも主として労働力の減少が影響した。わが國の工業製産品の輸出額は僅少なもので、わが國には輸出專業の工業がないのだから、開戦以來の對外輸出の激減は工場工業には重壓を加へなかつた。外國貿易の杜絶で被害を受けたのは、輸出貿易商店ばかりであつた。戦時下の事情は贅澤品に對する需要を減少しただけであつたが、このために困つたのは主として絹織物業と毛皮業だけであつた。流行の綿織業や毛織物業も作業を縮小した。開戦第一年度の最新の流行服と云つたら



看護婦の綿服であつた。酒類販賣停止は火酒、麥酒醸造業を殆んど全く停止せしめ、火酒及び麥酒瓶の生産を同様に停止せしめた。その他の部門のうちで最も被害を蒙つたのは木材及び建築材料業である。これは木材の對外輸出が困難で、また最も企業熱の高い青年事業主が出征したため、鐵道や都市及び農村まで建設事業が全く中止された結果である。そのため製材、煉瓦、石灰、セメント、タイヤなどの工場が生産の大縮小を行つた。同時に窓ガラス及び家具類の需要も低下した。林業地方では伐採、挽割、搬出の稼ぎが、また都市では大石、石工、左官の稼ぎが減つた。

これに反して、主として軍需の増大のお蔭で、金屬冶金業、羅紗及び一般紡織業、皮革業及びタバコ業の各工場が、特に盛大に操業した。陸軍省の註文の仕事をする時は、工場監督當局は工場主をして女工及び少年工の時間外労働、祭日労働、深夜業を許してゐた。この深夜業は羅紗工場や麻製絲織布工場で盛んに行はれた。(註一)

(註一)「現代物價騰貴研究會の勞作」第三輯、二二〇頁、「工場監督官報告集」一九一四年度、三〇一—三一頁、「一九一七年度豫算案に對する大藏大臣説明書」第二編、五四—五五頁。

要するに工場労働者数の減少は微弱であつた。工場監督官の統計によると、工場監督を受ける各種工場には、一九一三年末にはワルシャワ工場管區を除き一百九十六萬六千一百四十四名の従業員があり、一九一四年末は一百九十六萬八千六百六十名、一九一五年末は敵軍が更に前進したにも拘はらず、一

百九十二萬二千五百七十二名の従業員がゐた。労働者の一部は動員の際に、直接工場から引張られ、また一部は當時男子労働力の不足を痛感してゐた農村の經營に歸つた。農村では待望の客人として工場労働者を迎へた。それは一九〇五—六年には似ても似つかぬ光景であつた。

工場では不足の男子の代りに婦人と子供を使つた。工場監督官の統計によると、モスクワ管區の工場労働者は性別及び年齢別で次のやうに變化した。

	一九一四年一月一日		一九一五年一月一日		一九一六年一月一日		二年間の増減
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
成年	三六六、七二三	三〇三、七八〇	三六五、一五六	三一七、〇一九	三一六、四三六	三二、八二四	▲七〇、二八七
未成年	三五、四二七	三三、七二七	三八、七〇四	三四、二五五	四三、八七七	八、四五〇	▲七〇、二八七
少年	六、一八一	六、一八一	六、四五二	六、一八一	八、一九一	二、〇一〇	▲七〇、二八七
計	三七八、一七三	三七三、九二七	三七〇、九一〇	三七〇、一四九	三六八、四一四	一、四八八	▲七〇、二八七

従つて労働者数は少ししか變らなかつたが、その構成は非常に悪化した。残念ながら、わが國には資料がなくて、工場工業の生産性がどれだけ低下したかを判断することが出来ない。

開戦第一年度に特色ある變動を嘗めたのは紡織業であつた。呉服類の卸商業は、動員に伴つて個人



荷物の引受けが停止したため、開戦劈頭の數日間は死んだやうになつた。秋のシーズン用の商品を仕入れるためモスクワに來た田舎の客たちは、初めの豫定よりずつと少く品を選つて行つた…… あらゆる繊維工場では、市價を強調するため、また勞働力、燃料、染料、藥品の不足もあつて、開戦劈頭の數週間は五〇―六〇%の生産縮少を行つた。しかし一九一四年の八月中頃には、もう呆然自失な五里霧中の代りに、正常な事業の進展を見、織物類のお客もまたやつて來、資金も再び流れこみ、銀行も工業の要求に對して大いに迎合するやうになつた…… 嘗つて見ない大量の軍註文と、戦前までポーランド王領で生産されてゐた商品への需要とで、戦前までは辛ふじて生存を保つてゐた多くの繊維工場が、一九一四年の冬から一九一五年の春にかけては殆んど晝夜兼行で操業した。ただ棉花と燃料が不足したばかりに、一層の事業擴張を妨げられただけである…… これまでには賣れもしなかつたストックが、間もなく賣切れてしまつた。政府註文によつて仕事をしてゐる工場では、一、二、三月は祭日も操業した。復活祭には織布及び紡績部は一週間半の操業中止を行つたが、染色部は祭日を三日で済んだだけで作業を再開した。既に一九一四年十一月以降、主として中央地方の工場は、朝の五時から夜の十時まで作業し、(以前は朝の七時から夜の六時半まで)、規定外の超過時間には二倍の賃銀を支拂つてゐた。にも拘はらず多くの工業家は引受けた註文をこなし、きれすに、自製の綿糸をやつて一〇〇―二〇〇臺の小工場に下請をさせざるを得なかつた。これらの小工場ではこれまで沈滞状態で

あつたのが、また活氣を呈して來た…… 四月以降になつて棉花、燃料、勞働力が騰貴したため、需要は減退しないのみか、却つて増大したにも拘はらず、各工場は操業を短縮した。(註一)

(註一) 「開戦九ヶ月間におけるロシアの經濟生活と住民の經濟狀態」、六一―六四頁。

ウラヂミル縣についてもこれと同じ報道がある。同縣では「宣戦布告後、大衆的生産縮少が起つた。各工場は努めて最少生産高を確立し、一日の勞働時間とか一週の勞働日數を減ずる方法で、作業時間を短縮した。その後一部の工場は機械の一部を停止し、中には全然作業をやめたところもある。しかしこんな状態は永くは續かなかつた。二、三ヶ月もすると各工場の活動が活氣を呈し、年末まで次第に向上して行つた。まづ勞働者數の増加を認め、次に非作業日數が減じ、最後に深夜業と時間外勞働の盛行を見るに到つた」。(註二)

(註二) 「工場監督官報告集」、一九一四年度、二九頁。

ドネツ炭業の状態は採取工業に對する戦争の影響の指標となる。勞働者數ならびに石炭及び無煙炭採掘高(單位百萬布度)に次のやうであつた。

七 月	一九一三―四年度		一九一四―五年度	
	勞働者數	採炭高	一勞働者當り	勞働者數
	一五四、八〇〇	一二二・九	七九四	一七〇、二一〇
				採炭高
				一〇八・四
				一勞働者當り
				六三七



月	一九一五—一六年度				一九一六—一七年度			
	労働者数	採炭高	一労働者當り	労働者数	採炭高	一労働者當り		
八月	一五八、三二九	一〇六・七	六七四	一三九、九六〇	九八・二	七〇二		
九月	一六一、〇八〇	一一八・二	七三四	一五二、四九五	一二九・三	八四八		
十月	一七〇、一五〇	一三八・六	八一五	一七五、六九五	一四九・六	八五一		
十一月	一九一、三四九	一六一・一	八四二	一九五、九六〇	一五七・一	八〇二		
十二月	二〇〇、八〇〇	一三八・九	六九二	二〇三、九九〇	一四四・四	七〇八		
一月	二〇八、二三〇	一七一・二	八二二	一九一、四六〇	一四〇・二	七三二		
二月	二〇九、九六〇	一五七・四	七五〇	一七六、五〇〇	一三七・〇	七七六		
三月	一九二、六一〇	一六五・二	八五八	一六五、〇〇〇	一一一、四	六七五		
四月	一八一、一六五	一〇七・三	五九二	一六七、〇〇〇	一三七・二	八二二		
五月	一九三、四七五	一四七・七	七六三	一七七、〇〇〇	一三五・二	七六四		
六月	二〇四、一七〇	一四七・八	七二四	一七〇、〇〇〇	一二九・四	七六一		
七月	一八五、五一〇	一六八・三〇	九〇七二	一七三、七七二	一五七・七四	九〇七七		
全年度	一九一五—一六年度			一九一六—一七年度				
八月	一六三、六〇〇	一一一・五	七四三	二二七、〇〇〇	一四四・〇	六三四		
九月	一六三、六〇〇	一一六・九	七一五	二二七、〇〇〇	一三七・〇	五七八		
十月	一七七、五〇〇	一三八・四	七八〇					
十一月	一九八、〇〇〇	一五五・八	七八七					
十二月	二〇七、五五〇	一五八・三	七六三					

月	一九一四年八月		一九一五年七月	
	労働者数	採炭高	労働者数	採炭高
十二月	二〇八、五〇〇	一四五・四	六九七	
一月	二〇七、九五〇	一五〇・〇	七二一	
二月	二一三、五〇〇	一四九・〇	六九八	
三月	二一九、五〇〇	一七〇・〇	七七四	
四月	二一八、五〇〇	九五・〇	四一六	
五月	二二八、五〇〇	一四〇・〇	六四一	
六月	二二一、〇〇〇	一五二・〇	六八八	
全年	二〇一、四七五	一六九二・三	八四〇〇	

一九一四年八月には動員のため採炭夫の数は前年に比し一一・六%の減少を來し、同九月には五・三%の減となつた。十月には對策を講じたため、この労働者数の減少は埋つた。しかし一月以降再び労働者数の不足が始まり、一九一五年七月まで續いた。

大藏省のある出版物には、國內の石炭不足が歴然たる今日、炭坑労働者数がこんなに減少したのは、次の理由によると説明してある。「應召者の巨大な流出は、工業労働力の不足を來し、度々繰返される動員のため更に甚しくなり、特に入稼分子によつて賄つてゐる諸企業、例へばドネツ炭坑、レナ金鑛などの如きにおいて、最も痛切に感ぜられてゐる。春には各工業企業にとつて労働問題の大激化は、多數の労働者が歸農したために起り、農村でも男子労働力の不足は工業に劣らず痛切に感ぜられ



てゐる…… 動員によつて徴集された労働力三〇%の減少と、國內諸縣における労働力需要のために生じた例年の國內各地よりの入稼労働者の減少とは、ドネツ地方の採炭高に影響を及ぼさない譯には行かず、採炭高は当初は一五—二〇%の減少となつた」。(註一)

(註一)「開戦九ヶ月間のロシアの經濟生活と住民の經濟狀態」三四、五一頁。

しかしこの入稼労働者の不足は、彼等の出稼地における労働者の缺乏によるばかりでなく、炭坑の堪へ難き労働条件と低廉な賃銀によるものである。上院議員の經濟協議會の席上、商工大臣ヴェ・エヌ・シャホフスコイ公は、「労働者が炭坑へ行かないのは、炭坑の賃銀が安いからである」と指摘した。シャホフスコイ公は殆んど全炭坑を巡視したが、炭價が一〇〇%の値上りを來した時、賃銀は僅か〇・五%しか上つてゐないといふことを悟つた。公はこの點こそ炭坑労働者數減少の基礎的原因であると認めた」と指摘した。それから引續き討論した結果明白となつたことは、炭坑地方ではある種の生活必需品の價格が二〇〇乃至三〇〇%も昂騰してゐるので、従つて労働者の状態は事實上悪化したといふのである。またその協議會は、ドネツ炭田の労働者住宅条件の劣悪さをも取上げた。(註一)

(註一)「ルスキエ・ツェドモスチ」一九一五年三月廿六日、第六八號附録。

エル・ペー・カフエンガウスの意見に従ふと、「ドネツ炭田の各炭坑労働者數の低下の原因は極めて多種多様である。この點については、動員の結果も、農村における労働需要の増大による労働者の歸

農も、その他多くの理由もあるが、しかし充分の労働者數の流入を阻害する最も重要な原因は極めて困難な労働条件と、比較的低位な賃銀と、不満足な労働者住宅条件である。この困難な労働者の状態は平時にも労働力不足を來したことがあつたから、生活必需品の價格騰貴を伴ふ戦争が、この不足を一段と切迫せしめたのは至極當然である。しかし炭坑主も政府も炭坑労働者の状態改善について何一つ決定的な對策を講じなかつたので、その結果は戦時に現はれたのである。國家にとつて採炭高の最大限の發展を必要とするその瞬間に、労働者は炭坑を逃出して、採炭高は低落したのである」。(註

二)

(註一)「現代物價騰貴研究會の事業」、第二輯、一九一五年二四一頁。

開戦第一年度を通じて、ドネツ炭田の労働者不足は、開戦劈頭に施行された同炭田の炭坑へ行く労働者の無賃乗車制によつても、その後すこしおくれて施行された炭坑従業労働者の軍務徵集免除によつても、埋め合はせることは出来なかつた。

右に挙げた統計數字では、労働者數の數字のほかに、一労働者當り採炭高の減少が注意を引く。それは既に一九一五年の十月以降に現はれ、一九一六年四月には歴然たる性質を帯びてゐる。考ふべき事は、酒好きで月曜日缺勤の名人である炭坑夫の労働には、禁酒が特に強い影響を與ふべきことである。政府の出版物を見ても、次のやうな考察が出てゐるのだ。「労働者の生産力は、企業家自身の證言